

大変やったなあ 朝霧も

平成7年1月17日

兵庫県南部地震の記録

朝霧校区女性の

震災文庫

6

111

正 誤 表

誤

正

p 6 塚原 都子

郁 子

p 1 0 安 藤

安 東

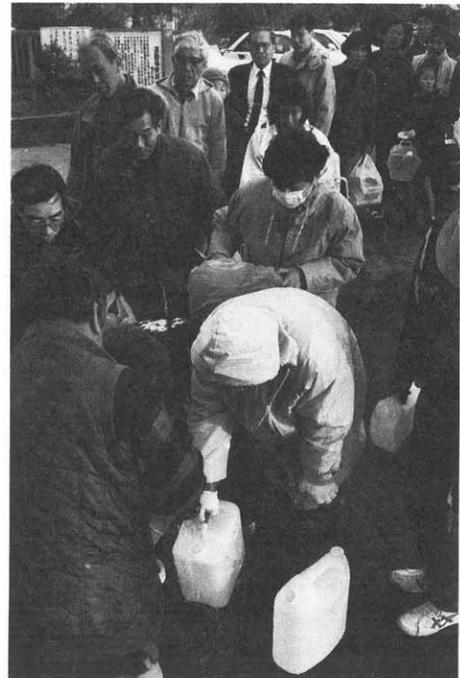
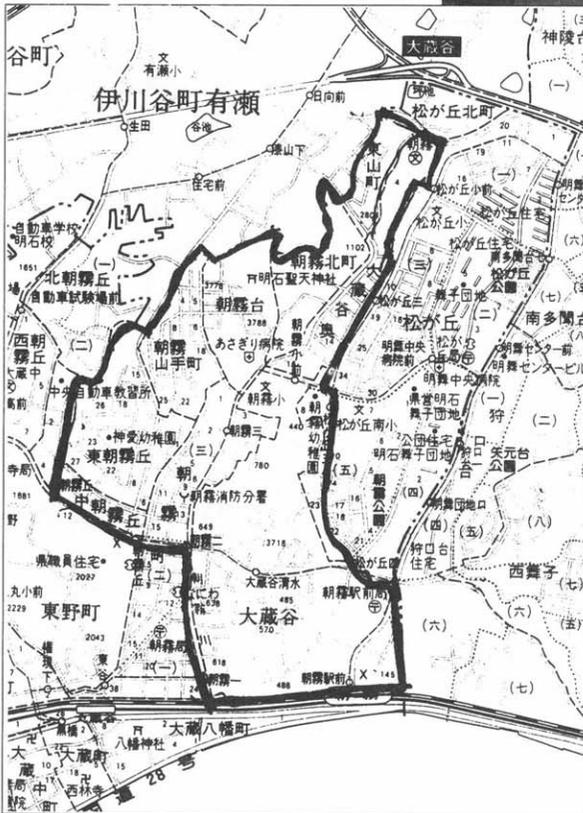
p 4 5 写真 弁木さん方

傳寶さん方

大変やったなあ 朝霧も



どの家も屋根の修理で大変だった
=大蔵谷清水・傅寶さん宅



ふるえるほどの寒さの中、水を求めて長い行列 朝霧小学校

(神戸新聞明石総局提供)

目 次

発行にあたって	1
ごあいさつ	2
手 記	3
朝霧町三丁目	4
朝 霧 台	8
朝霧山手町	16
中朝霧丘	24
東朝霧丘	29
朝霧北町	35
大蔵谷奥東山	37
大蔵谷清水	39
東 山 町	48
北朝霧丘	49
その他の地域	51
子どもたちの声	52
記 録	61
明石市役所	62
消 防	65
警 察	66
交 通 機 関	67
学 校	69
病 院	75
郵 便 局	79
銀 行	80
スーパーマーケット	81
近隣の商店など	82
朝霧地区の防災は	82
朝霧校区女性の会の活動	84
アンケート	88
実行委員・協力員	99
一口感想	99
あとがき	100

〔表紙の写真は被害後の朝霧校区の航空写真。
ブルーシートの屋根が全面的に広がる＝明石市提供〕

「大変やっとなあ 朝霧も」 発行にあたって



朝霧校区女性の会長
震災記録誌作成
実行委員長

おかだ

ひふみ

未曾有の兵庫県南部地震からはや二度目のさくらの季節を迎えました。

痛々しい傷跡を残していた建物はいつのまにか解体されて更地になり、駐車場になっています。傷んだ家はなんとか雨露からは守りたいと外側の修理を終えたところです。新築なつたわが家に、二重ローンを抱えて複雑な思いを秘めながら戻って来た人もいます。あんなに変わったと思っていた価値観が少しずつ元に戻っています。なかなか一つのことに集中できないもどかしさが続きます。心身の痛手の回復を待つ間もなく記憶はどんどん薄れていつています。

同じ時に、同じ地域で、同じ恐ろしい体験をした私たちが当時を振り返り、この稀有な、また悲惨ではあったが貴重な体験をしっかりと記録にとどめることが必要であると考えていた丁度このおり、幸いにも朝霧校区女性の会は、全国の婦人会

のみなさまの温かいお心を兵庫県連合婦人会、明石市連合女性の会を通して復興資金として頂戴いたしました。そこで私たちはこれを機会に校区独自の記録誌作成に取り組んできました。朝霧校区連合自治会のご支援をいただき、体験手記のほか全戸配布のアンケートも収録できました。アンケート協力も含めて朝霧校区のほとんどの、それぞれの思いが込められるこの記録誌に、実行委員一同の万感の思いも合わせて「大変やっとなあ 朝霧も」と名付けました。この一冊を次へのステップの一助としてお役立ていただければなら携わった者としてこれにまさる喜びはありません。

発行にあたり、校区のみなさまのご協力に感謝申し上げますとともに、ご指導、ご助言に加え、惜しまぬご協力を賜りました関係各位にこころから感謝し、厚くお礼申しあげます。

(平成八年春)

昨年一月十七日の兵庫県南部地震により、明石市はたいへん大きな被害を受け、現在も復興に向けて



明石市長

園田進裕

て、全力をあげて取り組んでいるところでございます。朝霧校区女性の会の皆様方には、自らが被災

しているにもかかわらず、避難所での炊きだしをはじめとするボランティア活動を賜り、それが復興への大きな力となり、私たちの支えとなりました。この一冊には、そうした皆様方の活動と、女性の視点からの復興への歩みが綴られており、誠に意義深いことと存じます。今後も、お互いに助け合う心、ボランティアの心を大切にし、地域のリーダーとして、明石のまちづくりにお力添えをいただければ幸いに存じます。

ごあいさつ

昨年の阪神・淡路大震災では、朝霧地区は、市内でも被害が最も大きな地区でした。そのなかで、



朝霧小学校区
連自治町内会会長

日光 正雄

女性の会の方々のこころ温まる活動には、本当に感謝する次第です。この度の記録集の発刊に際して

も、いろいろとご苦労があったことと思えます。この記録集が、これからの朝霧の復興に大きな励みとなるとともに、この度の震災の教訓を、次代を担う朝霧の人達に語り継ぐ貴重な資料となることは間違いありません。まだまだ、大変な毎日が続きますが、今後の朝霧の復興に向けて、女性の会のさらなる活躍をご期待申し上げます。

このたび朝霧校区女性の会の皆さんで震災記録誌を発行されるにあたり、ご努力に深く敬意を表し



明石市連合女性の会

会長 平山 陽子

ます。戦後五十年間にわたり朝霧校区女性の会は復興を支える力として社会的に果された役割は真に

発刊に寄せて

平成七年一月十七日午前五時四十六分、兵庫県南部地震が襲い、ここ朝霧校区も大きな被害を受け



明石市立朝霧小学校

校長 岡本 武司

ました。震災により多くのものを失ったわけですが、一方で経験したことのない場面に直面し、無意

識のうちいろいろなことを学び取りました。命の大切さや思いやりの心、家族のきずなの大切さ、近所付き合いの必要性を感じ取りました。この度、朝霧校区女性の会が「大変やっとなあ 朝霧も」を刊行されました。岡田会長さんをはじめ、会員の皆さんに敬意を表しますとともに、この記録集が、お互い人間としての生き方を考える貴重な資料として活用されますことを念じて、発刊に寄せることとします。

大きなものがありました。折しもこの節目の年に襲った大震災は多くのものを失いましたが、近隣の助け合いから人と人がふれあうことの大切さを実感しました。この体験をふまえ、女性の会でなければ出来ないぬくもりのある地域づくりを進めようとされています。仮設住宅で障害者の方や高齢者世帯の問題など山積みしています。子供の心のケアの問題も含め今後のご活躍をお祈りいたします。

手

記

JANUARY

17

⑩ 12月17日

仙九
源紫
さつ
ちのえ
るえ



火曜

平成七年
1月17日

満土秋
田 梵
天
月用祭

10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31

大悪日萬事此の日を用ゆるべからず又すべて成就する事なし、婚礼、葬式は凶、種蒔は吉。
最も苦しい時が、最も辛抱の必要な時である。

二十八宿 翼

大悪日萬事此の日を用ゆるべからず又すべて成就する事なし、婚礼、葬式は凶、種蒔は吉。

朝霧町三丁目

忘れ得ぬ一月十七日が

近づく日

虞れ待ちつつ

無事のみ乞うてる

朝霧町三丁目
自治会長 植垣 唯夫

平成七年一月十七日午前五時四十六分。暗闇を裂いてマグニチュード七・二の直下型地震が走り去った。

「地球が破壊する音」と表現されたあの不気味な一瞬のゴウ音は、ビル・家屋の破壊音であり地表を引き裂く亀裂音等の悲鳴の交錯した痛ましいシンフォニーであった。二月二十四日の発表では、死者五四二六人、行方不明者三人となっている。瞬時に大災害を引き起こした地震の呼び名は「阪神・淡路大震災」名称は「兵庫県南部地震」。

私を含めて多くの人々は、かつて経験したことのないこの凄まじい地震に、呆然自失の暗い数秒後、妻を呼び、息子達に叫んだ自分の目は、懐中電灯の明かりに浮かび

上がった惨状（形状しがたい物の散乱、残がい）に「震度七」の烈震の悪魔の爪痕と見て取ったのであった。そして、家族の無事を確かめたあと、虚脱に近い自分を知った。

足を置くすきまも何も今はなく割れ物手にとり箱に投げ込む

思い出の器もただのゴミとなり音立てながら ダンボール箱に

その後の幾日かは、水・燃料・電話等のライフラインのありがたさが、人々の日常会話となつて口をついて出る日々だった。わが家は、息子二人が協力し合つて、車で水を求め、走り回ってくれたが、助っ人のいない老いた人達はどうな毎日であつたらう。

翌十八日、町内を回つてみたが、倒壊家屋が皆無であつたのは、不幸中の幸いであつた。

二十二日、朝からの雨で、屋根を痛めつけられた家々に防災シートの青が目立ち始めた。幸いなこ

とに、発令された「大雨洪水注意報」は当日午後五時過ぎに解除され「泣き面に雨」を、免れる事が出来たのは幸いだった。

一年後の今は、復旧にとどまらず、復興を期待し、熱い思いが募るのは、かつて、私宅を取り巻いていたアパート群が大半解体され、



震災後にできた更地

今は更地となった現実、二十数年前、わが家を新築した時は思いもよらなかつた事で、町中の一軒家が目の前にある。（写真参考）私の身近な例をもってしても、行政の援助によつて一日も早い復興を祈るのである。

私は、震災後一年経つても、いまだに三宮周辺へは足を運んでい

ない。戦前から神戸のランドマーク（境介標）として親しまれた阪急会館も解体され、三宮センター街のアーケードもはぎ取られたという。思い出深いあそこ、ここが、消滅してしまったことは、私にとっては、まことに無残なのである。

たそがれの

プロムナードの人ごみを

寄り添い歩いた 街はもう無い

阪急の特急待ち居並べる

プラットホームも あの人もない

私は忘れない

網谷 泰子

恐怖

悲しみ

人間のたくましさ

人間のぬくもり

決して 私は 一生忘れない

大地震、その時私は……

主婦 古志 晶子

黙とう一月十七日五時四十六分。ちょうど一年前の今日、この時間私は新聞配達途中であった。朝五時に起床し、自転車で家を出た。いつになくシーンとして、無風状態の真つ暗な空で、辺りはすくなく静かであった。

いつものようにルンルンでペダルを踏み、朝霧小学校の前を過ぎ、アパートの路地に入って自転車を止め、かけ足で配っている時に、ぐらつときた。一瞬「おおー！」という思い。そして次の瞬間、ゴオーという地ひびきとともにドドンときた。

黒い空にピンク、オレンジ色の閃光が走り、天は揺れ地も揺れる。アパートの外壁が壊れてずれ落ち、屋根の瓦が飛んでくる。「こわい!!」世の中私だけという感じ、大揺れの続く中、街灯の灯りは消え、電線はぶら下がりが道路は隆起し、亀裂が走る、まばらについていた家の灯りまでが全部消えて行く、人っ子一人いない、世の中こんな大変な事が起こっているのに、ま

だ誰一人、外に出てこない。まるで異次元の世界だった。

近くのフェンスにつかまり、うずくまったが、余震は続く、ハツと我をとりもどし、家族の安否が気になり、恐さと不安で胸は張り裂けそう、やつとの思いで息をつき、大道へ出れた時、一人の老婦人とであった。

見知らぬ同士でも、互いに手をとって涙が出た。必死の思いで帰宅の途中水道管が破裂してドドーンというすさまじい音と、目の前で何もかもが崩れていくありさまは、この世の物とは思えなかった。六時がすぎ、ほんの少し辺りが見えてきた。近所の人達の姿が見えた! 嬉しかった!! ようやく家の前にたどり着き、家族の名前を呼んでみた。声があった!! 生きている!! 何よりも嬉しかったのが実感だった。でも家の中は大変、玄関からメチャクチャで一階の部屋の物は、ほとんど壊れていた。二階に上がる階段は、ガラスの破片や飛び散った物でいっぱい。靴をはいたまま、その上、停電なので手さぐりで家族のいる二階へ。仏壇はひっくり返り、家具という家具はみな倒れ、ガラスが割れて

主人の寝ていたふとんは、粉々になった破片とウイスキーの匂いでいっぱい。娘はタンスの下敷きになり、「お父さん助けて」との声に主人は、我が身の安全を忘れての救出だったそうである。朝から新聞の配達でいない母親に恐ろしさと怖さで泣きじやくる末っ子は、倒れてきた家具の間で主人に抱きかかえられていた。悲惨な状態の中でも、家族七人が生きている、家族の安否も、皆、無事である事が確認できた。

家族の絆、助け合う心、人の暖かき、それは地域にも友人知人にも見られた。

生と死のはざまにあったあの日から一年、季節を忘れるくらい色々なことがありすぎた一年に、心身共に疲れたのは私一人ではないと思う。忘れてはならないこの大震災。街の復興とともに心の復興にも頑張っ行ってきたい。さあ 今日も元気を心にいっぱいつめて!!

大震災より一年経って

医師 立石 卓生

古人は万葉にも詠われた須磨浦、

明石浦はまことに風光明媚。眼の前にはなだらかで女性的な淡路島、そしてその左には紀淡海峡右手には播磨灘、内海には漁船が数知れず浮かびその間を縫うように行き交うフェリーボート。時にはマンモスタンカーや巨大コンテナ船がゆうゆうと航行。夕暮れ時播磨灘に沈みゆく深紅の夕日を目にする時、言葉には表し得ぬ詩情が溢れます。

この美しい光景の真下で、まさか活断層が息つき阪神淡路大震災が引き起こされようとは誰にも信じられない未曾有の出来事でした。あのときの二十秒足らずの恐怖は、今思い出しても心肝寒からしめるものがあります。

不気味な地鳴りと共に直下型の上下震動の時、いったい何が起ったのだろうと!! 次の瞬間左右に揺られ地震と気付くまでにはそう時間はかかりませんでした。

とっさにガス栓を止めねばと、台所に行きかけましたが暗闇の中家具類やガラスの散乱で身動きできぬ有り様、とりあえずガスの元栓の安全を確認するのが精一杯でした。

地震といえはすぐに火事を連想

しますが、外に出てみてあたりの状況を見ましたが、幸い火の手の上がる様子もなく何となくほっとしたものでした。

震災の恐怖からやっと一年過ぎました。周囲の軒並み青いブルーシートで覆われていた屋根もほとんど取り外され、一見復興の兆しが見えたように思いますが、これからが精神的にも経済的にも個人の負担は軽くどころか重くのしかかってきております。

天災は予期せぬ出来事であり、ましてや誰も望んで起こったものでもありません。地震国日本に住んでいる限りどこにいても遭遇し得る災害です。ただこの度の大地震でもっとも実感したことは、明石地区においては二次災害としての大火災一件もなかったことです。これは市民一人一人の火に対する日頃の関心が高かったためだと思えます。あの時、火災も同時に発生していたら、あの交通寸断、断水、ガス漏れの状態で消防署もどれだけの力を発揮できたでしょう。考えただけで汗が出ます。火災が一件もなかったこの事実は、もっと明石市は外に向かってPRしても良いと思えます。とくに報

道メディアでは、明石は被害の程度が神戸地区に比べ、火災及び派手なビルの倒壊がなかっただけに、あまり取り上げられませんでした。が、被害は大差ないと思えます。

これからの復旧には、まだまだ時間がかかるでしょうが、個人の自助努力のみでは限界があります。物心両面の行政支援（地方行政も中央行政も）なしでは完全復興はおぼつかないと思えます。「行政」「市民」一体の努力がますます活発になるよう期待します。

終わりにこの度の地震で犠牲となられた方々の御冥福をお祈りいたします。

震災から一年

民生児童委員 塚原 都子
朝霧ボプラの会

平成七年一月十七日、思いもよらない激震に目覚め、初めて経験する揺れと、家鳴りの凄さに一瞬、何が起きたか分からず、地震の激しさ恐ろしさを知りました。振動がおさまり暗闇の中、やっと探しだした携帯ラジオからの放送で、震源地が淡路島の北方、明石海峡であると知り、これでは、明石は

まともに受けたと思われました。この時刻、阪神方面では多くのビルや家屋、阪神高速道路、鉄道等が倒壊し、大火災が起き、尊い人命が奪い取られるという、大惨事が起きていたとは、今、思っても胸がつまります。

余震の続く中、我が家でも、本や食器の散乱で、手のつけられない状態でした。夜明けとともに、外に出ると、屋根瓦と外壁は、崩壊脱落しており、地震の激しさを目のあたりにして、呆然自失しておりましたが、その時ふと気がかりな事が脳裏をかすめ、町内を一回りしてみましたところ、倒壊した家はなく、ちよつとほつとしましたが、停電、ガス漏れ、断水、電話の不通と、暮らしのリズムは一瞬に無くなっていました。

特に飲料水が無く、給水車の長い列に並びましたが、非常に寒い中、長時間、待たなければならぬ状態で、高齢者にはとても無理と焦り始めたとき、水の出ている所をお友達に教えていただき助けられました。そして皆さんと分け合うこともできました。

その時、一人暮らしの高齢者の方とお会いし、こわかったこと、

家財が倒れた様子などいろいろ話され、かくしきれない寂しさと、恐怖が伺われ、その後、地域ボランティア朝霧ボプラの会の皆さん達と、二人一組になって、一人暮らしの高齢者の方々をお見舞いのため、訪問いたしました。余震の続く中で私達の訪問を、ホットしたと、喜ばれた方もありました。ボプラの会員さんの中でも一時避難された方、やむなく転居された方、それぞれ被災されましたが、お互い助け合い、いたわり合う気持ちで、その後も地域の中で変わらぬ活動が続いています。仮設住宅へ入居された方々とも、今も連絡をとりお話をしています。

一年を経過した今、地域では青いビニール、シートを被った屋根も次第に無くなり、また傷んだアパートや家屋を撤去し整備され、更地には新しく家が建ち始め、町も復興に向かっていきます。やがて住み良い地域になるように、お互い助け合いながら、震災が過去の出来事として終わらせないように、いくつも得た体験を教訓と受けとめ、まだまだ残された復興への課題として考えていきたいと思えます。

阪神大震災

主婦 原 みち子

ドーンと突き上げられた瞬間、側で寝ていた子供におおいかぶさり、強烈な物音の中、早く止まるとそれだけを願っていました。最初の揺れがやんで、ほっとしたのも束の間、次の瞬間、電気が消え、何も考えられないほど、振り回されてしまいました。

揺れも音も止まった真つ暗な中、子供達の名前を呼び、無事を確認した時、二階から「オーイ、大丈夫か」と、主人の声、「下はみんな無事よ、二階はどう？」

少し落ちつきを取り戻しながら、タンスの中から、懐中電灯を取り出しました。

部屋の中を照らすと、タンスの上の小物や本が足の踏み場もない程落ちています。末娘のすぐ横にテレビが落ちており、声を聞く前ならパニックを起こしていたかもしれませぬ。

「すごかったな」、「こわかったわ」という話し声と共に主人達が下へ降りてきました。

娘もかけつけてくれ、家の中の

片付けが終わり、灯りが戻ってテレビをつけたとたん、頭の中が真つ白になる程ショックを受けました。私の生まれ育った神戸が見るも無惨な街になってしまっているのです。親戚がいる、沢山の友達や名前が頭の中をグルグルと回ります。電話は全くつながらないし、涙がポロポロとこぼれまわりました。余震が起こる度にキュツと心臓がちぢみまわります。

心配で子供を一人でトイレにも行かせませぬ。胸が苦しくてテレビを見ることも出来ませぬ。主人に頼んで、子供達を車に乗せ、布団や着替えの服、本やジュース等を持たせ、学校につれて行ってもらいました。これで余震がきても家にいるよりは安心です。上の二人の子供達がどこかでラーメンやパン、お茶などを買ってきてくれました。お腹がすいたなど感じたのは、夕方になってからでした。

家で寝るのは怖くって学校に行きました。昼間は十人ほどの人がいる程度の教室も、夕方には満員になっていました。寒いはずを求める人で一杯です。寒いはずなのにそれも感じませぬ。九時ごろにパンを四つと牛乳を二つ頂き

ました。

夜中でも給水のための列は続いていました。余震の続く不安な一夜を小さな車の中で、すごしました。翌朝八時頃、朝食を配るお手伝いをしました。コッペパン一つ、ジュース一本、人数を数え、みんなに配りました。学校のトイレに行つてびっくりしました。汚物であふれているのです。役所の方に言つたのですがどうしようもなく、校長先生にお願ひしてゴミ袋とゴミバサミを用意してもらいました。女の方数人に声をかけ、男子トイレは役所の方に女子トイレは私達女性が掃除しました。

次々と増えていく死者の数、燃えさかる家々の報道に私達はまだまだ。何かしなくては、何かしたい。こんな思いが私の中でふくらんで行きました。近所の方々に声をかけ、熱いお湯を沸かしタオルと一緒に学校に持つて行きました。顔だけでも熱いタオルでふけたら気持ちがいいだろうと思つたからです。

地震の次の日から、主人は単車で神戸の会社に出社しました。私達は四日目の夜から、家で一部屋に六人で寝ました。三時間待つて

やつと風呂に入ったのは十日目でした。

あれから一年、世界は動いていない。私達の回りも流れている。地震があつたからといって待つてはくれない。わが家も住むところが見つからず、落ちつかないけど、私も仕事を始めました。これからどう生きて行くのが大切なことだと思ひます。人間の弱さと強さを感じた今回の地震でした。

はじめての避難所生活

匿名

昔から恐ろしいものの順として地震、雷、火事、親父といわれている。平成七年一月十七日午前五時四十六分、その一番恐ろしい地震が淡路島北部を震源地として明石、阪神方面に大きな被害をもたらした。

私はその朝、深い眠りの中激しい横揺れで目が覚めた。地震だと分かり、すぐ立ち上がつて、頭上のタンスの上の物が落ちてこないよう両手で一生懸命押さえた。まっすぐ立っていられず、田舎のデ

コボコ道を走っているバスの中に立っているようだった。

隣の部屋はとうとうと、タンスの上の小ケースや本箱が次々と落ちたり倒れたり、見る間に粗大ゴミ置き場のように化していくのが見えた。家が右に左に激しく揺れているので、その音にかき消されガラスの割れる音も鏡台やげた箱の倒れて壊れる音も分からなかった。

その間、二十秒前後だったと思うが、揺れが治まったときは、もう何が何だか分からず足ががくがくしたのを覚えていて、主人が「早く服を着ろ！ 外へ出るぞ！」と。その時はもう電気は消えて真っ暗だった。幸い懐中電灯はいつも枕元においていたのでそれを頼りに、子供にもふるえる声で「早よしいよ！」と、毛布一枚持って外に出た。外は薄暗く、足元もライトがなかったら、階段も降りられないくらいだった。

その時は、無我夢中だったが、その階段が壊れていて後に通行不可能となるのだった。あたりを見回すと道路は地割れができ、屋根の瓦は落ち、大きなブロック塀が倒れ、今までに見た事もない光景でした。

近所の人も次々と出てきて「こわかったなあ。」と話しているうち、余震がきてまた震えた。

子供達も恐がって、家に入ろうとせず、余震と余震の間に私がお茶やお菓子やら服やら必要と思う物をチビチビ運び出し車に避難しました。

しばらくして近所の人が「震源地は淡路島でマグニチュード七・二やで」教えてくれた時また体が震えたのを覚えています。

午前八時になったころ主人が食べる物と違って、スパーに行ったら「棚の物も全部落ちてメチャクチャやったわ。」と無理をいってパンやらお茶やら買ってきてくれていて大変助かりました。

そのうち近所の人と相談して小学校に避難しようと、毛布を二枚ほど持って午後四時ごろ行きまし。視聴覚室と理科室を解放して下さり、私達親子五人は視聴覚室の入り口付近に腰をおろしほっとしました。

その時テレビで初めて神戸方面の大きな火災を見て「あー、ここら辺よりまだ大被害の所があるんだ」とテレビに釘付けになりました。

夕方ともなると次々と沢山の人が避難して、あつという間に一杯になり、二部屋では足りず三階と明かりがついていました。トイレの水も出ず、プールからバケツで汲んで来て使った人がまた汲んで来て備えておくというようにしていました。

夜の十二時ごろになっても、飲み水を求めていつ来るか分からない給水車を待つ行列が校庭に出来ていました。

夜、食事だと言って避難者全員に学校給食用のパン、牛乳、飯、梅干し一個が頂けましたが、なものどを通りませんでした。朝からおにぎり一個しか食べていませんでしたが、不思議と空腹感はなかったです。

その夜は、犬がなき、赤ちゃんが泣き、誰かが咳をして寝るに寝られず、みんな起きてテレビに見入っていました。

結局、私達は約一カ月間ここでお世話になり、その間いろいろな体験をさせてもらいました。困ったとき、助けて下さった近所の方々、友達、遠い所にいる親類の方々、その他大勢の方々に受けた恩は決して忘れる事が無いでしょう。

この地震で水、電気、ガスのありがたさも身にしみて感じました。もうこんな天災は二度とご免です。

「備え有れば憂い無し」で少々水と下着と服は袋に詰めていますが、役に立つ事が有りませんように。最後に多くの亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。

朝霧台

後世へつなぎたいこと

朝霧台
自治会長 丸山 正道

再び一月十七日が巡ってくる。あの朝の「ゴー、ズシーン」という不気味な突き上げられる響きと、

揺れは誰しも忘れることのできない体感である。

わずか数十秒で、食器類はこわれ、額や時計は落ち、壁土とガラスの破片で家の中は足を踏み入れることができない状態となった。

白々と夜が明けるにしたがって、

隣近所の屋根瓦の崩れや、家屋の傾き、擁壁の崩壊など想像を絶する被害である。かつての用水路は圧縮され、電柱は大きく揺れたらしく、根元には東側に十五センチほどぼっかりと穴があいて東に傾き、また、明石聖天神社の鳥居は上部が十数センチ南にずれていた。この瞬間から朝霧台住民にとって、大変な一年がはじまったのである。

とりあえず地区内をまわったが、大被害を被ったわりには死者が少なく、負傷者も比較的少なかったのは何よりも幸いであった。一年以上たった現在、振り返ってみると、いろいろの思いがこみあげてくる。六千何百人もの犠牲者がでたこと。そのなかには知人もいれば身内もいる。長かった避難所での生活を送った人、身内を頼って避難した人、仮設住宅で生活している人、まだそれでもできない人、本当に大変な一年だった。この震災で犠牲になられた方々の死と生を無にしないためにも、

現在に生を引き継いだ私たちは、後世に生きる人たちがこの轍を踏まないよう、歴史的資料として正しく伝えていくことが大切である

と。まず、第一に情報についてのこ

震災地域外にはいち早く伝わったが、被災地域では情報が伝わりにくく、被害の全体像がつかめなかった。停電の対応について備えがなかったので、市内各自治会の伝達網の活用が不十分であった。また、初めて体験することなので、各個人の天災への心得もなく、また、各職域担当者のなかには被害発生時の初動態勢や対応の遅れもあったのではなからうか。天災で交通が寸断されたときの対処が、交通スト時と同一視されたのではないか。今後、高齢者の増加にともない、住民が頼りとする、このような緊急時の指示態勢・指導態勢のあり方と必要性を感じた。非常時救急態勢の充実、見直しが今後必要である。

第二は近隣都市からの救援が速かったこと。

オイルショック時のような「われさきに」という暴動にならなかつたのは、近隣都道府県や都市からの迅速な救援物資の搬送があったからではなからうか。信州や北陸、山陰や四国、九州からの親戚の方が訪ねてきたり、今までより活

性化した人間的ボランティアの活動が被災者の心を支え、ある面ではなごませたのではなからうか。

このことが「他は何する人ぞ」という物質優先で生きてきた人の心に、わずかな物を分け合い、肩を寄せ合った生活、相互扶助の心の芽生えを醸し出したと思われる。勤めが忙しく、出会っても挨拶もあまりしなかった人同士が、お互いに協力して屋根瓦を直しあい、また、お裾分けをする気持ちが生じたのも、今までに少なかつた他の人にも役立ちたい、という人間本来の人間性回復の一端ではなからうか。十一月の朝霧台自治会役員研修時、中学生の作文のなかに救助されたときの思いによせて、今後近所付き合いを大切にしていきたいと書かれていたが、児童、生徒だけでなく直接体験した人と、そうでない人との心の差も地域生活の中で今後生じてくるのではなからうか。

第三には価値について考えが変化したこと。

震災後、何人かの人と話し合ったとき、異口同音に、今まで大切だと思つて、大事にしてきた高価な器や絵画は何の役にも立たなかつたこと、いま大切なものは物では

なく、お互いのちよつとした親切な行動を実行すること、それを變に勘繰られないようにするには、新興住宅地では地域を基にした相互理解の和を創ることが大切ではないか、との意見が多かつた。ある児童が「私は被災者だからトイレの清掃をしなくてもいい」と思い協力しなかつたが、ボランティアの人が一生懸命、手を真っ赤にして清掃してくれている横で煙草をすっている人を見てこれではいけないと感じたとあつた。人には

共通した心の基準があるようだ。これが人間の価値観ではなからうか。これを風化させないためには隣近所の、あるいはまた、地域としての何らかの取組みが必要だと思つている。地震があつたから行事は何もしなくてもいい、という意見もあつたが、こんな時期だからこそ「ふれあい」が大切だと認識し、復興夏祭・バーベキュー大会・聖天祭・住民運動会のお世話をしてくださつた今年度の役員の方々のご努力にあらためて感謝の意を表したい。

第四には今後に向けてのこと。水が不足したこと。電気・ガス・電話や交通が簡単に麻痺したこと。

電話や交通が簡単に麻痺したこと。

ビル・高速道路の崩壊。二次災害の防止ができなかったこと。住宅の建て直しがしにくいことなど、今後、取り組む大きな柱としての要素であると思う。

ガスについては、慎重な点検のあと復旧したが、電気は外部配電線の点検のほか、屋内配線も各家庭で慎重に点検して送電に対応する啓発活動も必要ではなからうか。住宅の建て直し一つをとっても、

一般勤労者として退職した者には、やりにくいことである。自動車の強制賠償保険のように自助努力による相互扶助や援助の方法を自治体単位でつくりだす必要があると思う。電話の不通にたいしては、避難所でのパソコンの活用やNTTのボイスメールの平素からの活用も考えておく必要があるのではなからうか。しかし、このようなことを実施し、生かしていく基本は、私たち住民個々にあると思う。「朝霧校区女性の会」の組織による避難所への救援活動、自分の家庭があるのに時間を生み出し、直接的に支えた自治会女性部担当役員の方々、また、それを支えた一般役員の皆さん、ほんとうにありがとうございます。今後「朝

霧校区女性の会」とともに校区各自治会が協力し合い、知恵を出し合い、再び震災が押し寄せるまでにこのたびの教訓を生かした体制を創り出したいと願っている。

心の色

安藤 伸子 (43)

かという理由でそうしていたのかもしれないが、私の場合と同様に何となく、気づいたら黒っぽいとか、という人も少なくなかったのでは？自然にと言うか、強いて言えば心が黒を選んできたように思う。

一カ月ほど経って、泉州へ出かけなければならず、三宮で乗り換えのためにウロウロした時も、若い女性を含めて、ズボンに黒っぽい上着だった。そして、その上にリュックサック。これが定番のスタイルだった。

日が経ち、季節も移り、暖かくなるに従って、少しずつスカートがはかれだし、少しずつ華やかな色合いが増えてきて、夏休み頃にはもうすっかり、例年の夏と同じ服装になっていたように思う。

地震が起こって、恐ろしかったし、悲しい事や辛い事もたくさんあった。だけど、気づかずに過ごしていた人の優しさに気付いたり、さまざまな事に幸福を感じられたりするようになった事は、とても有難く思う。一年になるんだなあと思いつつ、どの服にしようかと鏡をのぞき込んでいる自分は、浅はかかとも思うが、幸せってこういう事かなと思う。

私の感じた

兵庫県南部地震

王 万銀

平成七年一月十七日、静かな夜が明けようとしたその瞬間、ゴォーと言う大きな地鳴りと共に最初はゆるくそしてだんだんとかつて経験した事のない激しい揺れ、まるで荒れ狂う海で木の葉のように舞う小舟のように、どうする事も出来ず、ああもうだめか、何十年もかけて苦勞の末に築いた財産がほんの数秒で消えるのかと思うとこの世に神も仏もないのか、自分の家だけがどうしてこんなひどい目にあうのか、いくら科学が発達していても大自然の猛威の前にはだめなのか、人間の無力さ、儂さをいやと言う程思い知らされ考えさせられました。強震も収まり少し静かになった所で一階に降りるとほこりが舞い、案の定いろいろな置物、飾り物が床に落ち足の踏み場もない程に散らばり移動する事のない重い物までが、大きく動いているのを見て改めて地震の大きさを思いました。外に出て見ると近所の人々も大勢集まり、お



地震直後の聖天神社東裏 (王万銀さん自筆)

地区の被害を主に取り上げられています。ここ明石でも地域によつては莫大な被害を受けておられます。亡くなられた多くの人々のご冥福と、家、店、職場を失われた人々の一日も早い復興と復帰を心よりお祈り申し上げます。

阪神淡路大震災

高校一年 金沢 由美子

互いの無事を喜び合っていました。大地震とその後頻繁に続く余震にいつまた大きな余震が来るかも知れないという不安で私たちは貴重品、寝具、飲み物等を車に積み込み近くの空き地へ非難しました。とその時信じがたい光景を見たのです。聖天神社の東裏、竹林のはるか東方上空は赤茶け色に染まり不気味な空が広がりを見せ、また寝所を強く揺さぶられた鳥達の、恐怖におののき奇声をあげながら異常な飛び方を見た時大げさかもしれませんが、地球に最後が訪れたとしたらこのような情景になるのではと思いました。

最後に新聞、テレビ等では阪神

平成七年一月十七日、この朝は、本当にこわい朝でした。朝寝しているとドンと言う音と共に家全体がグラグラとゆれ、家が上下に動きました。わけもわからずに母たちと部屋を出ました。もう家がつぶれたのかと思い、泣いていました。真つ暗で何も見えないまま階段を下りてローソクを探しました。とりあえず皆でテーブルの下に隠れました。今、思えばテーブルの下も危なかったみたいです。鍋や、茶碗も全部外に投げ出されています。その後もずっと余震が続いていて当分の間こわすぎてうごけませんでした。何時かもわからなかったが、日がのぼったので、外

に出ました。外にはたくさんの方がいました。父と母と車にのつてニュースを聞くとすぐ大変な事になっていました。長田の方がすぐ燃えているのを知り、私の父の店が長田にもあったので、もう燃えていると、半分あきらめていました。しかし風の向きが変わり、店は大丈夫でした。三日ほどたつて店が心配だったので、車で四時間ほどかけて行きました。もう日本は最悪だ!! と思いに涙が浮かんできました。ビルは倒れて、家などもつぶれていて、その前には、花などおいてある所がたくさんあり、まわりは戦争後のように焼け焦げていました。焦げ臭い匂いがすごくしました。ポラントイ

事を知りました。家も半壊になってしまいました。どうにか過ごしています。今回の地震で、本当にいろんなことを学びました。人は、水、ガス、電気がないと生きていけない事がよくわかりました。何もかも無駄にせず、大事に使わねばならないことに気づきました。今度いつ地震がくるかわかりませんが、来ない事を祈ります。この事を忘れずに、これからも頑張っていくます。

あの日を振り返って

加納 日出子

アの人達が、炊き出しなどたくさんしていました。父も店をあげ、トラックで長田の方まで水を運び「この水飲めます」とトラックに書いておくと、たくさんの方がそれを飲んで助かっていました。水がでるまで父を尊敬してしまいました。水もガスも出ないのに、父は、ただで皆にラーメンを配っていました。(家はラーメン屋です。)

私は今回の地震で、自分の事は、自分で守らないと生きていけない。突如グラ、グラツときた。これは普通の地震ではない。上下、左右の物凄い揺れに、ふだん膝が悪かったので、急には布団から立てなかつた。何か飛んで来て、額に当たった。手



加納さん宅の台所

探りで廊下に這い出し、家族から懐中電灯をもらった。本箱は三本も倒れ、和ダンスが半分折れて布団の上を覆っていた。台所の食器棚の食器は散乱し、足の踏み場もない。額には大きな「コブ」が出来たので、息子と医者に行った。病院も薬が散らばり、大変だったが、何とか診察の上処置してもらえた。

何かぼんやりして、一日中片づける気にもならなかった。皆は私の部屋を見て「お母さん！ よう生きていたなあ！ もう少し出るのが遅かったら、どうなっていたか。」後から考えても、恐怖の間だった。その後も余震が続く。母や息子達も、別々に生活するのが怖くて皆集まってくる。息子の勤務先の高校の生徒が、家屋の下敷きになって死亡する。長田へ車で往復しながら、家のガレキの片付け等、皆よくやってくれた。

主人や母は、「余震でも一番安全な場所はここしかない。」といって、家の前の道に車を止め、その中に毛布を持ち込んで、毎日寝ていた。ガスが出ないので、カセットコンロ、ボンベを買いに走り、屋根のブルーシートやコーキング等を大

久保方面まで買いに走ったが、どこもこった返して、すぐ売り切れになっていた。

地震は揺れるばかりと思っていたが、物も飛ぶ。今改めて思う事は、今後もっと、地震に対する心づもり、整理をし、家具も固定し、いざという時に持ち出す用意をして、健康に留意しながら生活しなければいけないと思っている。

二度と起こらない ことを祈りつつ

北井 和子

平成七年一月十七日朝五時四十分、ここちよい眠りについていたのに、ドーン！と最初の揺れに眼をさました。すぐにおさまるだろうと思っていたら、東西・南北にと大きく揺れだし、ガチャンとガラスの割れる音。もう家が倒れると思いきさくになり布団をかぶってうずくまっていた。息子が名前を呼び「大丈夫か」と問いかけてくれるが、部屋の前には物入れから飛び出した物が散乱し、ドアが開けられず、真つ暗な中をどこ

をどうやって通ったか階下へ。ロースクをつける。懐中電灯は電池が切れて役に立たず。何がどうなったのだろうと携帯ラジオをつけ家族で状況を把握。淡路が震源地であることを知った。ガス、水道、電気すべてが止まっていたが、十時すぎに電気が通り、テレビの前に釘づけ。

夕方、水を確保するため朝霧小学校へ並ぶこと一時間。その間ほとんど避難して来られるのを見て、我が家も避難を！と思ってはみたが、もしだめなら我が家の下敷きになる方がと、迷った。どこをどのように片づければよいのか、また揺れるのではないかと不安もあり、何もしないまま一月が過ぎてしまった。

狭い台所は食器棚の扉が開き、グラスや食器類が重なり合っけ割れている。冷蔵庫は倒れなかった！と安心して下を見ると、冷凍食品は飛び出し割れた食器の上へ落ちていた。冷蔵庫を開けると、中には割れた食器が入っていた。揺れてドアが開いた時、食器棚から飛び出し冷蔵庫の中に飛び込んだのだろう。姪が、「おばちゃん、食器棚すっきりしたね」と言うくらい

すっかりなくなってしまった。しばらくは扉があかないようにとテープを貼ったりしていた。

ガスが長く使えないのは困ってしまった。とにかく、風呂を捜して…と、太山寺のラジウム温泉に。外で待つこと二時間三十分でもさっぱりすることができ感謝しています。ホテルも予約をしてシャワーをさせていたきとでもありがたく思いました。避難所には明石公報が届いていたが、各家庭にはまわっていません。ニューズが伝わらず不便を感じました。そのため、時々小学校の避難場所にニューズをいただきに行っていた。海に向こうや遠い北海道での出来事と、他人事のようにテレビを見ていたのに、まさか自分が遭遇するとは思っても見なかった。しかし、地震列島に住んでいる限り、いつ起きてもお不思議でないことを痛切に感じた体験でした。幸い家族も無事、家は少し傾き、壁ははがれていたりしているものの何とか住めるし、良かったと思う事にして、もう二度と震災が起こらない事を祈りつつ。

築十年のわが家が…

立石 美智子 (41)

突然、目が覚めた。揺れているなかでは、体を起こすのがやつとである。それが地震であることはすぐに分かった。ものが割れる音がしきりにする。しかしどうすることもできない。

揺れがおさまり、夫がドアを開けようとするが、開かない。二人がかりでやってもぴくりともしない。ドアの向こうの部屋で娘が「挟まれた!」と呼んでいる。息子はどうしているのだろうか。二階に家族全員が閉じ込められたままである。「お兄ちゃんを呼んで。」と娘に叫ぶ。息子は「どうやら無事らしい。」「部屋のドアが開かないのよ、そっちの部屋の窓を開けて。ペランダの方からそっちに行くから!」夫が先の一階に下りる。高いペランダを越え、屋根を伝いそれに続く。幸い家族に怪我はない。

まだ暗い。電気は切れたままである。懐中電灯を探すが、あった位置にない。足の踏み場がない。歩くとバリツと音がする。食器棚が倒れ、食器が散乱しているよう

だ。居間のサイドボードも折れ倒れている。近所で人の話し声が聞こえ始める。カーテンから冷気が差し込む。電話機がどこにあるのかさえ分からない。

やつとどんなことになっているのかのみに込めてきた。夜が白むのを待ち、改めて見ると、ことの深刻さがこころに迫る。外に出ると、縁側のガラス戸が落ち、割れている。家全体もやや北に傾いている。台所の部分の基礎が沈み、建物の木材部が剥き出しになり、口を開けている。床下収納庫から、床下を覗いてみると、地割れが大きく走り、基礎と支柱が外れ、地面から建物が浮いている。「家の建て替えをしなきゃ、しょうがないなあ。」と夫はいう。築十年のわが家に想いが巡る。

それでも、すぐに引越しをしなければならぬとは、実はその時考えていなかった。確かに倒壊の不安もあった。翌々日復旧した水道は一瞬出るようになったが、束の間、ジャーツと音をたてた。床下で切れていて、慌てて元栓を閉めた。道路を自動車が通ると家が揺れるのも気分のいいものではなかった。しかも、台所の二階を

歩くと家が揺れるのである。余震が続くなかで言い知れぬ不安が襲ってきた。それが一月二十日のことである。

ここで決断した。すぐに引越して、自宅の建て直しである。

むしろそれからが大変だった。家族が住むのをどこにするのか。再建のためのローンの重さが気にかかる。翌二十一日(土)、夫が勤め先から帰ってくると吉川に転居先をすでに決めてきたという。夫が子供二人と住み、私は垂水の実家に行くことになった。別居である。まず学校のこと、そして炊事、洗濯は大丈夫だろうか。

ともあれ、その日のうちに電気ごたつと寝袋を車に積み込み、家族で朝霧から四十キロメートル離れた吉川に向かうことにする。近所の人たちの見送りを受ける。おにぎりの差し入れが胸に染みる。子供たちもしよ返っている。こうして十年間家族が暮らした朝霧台を離れた。

そして現在、自宅をもとの場所に再建、家族が一つ屋根の下にいる。家庭が七カ月ぶりに蘇った。解体までの荷物の整理、二重生活の大変さもあったが、こうして家

族が揃っていることにまずは感謝するばかりである。

阪神大震災その時

田中 弼

突然の激しい揺れと地鳴りに目が醒め、四つん這いになったまま、立ち上がれない。一瞬何が起こったかわからず、地震と知ってから家が潰れるのではないか、という恐怖心に襲われる。揺れが収まって暗闇の中、台所の食器の山から懐中電灯を探し出し、ラジオをつける。早くも震源地が淡路島の北部と報じている。

明るくなって外に出てみる。屋根瓦が大きく崩れ、外壁も所々落ちていく。近所に傾いた家があるが、倒壊に至ったものはない。皆恐怖に満ちた顔で震えていた。

一月十八日、連絡のとれないJR六甲道駅の近くの姉を捜しに行くと、昼間、車の渋滞で行けなかったので深夜に出かけた。山麓バイパスを通り、新神戸トンネルを抜けるまではスムーズに走れたが、東に向かうと車が動かなくなった。

そして神戸の街は電灯が消え、至る所でビルや家屋が倒壊し、まるで死の街に入ったような異様な光景だった。迂回しながら、阪神電車

の落下した高架の下をくぐり抜け、ようやく目的地に着く。幸い姉の家は形が残っていたが、裏の家は潰れており、家の前のJRの高架もガタガタで、コンクリート柱が道路に倒れかかっている。家に入るが家財が散乱し誰も居ない。近くの避難所の小学校に行くが、真っ暗で夜中のため捜せない。夜明けを待つて名前を呼んで回るが見つけることが出来ない。もう一度、家に引き返したところで、偶然、近所の家から出てきた姉を見つけて、明石へ連れてくることが出来た。

この歳で初めて経験した大震災は、生涯で最大の出来事であることはもちろんだが、多くの親戚、友人、会社の人達から受けた心温まる見舞いの言葉、金品の有難さも一生忘れられない。そして、やはり地震はこの世の中で一番怖いということをお忘れず、天災に対する準備も怠らないようにしたい。

僥倖

田畑 兼徳 (72)

平成七年一月十七日未明、地鳴りと共にあの物すごい奴が襲ってきた。地鳴りと最初の一撃は、半醒半睡夢うつつの中で感じていたらしく、妻が「お父ちゃん地震や」ととびついて来て、腕をつかんだ。その声と触感にはつきりと意識が戻った。地鳴りはますます猛り狂ってドスツ、ドスツと叩きつけてくる。「ウーム怖いなあ」私は布団に横になったままでどうにもできず、ただ叩かれ、揺すぶられ続けている。その激しい揺れの最中に、妻は「寒い、布団を着るわ」と自分の布団をとりに行こうとするが、どうしたことが、私は妻の腕を強くつかんでいて、はなせなかった。いのちの底から突き上げられるようなおののきの合間に、あらゆる断片が頭の片隅をよぎるようだ。日ごろ、見聞きした地震予知の解説などでは、関東、東海地方での地震発生の可能性が、よく論じられていたこともあって、「明石でこのひどい揺れだから、関東、東海方面は壊滅状態になっている

のではないか」という考えが余計に恐怖心をあおった。

実際には何秒揺れていたのだろう、いつの間にか地震はやんでいった。真っ暗で何も見えず、手探りで廊下へ出ようとするが、何も無い筈の所に何か硬く大きいものがあった。方向感覚がおかしくなり、狭い二階の寝室の中で、自分が何処にいるのか分からなくなった。「どうなったんやろ、どうも方角が分らんや」「なにいうてるのん、あんた、しっかりしてや、ほんまに」何分くらい経ったのか、まごまごと手探りを続けていると、出窓から薄明かりが差してきた。朝霧病院の非常用照明がともったのだろう。

夜が明け少しずつ明るくなり、家々のたたずまいが見えてくる。家の前の道路からでは、近すぎて屋根の状態がよくわからない。病院の駐車場まで行ってみると、なんと、屋根はすでに屋根らしい形を失っている。明るさが増すにつれて、家々の外壁の亀裂や剝落などがはつきりと見えてくる。家に入り、裂けた壁紙の切れ端や散乱する食器の破片、てんでに位置を変えた什器類、稲妻形の壁の亀裂

などを横目に恐る恐る二階に上る。寝室を見て思わず息をのんだ。和服が詰まった重い和箆の上物が

妻の寝床に落ちてきて、まともに布団にかぶさっている。枕の上には十六型のテレビが落ちてこわれている。何という僥倖だろう。あの時、妻が布団をとり自分の寝床へ戻っていたらどうなっていただろう。多分何箇所もの打撲や骨折で重傷か、悪くすれば命を落としていたかも知れない。

変わり果てた半壊の家の屋根や壁に応急処置をしながら、焦りと苛立ちの日を送り、建築業者の手が入って、一応の修理が終わったのは十二月中旬であった。

兵庫県南部大震災に

遭遇して

西村 新一郎 (80)

世の中に恐ろしい物は地震、雷、火事……なんとかと言います。雷、火事なんかは防ぐ方法はありませんが、地震だけは事前に予知され、防ぐ方法は、未だ解明されておりません。災害後、学識者は結果に

関していろいろ講釈されますが、科学の進んだ今日、本当に何とかならないものかと思えます。

私は兵庫県北部の出身です。最初の地震を体験したのは大正十二年九月一日正午に起こった関東大震災です。私が小学校に入学した半年後のことでした。東京と但馬という遠距離でありながら、校舎の窓ガラス等は落下し、生徒は校庭に飛び出し、大変でした。その時、先生が「机の下にもぐりなさい」と言われたことを思い出します。その後も山陰の豊岡、城崎、奥丹後、鳥取、福井など度々地震に遭遇して居りますが地震のたびに、気象情報のように地震に對する地下予報（地震情報）が出来るものかと思えます。

地震のない所に住みたい、と思いついても時が過ぎれば忘れ、同じことを繰り返して今日に至りました。明石は地震の少ない所と思っております。皆様も今回のような大地震が当地を襲うとは考えもされなかつたと思えます。けれども明石は最高の土地と今でも思っております。

災害は忘れたころにやってくる。本当にそうだと思います。島国日

本はいずれの土地も同じだとよくわかりました。この上は自分で判断し、守るより外はなく、慌てず落ち着いて行動することだと思えます。

しかし、一月十七日早朝の地震に直面した時は、やはり慌ててしまいました。開かないドアを無理矢理に開け、外に出ると、近所の方達も出ておられ、成り行きを見ながらただ、ア然としておりました。家は傾き、門塀も倒れていました。夜が明けてきたので家に入りましたが、その時はまだ神戸方面の状況は分からず、続く余震を心配しながら、時の経つのを待つているだけでした。時間が経つにつれ市内、神戸方面の状況にびっくりしました。

その後市内を見て廻り、第一に考えなければならぬ対策は、建築の場合、地形と基礎造り、建物と土台と基礎の接続のあり方、土台と柱の組み合わせ（筋交）を各角に充分しておくこと。なお、屋根は軽量がよいのではないかと思えました。家を建てる方、建売をお買いになる方は、その点を充分調査しておくことが大切だと感じました。

これからはこのような災害のなきよう、ただただ、祈るばかりです。

大震災

長谷川 正

「グオー」、「ドスン」、「メリメリ」、一月十七日午前五時四十分、過去に経験したことのない激しい揺れ。この揺れによって私の

一年が始まった。一月十八日早朝四時に自宅をマイカーで出勤、途中の光景はテレビ、ラジオ等で報道されていたよりはるかに強烈であった。家屋は倒壊、道路は大きく陥没、わが国の耐震構造を鼓舞した高速道路の落下、自然の力になすべくもなくさらけ出した都市直下型地震をまざまざと見せつけられた。

私の勤務先は、県庁の南側の日本赤十字病院に隣接している。日赤病院には、全国から日赤職員の手援があり、救急隊の車両が道路に二重三重にと停車し、負傷者が次々にパトカー、自衛隊、消防隊の車で運ばれてきていた。

わが社にも災害対策本部が設置され、二十数班の災害復旧の指揮をとることになった。救護物資の運搬、官公庁の要請による応急復旧。一般市民の家屋の診断、大型構造物のダメージ度の判定等々、早朝より夜遅くまで続いた。

わが家も多分にもれず被害を受けた。細心の注意をして設計した木構造であるが、外壁に大きな損傷があった。公的な判定は「一部損壊」であった。

震災直後には当地域も断水となり、生活用水の確保に苦勞した。私の会社の明石営業所の水道が若干出ていたように思う。近所の方にとどろぞ、と想って営業所に行く。多勢の人がすでに来られていた。困ったときはお互い様と思う反面、人間、パニックになるとその人の人間性が、はつきりみえることをこの震災で勉強した。人の優しさ、人のエゴ、約六千余命の命を奪っていった、自然のエネルギーの怖さ。この被災の教訓を今後の危機管理の糧として復興に向けて頑張ろうと思う。

地域の人と共に

水野 千加子

予期せぬ、いまわしい阪神・淡路大震災から一年たちますが、決して忘れることはできません。あの二十秒間は本当に怖かった。大きな地震はこないだろう。あっても自分は大丈夫だろう。そんな甘い考えをこっぱみじんにしてしまいました。

たくさんのお、不自由な生活を余儀なくされている方々のことを思うと、今、私に出来ることは何なのか考えさせられます。幸いにも、家屋の損傷も少なく、こうして家族が無事暮らしていることの幸せを感じている毎日です。

住居、仕事、家族、心のケアなど多くの課題が残されている中、それでも、大勢の人達との出会いから、この一年間学ぶことがありました。自然と共に生きている私達だから、自然の恐ろしさに会った今、そこから立ち上がる、とすると人間の力の偉大さ、人の心のあたたかさの何と素晴らしいことか。テレビを見てただただ驚くばかり

だった神戸のあの火災。腕がちぎれるくらいバケツリレーをして、何とか最小限に火事をくいとめた

地域の人達の強い絆。また、家屋が全焼、大切な身内の方を失くされた、そんな中でもフアイトを失わず、前向きに一步一步生きておられる姿。もともとと苦勞や悲しみがあるでしょう。私達は足を運び、自分の目で、耳で、心できちんと受けとめていかねばなりません。社会の一員として生活していく中で、公私にわたり、自分の役割を果たしていく責任があるからです。私はあの状況の中、本当に何もできなかったなと思います。しかし、近所や地域の人達に声をかけて頂いたり、助けてもらった

その時私は

朝霧山手町
自治会長

大石 由一

多数の尊い人命と、想像を絶する被害をもたらした未曾有の兵庫県南部大震災も、はや一年を迎えようとしている。

朝霧山手町

りしました。小さな連帯感が生まれていることをうれしく思いました。命あることの喜び、家族・地域の人達とのふれあい、物のありがたみ、今あることの全てをありがたく感じています。

多くの事を学んだ中で、大事なことがもう一つあります。

震災のため、この地域から離れて生活されていた人が戻って来られあの笑顔がまた見られたことです。朝、登校する子供たちの後ろ姿を見て、共に学べることを心から喜んでいきます。

これからも、地域の人達と共に歩んでいきたいと思っています。そして、今年が復興・飛躍の年になることを願っています。

一月十七日未明、闇を裂くような地鳴りに目覚めた。と、その瞬間、縦横烈しく揺れ、異様な音をたてて屋根瓦が落ちる。そして神

棚の神具、テレビ、壁、隣室では食器類が辺り一面に散乱した。あるいは、このまま家が倒壊するのではないかとも思った。

大地が揺らぐとはこのことか、まさに恐怖の一瞬であった。漸く揺れが治まり、暗闇の中で家族の無事を確認し、ひとまず安堵した。次いで昨年暮から交通事故で入院中の妻の安否が心配であった。

自力で身動き出来ない状態で、あの恐怖の瞬間どうしていただろう、天命にまかせ、ただじいっと堪えるしかない、いかに歯がゆかったことか、早く確かめねばと、明るくなるのを待って余震の続くなか車を走らせた。信号は停電のため点灯していなかったが、車両が少なかったのさほど混乱もなかった。病院に着くと、ケガをした人々で非常に混雑していた。一瞬、病院内で何か大惨事でも起きたのかと思った。急ぎ階段をのぼり病室へ直行した。青ざめた妻が出迎えてくれ胸をなでおろした。

病院も建物の内外に大きな亀裂が無数に走り、床はあちこち陥没し、無気味なありさまに衝撃を受けた。水道、ガス、電気を断たれ、奪われ完全に機能麻痺に陥った、この悪夢のような状況を前にして、自然の猛威には人の力ではどうする事も出来ないもどかしさを痛感

した。しばらくして、電気、電話は通じたが、ガス、水道の復旧はいつのことか、見通しがたらず毎日、朝、昼、夕、食事とお茶を持って病院に通うことになった。

その後町内を一巡したところ、屋外のガス洩れが六ヶ所。二次災害の恐れもあり、急ぎ大阪ガスと連絡をとり、ガス停止と安全確認のため係員の派遣を要請すると共に、周辺にロープを張り、火気厳禁の張り紙と警戒を依頼した。

当時町内では、幸い家屋の倒壊は免れたが被害は地域全世帯に及んだ。(後日取り壊された家屋は一三戸)また、町内の道路もほぼ全域にわたり大きく亀裂が走り、陥没もあり、側溝の破損も烈しく、傾いた危険な状態の電柱、その上道路上至る所に瓦礫が散乱し、震災の爪痕がいかに大きかったかを無気味に物語っていた。早速、町内案内図に記入し、市災害対策本部や関西電力に折衝し、危険率の高い電柱の取り替えと補強は速やかに完了した。

また、各戸における擁壁の被害も甚大で、余震の続く中、その不安も一層つのり診断希望者が何と百二八戸に達した。早速資料を作

成し被害相談センターへ出向いた。当初快い返事はかえってこなかった。

今から思えば、市土木建築関係職員と、各地からのボランティアの人達を含めても、尚人手不足の状況を思うとき無理な要請であったかとも思う。しかしながら、要望者が多数あつた事で粘りに粘り、最終的には快諾を得た。そして、三日間三班にわかれ懇切丁寧に指導、診断いただいた事は今もって感謝感激である。一方、道路の復旧は一部の急を要する箇所は市当局の積極的な対応によって終了し、これまた感謝している。残された箇所は、本年度末までに八

十パーセント前後完了の見込みで、未だ後遺症は各地に見られるが、あちこちの家庭のたくましい復興の槌音とともに、震災前のあの環境が蘇る日も間近い事であろう。そしてまた、町内巡回の折、大勢の方と親しく話す機会が多く、地域コミュニティの大切さを痛感するとともに、その話の中で一人暮らし、高齢者、また女性だけの家庭にこの震災が与えたダメージが如何に大きかったか、不安と心細さ、この人達にとって安否の確

認、友愛訪問、声かけ運動がどんなにか心強い支えになったことか、常日頃からその繋がりが必要ではないかと――

後日、その対象の瓦礫収集をし、非常に喜ばれ、声かけ運動等の重要さを実感した。その後幾日かしてSさんの提唱により、ボランティアの会が発足、さっそく参加した。年齢差もかなりあり、幅広い会である。活動は地道でも継続的であつてほしい。小さな行為がやがてほのぼのとした大きな輪になるまで。名称も朝霧ほのぼの会と名付けた。

日頃の友愛活動もさることながら、この度の震災を教訓として地域の自主防災組織が叫ばれるなかにあつて、いざと言う時には救援救護、給食給水等、ソフト面での活躍が期待され、そしてその活動分野はまさに洋々としている。

今日は大晦日、震災から間もなく一年が経過しようとしています。

震災をのりこえて

大塚 君子

我が家も地震のため自宅が全壊、幸い応急修理をしましたが未だに傷跡を残したままに越年しようとしています。

地震当日は家財道具が散乱し足の踏み場もなく、とりわけ主人の寝台にテレビが落下し危うく大怪我をするところ、幸い無事でほっとしたものでした。今から考えてもぞつとする思いです。

さて今度の震災でつくづく思ったことの第一は情報が遅く、かつ不正確であつたことです。例えば明石東部は甚大な被害を受けながらマスコミはほとんど取り上げず、親類や知人からはあなたのところは大丈夫だったんでしよう、ぐら

いしか言われなかつたことです。テレビなども神戸やその東部周辺都市、淡路などは毎日取り上げ、報道していましたが、明石はほとんど取り上げなかつたのは周知の通りです。いったいどこに責任があつたのか不思議でなりません。

個人個人はそれなりに物質的に恵まれ、生活は安定しているかに見えていたが、いったん事ある時は、ばらばらでそれぞれは心のよりどころを失つたことです。幸い地域によっては下町情緒があり、

お互いに他人同志であつても、肩を寄せ合つて慰め合い、励まし合つている様子がよく報道されていますが、さて私達の町はどうでしょう。お互いに仲間意識をどう育てていくか、一考を要するところだと思ひます。平成七年はあまりにも不安な年であつたが、平成八年こそ希望のあるよい年であつてほしいと念願しています。

終わりにこの震災で家族を失い、家を失つた人々がどうぞ勇気を出して再起してくださいよう祈念してやみません。

明るい未来を信じて

久保 晴美

あの阪神大震災からまもなく一年が経とうとしています。一九九五年一月一七日午前五時四六分、ドーンという下から突き上げるような衝撃で目覚めた私は関西で地震なんか起こらないと思つていたので、すぐに地震とは気がきませんでした。神戸の窓ガラスから光とゴーという地鳴りの音が迫まってくる。このままでは家がつぶれてしまふ。五分、十分、三十

分、そんな時、お隣のご主人が電話で「明るくなるまで動かずに、じつとしていなさい」と心配して尋ねて下さいました。私と母はその一言で不安と心細さが薄らぎ、どんなにか救われたことでしょう。本当にありがとうございます。そして一年経つた今、日が経つにつれ、震災後の緊張感を忘れ、もう再びあんな大災害が起こることはないだろう。そう思つて生活している自分をも一度見つめなおさなければならぬと。家族の大切さ、命の大切さを――。私の弟は去年の震災前の連休に九州から帰っていました。九州へは仕事の関係で行つており、本当なら震災のあつた一七日の朝帰る予定でしたが、その時は運よく、虫の知らせか前日（一六日）の夕方、新幹線で帰っていました。もし一七日の朝なら――。そう思う、とこうして家族と一緒にいられる事に感謝し、平穩無事に暮らせますように」と願う毎日です。

とは百八十度違つた光景で、誰もがリュックを背負い、スニーカーを履き、マスクをしていました。女性は全員がパンツルックに帽子をかぶるスタイルが何か月も続き、今まで自分を甘やかし、何不自由なく生活してきた私にとつて忘れることのない貴重な体験であり、また自分の事しか考へない、自分さえ良かったらいい、そういう考へ方の人達が増えつつある社会に對しても与えた影響はかなり大きなものであつたと思う。この震災で多くのものを失いましたが、その一方で人と人とのつながりの暖かさや、家族の絆の強さ、そして何よりもお互い助け合うことの大切さを知りました。

一年経つた現在もテント住いや仮設住宅での暮らしを余儀無くされ、「自立」ということで苦しんでいる人達は大勢いると思います。「震災前の生活に早く戻りたい」という願いがかなうまでの道のりは長くて遠いかもしれません。でも街は、私達は復興に向けて一歩ずつ動きだしています。大地は揺らぎ、人生観も大きく変わった今、私は「夢と希望をもち続けて生きたい」と思っています。

より目立つ

援助活動を国に

小池 英男（90）

年齢九十歳。この一世紀中、戦災、噴火、地震、台風、風水害、伝染病等随分種々の災害に遭遇した。今回の地震は直接体験中で最も激しいものの一つである。大地震は大低最初の激動数十秒の間に被害の大小が決まる。しかも揺れ始め、大地震と知つても、体は動けず、運を天に任せて、ひたすら静まるのを待つ状態になるのが普通である。今回も揺れ方で大地震を知り、恐怖感が首筋を走つたが、数十秒間の辛抱だと、妻の肩を支えながら、負けてたまるか、「何クソ、何クソ」と大声で連呼しつつ、天井が抜け落ちぬかとにらみながら静まるのを待った。周辺の物は皆飛び散つたが、幸い家も壊れず、家人も無事であつた。

激動終つて町内被害はどうか、老人方は如何であろうかと町内を一巡した。随分ひどく荒れて居るが、人的被害は聞けなかつたので、やれやれと安心した。ただ、被害が場所により随分差のあることに

気付いた。朝霧山手地区、朝霧台地区は、太古、湖底か川底であったらしく、所により地層にはつきりとその跡が残っている。再び隆起して山となったのを、整地し平坦にして屋敷としたので、削り取り、押し出しにより、屋敷地盤に硬軟の差が生じその差が被害の差に表れ、建築工法の差で被害差が出来たように思われた。

私がこの地に家を建てる際、かつて六甲山上で管理した施設が猛台風で二階六室が一度に、山中に吹き飛ばされた経験を持つので、見かけより安全、頑丈一番と思われる工法のものを選び建築した。幸い功を奏して被害が少なく済んだように思われる。

気紛れに平素用意しておいた非常袋もよく役立った。ただ、置き場所をよく考えておかなかったの、持ち出し時には慌てた。家具類は金具留めしていたが、壁側で釘が皆引き抜かれた。しかし倒れなかったタンスは倒れて孫を布団の上から押さえ付けていた。

今回の地震被害の復旧で、一部の市会議員さんや町内の自治会長および役員さんが自家の被災修復

を後回しにして、市当局や関係方面に復旧交渉のため飛び回り、集会所の損傷や道路破損の修復に尽力され、早く正確に復旧していただいたことは感謝に堪えない。地元選出の国会議員さん達が、一層政府に働きかけて、被災県民のため、より目立つ援助活動をお願いしたいと念願している。

小池 富美子

地の底の どよめき吾は

確（シカ）と聞く

八十路来て 戦災地震

掌を握り 頼もし夫の 浄土無く

おろおろと ただ祈るのみ 力呼ぶ

木の葉髪

余震の中の結婚式

薩川 紀子

激しい揺れがおさまり、散乱した食器類の隙間を歩いてカーテン

を引いたとき、「アレ、いつもと景色が違うな」と私は不思議な気持ちになりました。それもそのはず、

屋根から落ちた瓦は小さな庭を埋め、そこにあつたはずの大谷石の塀はすっかり道路側に倒れてしまひ、何もかもなくなっていたのです。そのシーン！と静まり返った風景を見た瞬間、ことの重大さが改めて実感され、私は、しまつた！と心に叫んでいました。こともあろうに、明十八日は次男の結婚式を予定していたからです。幸い拳式を明日に控えて夫も前夜出張先から帰宅していました。

ともかく倒れた塀を路の端に片付け、ころがり落ちたテレビや家具を元通りに直すと、私達は式場を見に行こうと舞子ピラにかけつけました。ピラの建物はしっかりしていましたがロビーではすでに毛布や布団にくるまった被災者がぐったりとソファにすわりこんでいました。式場ではこんな事態では満足なこととは出来ないと思うが何とか精一杯がんばってやらせていただくとのことで、私達もいろいろの不安を残しながらも早急な心を決め、ゴーサインとなりました。

さあ、それからが大変でした。自宅の電話は不通のため、寒さに震えながら公衆電話に並んでの各

方面への連絡、家の内外の片付け、屋根修理の手配とテンテコマイの忙しきで、ろくにテレビを見る暇もなく夢中で動きまわりました。あとで考えてみると、地震発生直後、携帯ラジオで聞いた「震源地は淡路島北淡町」の第一報に、震源地にこれほど近い我が家周辺が一番大きな被害を受けているに違いないと錯覚し、活断層が神戸方面へ走り抜け、とんでもない惨事をひき起こしていることを知らな

かった私達だったからこそ呑気にゴーサインを出してしまつたのです。もしテレビの画面をつぶさに見ていたら、とても結婚式など考えることは出来なかつたでしょう。新幹線で集まる予定だった長男や親戚も当然かけつけられる状況ではなく、伊丹の空港まで辿り着いていた人達にはそのままUターンしてもらいました。夜中に大阪の家を出てこちらに向かつて車を走らせてくれた仲人さんご夫妻や主賓の方、会社関係の人々も結局到着することが出来ず虚しく引き返していただくことになりました。

その状況から東方面の街が大混乱に陥っていることが少しずつ私達にも伝わってきて、無事、式を終

えることが出来るだろうかと不安が広がっていきました。

時間が来てもお嫁さんは現れず気をもんでいるところに、荷物を両手に下げたお父さんとお嫁さんが走りこんできました。国道の渋滞でなかなか前に進むことが出来ず、途中車を降りて走ってきたとのこと。披露宴会場もシャンデリアが落下して急拠別の部屋に変わったたり、着替え室のスプリングクラーが作動して水浸しの中、片隅に新聞紙を敷き詰めて着替えをすませたり異様な雰囲気の中、それでも必死の思いでかけつけてくださった幾人かの人達に見守られて、息子達は無事に式を終えることができました。

披露宴の最中も幾度か無気味な余震が続き、窓の外からはひっきりなしに救急車や消防自動車のサイレンの音がひびいていました。おそらく式場関係者の中にも、被災した家をそのままに、出勤した人もいたでしょう。また、大混乱の中を帰宅しなければならぬ参列者の方たちのご苦労を思うにつけ私達によせてくださった暖かいご厚意に感謝の気持ちで一杯でした。伊丹からカナダへ発つ息子達を

見送り、ホッとして帰宅した私達は、はじめてテレビが伝える神戸の惨状を目のあたりにして呆然としてしまいました。驚きと、犠牲者の方々への申し訳なきが交錯して本場に複雑な思いでした。こんな時に結婚式を強行してしまったことが果たしてよかったのか悪かったのか――。

何かのはずみに、フツと長田を焼きつくす火が胸をよぎり、サイレンの音が耳の底をたたきます。限られた短い時間の中で、私達なりに精一杯のことをしたつもりだったけれど――。その思いに幾日かこころは揺れ動きました。そして今、私達の気持ちは気持ちとして、今後の息子達の生き方がその答えを出してくれるに違いないと思うことにしている私達です。

ひとつごとで なくなつた日

田端 節子

明石で生まれ育つた私。「明石は地震もないし、津波も来ない住みよい町や」と大人たちが話しているのを聞いて育つた明石。まさか

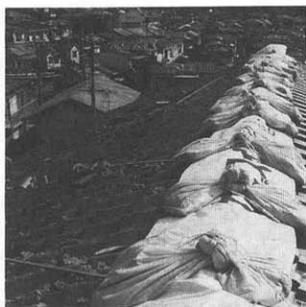
あの激震の日から、あちこちの地震情報は他人ごとでなくなりました。比較すれば明石は神戸に比べて悲惨さは軽微だっただけ、あの時の神戸や大変だった市や町の人々の痛みが日が過ぎてから、より強さを増して心と身体にずしりと迫ってきます。

あの日から一年、毎日が地震後遺症の中での三六五日だったように感じられます。人の痛みが自分の痛みとなつて何かを、自分に来る何かをしなければと感じた地震でもありました。

我が家は灯油の給湯器だったため、ガスを待たずにお風呂に入る事が出来ました。にわかのお風呂屋さんで、時間を決めて知人、友人や御近所の方に声をかけ、シヤワーもタオルも壊れたお風呂に大変喜んで入ってもらいました。後日、その中のお一人の妊婦さんのお母さんから「無事赤ちゃんが生まれました。その折は有り難うございました」とお電話を頂いた時は、思わず胸が熱くなりました。また、若い友人と三人で、高齢者のお宅の散乱したお部屋の片付けをお手伝いした時とても感謝され、その日まで見ず知らずの方だ

つたのに、新年に年賀状を頂きました。

二月、シンガー・ソングライターの「きたがわてつ」さんとも神戸の避難所の広場や公園などに明石の養護学校、学童保育所や診療所の中での「大震災なんかには負けないで」コンサートで被災者の方々に励まして歩いた六日間。ガレキの町に、被災者の心に、てつさんのやさしい歌声が響き、生きる力、愛と希望を歌に託しました。震災で家や職場を失ってかけがえない肉親までなくした被災者の皆さん、高齢者の方々の心はまだまだ癒されません。



大屋根の応急手当て
(田端さん宅)

半壊の我が家もまだ応急手当てでしのいでいます。擁壁の方には少し傾いた家をどう修理するかは今後の課題です。国の経済や政治が何を目的とし、何を手段とするか。

その考え方、価値観を日本国憲法の崇高な精神に照らして正しく必要を強く感じた今回の大震災での教訓でした。

震度七

当津 隆

震災で亡くなられた方々のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

合掌

いまなお、避難生活を強いられている方々にお見舞を申し上げます。やるせない、ご無念のうちに新しい年を迎えられたこととお察し致します。

天の怒りか地の叫び、怯え、震えた大地震を後世の人びとは、平成の大地震と言いついていくことであろう。あのときの恐怖を無防備な暮らしの反省にかえ、苛酷な試練と受けとめて、次世代に伝えていく責任がある。

大地震は東京や静岡あたりのことと思ひ込んでいた油断を謙虚に考えなければいけない。大火から逃げ惑い、余震におびえ、ライフラインを断たれた市民が水を求め、食料を待つ姿をマスコミによって

伝えられるたびに、助かった我が身の幸運に感謝するのであった。無事であった者すべての思いであろう。

震災後一年を経てなお意の如くなり難い地震の痛手をかかえる人たちのことを思うと胸が痛む。お向かいの家は二軒並んで更地になったままである。地割れのお隣さんをはじめ、ご近所は軒並み補修の槌音が響きつばなしてある。半壊の我が家も応急の修理を終えたままガムテープの傷だらけの越年である。大きな手術の傷跡をかかえての辛い体験でもあった。

恐ろしい思い出には、東京大空襲や長崎の原爆があるが、大地震のこわさは異様な怯えである。足下から繰震えは大自然の天変地異への人類のもつ本能的な恐怖心であると思う。余震のたびに血の気が下がるのは、大脳の支配の及ばない神経のはたらきではなからうか。揺れる大地に対する反射的な現象であるゆえに普遍性をもつのである。

「ガンバレ神戸」に呼応する人々との行動様式に類似性があり、ボランティア活動が野火のようにひろがったのはそのためであろう。

バスに乗り合わせた見知らぬ娘さんから地震の話を持ち掛けられたとき、声を掛け合うという優しさが日本列島を包んだのである。危機を共有する者にとって、生き延びた喜びも共有したいと思うのであろう。

この震災をきっかけに、心の世界を大切に守りあい、地域社会の人類愛的活動が盛んになれば失ったものへの償いにもなる。

人のやさしさ忘れない

中馬 昌代

「ドーン」と言う音が目が覚め、地震だとすぐ分かりました。二年ほど前まで東京に住んでいましたので、地震には慣れていましたつもりでしたが、頭の中は真っ白で、リビングのドアを開け子供達の名前を呼んでいたように思います。

まだ外は暗く電気はつかないし、ラジオと懐中電灯だけが頼りでした。またその時には外では大惨事が起きているとは、思ってもみまじませんでした。主人はいつものように会社へ出かけましたが、大阪まで着くはずもなく、戻って来まし

た。

でも次の日朝早く車で山越えをしながら十五時間かけて会社に着きました。それから約一カ月間単身赴任でした。テレビから流れてくるニュースは地震の被害の大きさ、事の重大さを実感させられ、不安のまま子供達と四人の生活が始まりました。一つの部屋でいつでも逃げられるように服を着たまま、電気もつけたまま寝る日が何日も続きました。でも神戸の人達に比べれば私達はまだラッキーだと自分に言い聞かせ、子供達には不安や寂しさを口にすることなく、お互いにいたわり協力し頑張れたと思います。

あれから一年、早いものです。いつのまにか記憶の片隅にあるだけで、あの時の事を思い出す事があります。花が咲き、雨が降り、実がなり、雪がつもり、何も無かったように、時が流れ、そして一年が過ぎていきます。子供達の中には、深く傷つき忘れられない出来事だったでしょうが、辛い思い出だけではなく、いろいろな体験を通じて、人のやさしさ、暖かさを忘れないでこれからの自分の人生の励みにしてほしいと思います。

1・17 記録の中から…… 学んだものも……

西村 寛(62)

一月十七日(火)

夢うつつの中で、突然に無気味な地鳴りを聞いた瞬間、ドドドン、グラグラとこれまで六十年の人生の中で未経験の縦揺れ横揺れ。恐怖の二十秒、長い感覚的時間に見舞われた。時は平成七年一月十七日未明。霜満る午前五時四六分。生涯忘れない、否、次代の子や孫に語り継がねばならぬ兵庫県南部地震。

今、平成七年の年の暮に当り日記を紐解いて、当時の思い出を再現しておこう。

一月十六日(月) 振替休日(3連休の最後)

昨年、仲人をした教え子の新居を訪ね談笑。夕方、娘夫婦、孫たちが来て楽しいひと時、そして食事。夜も更けて暖かい床へ入る。

「今日も又 悦びの日よと床につき」と文末に記している。

六時間余り後に訪れる地獄の二十秒の予想などさらさらなく、温かい思いと暖かい床に感謝しつつ一日を終えている。

未明、大地震。即座に洋服箆筥に体を寄せ転倒防止に懸命。地鳴り・縦揺れ・横揺れ・不気味な閃光が繰返し襲いかかり、何やら物が落下して壊れる音。ただ耐えるのみ。ひたすら治まるのを祈るのみ。何ほどの時間が経過したのだろう。とにかく長い時間を感じた。家族の声は聞こえない。暗闇の中、枕元に置いていた懐中電灯を捜す。横揺れで転がって移動。手探りでは不明。家族の安全確認は出来たが床の上は落下物、壊れたものが散乱。足の置場がない……。

東の空が白んできた。数条の黒煙が見える。不気味そのもの。空の色さえ異様そのもの。家から外へ出た。近隣の大人はすでに飛び出していた。会話を交わしつつそこで見た物は、亀裂多数の道路の舗装。もりあがっている割れ目からガスの匂い。ガス会社の電話は不通。消防署へ。「今は打つ手だてなし。舗装下を這うガスの逃げ道をつくるため、できれば舗装をはがし、道路の下水のマンホールを開け、各戸のマンホールも開け家屋へのガスの侵入を防ぐこと。火気の使用禁止」電話で指示があつた。

近隣への連絡。共同作業。携帯ラジオで各地の被害状況・震源地・震度等は、断片的に把握できた。近い明石の様子は情報なし。電話不通。不安は募る。今は自分の視野に入る物のみが情報。情報の窪地の中で余震は続く。不安の中、時のみ流れる。

インフラ・ライフラインのもろさに直面して、文明・科学とは本来に人間の幸せを維持向上する力が……と強い疑問を感じた。自然の力の前には、人工のものは何と……、用便にさえ不慣れた生活を余儀なくされ、余震におびえつつ、壊れたものを片付けながら、激震とはいえ、わずか二十秒の揺れで壊滅される物質中心の科学文明のもろさを考えこんでしまった……

昨日とはうって変わって日記の結びに「平成の 夢打ち砕く 大地鳴り 人の力の いかにも小さく」と記入している。

一月十八日(水)

一夜明けても余震は続く。異常な連続地震。震度は六とも七とも言われる。段々と情報が多くなり、テレビで放映されてくる。あつた物が消え、あるべき物がなくなっている街のありさま。コミュニケ

ーション欠乏症になり始めた街に自然の力が襲いかかった姿。映し出される黒煙と瓦礫にも科学者たちが何度も何度も大丈夫と保証した阪神高速道路の無残な姿にも、ふと「危ないかな日本」との思いがよぎる。出勤前の思いのひとこまである……

当朝霧地域として被害甚大。大きな地割れ各所に。擁壁の亀裂いたる所に。一階が揺れと重さに耐えきれず傾いた家多数。塀の倒壊も多数。屋根瓦移動落下被害全戸か。ライフライン・電話使用不能全戸。避難所朝霧小学校運動場は、避難者の車の列。給水を受けるためのポリ容器を積んだ車と人。

辛うじて電灯の復旧により闇の不安とテレビでの情報遮断からだけは救われている。これで火災の発生が重なっていけば、まさに地獄であり、「危ないかな日本」そのものであろう……

この日の末尾には「明日使う体力のために上着だけを取りゴロリと床に入る。床で足が伸ばせるだけ幸せ！」書きつつ昭和二十年、戦時体制下、戦災に遭った少年時代の生活、焼け跡の瓦礫の中に空腹に耐えて立っていた日と思う。

と記入している。

消防・救急車・パトカーのサイレンを聞かぬ日なし。深夜にも救援のヘリコプターの爆音に目を覚ます。人が溢れる避難所での問題は濁きと排泄の解消、次は寒さと飢えの解消、次は清潔衛生の問題（入浴・洗髪）そして半月にもなると休養への願いが切実になり、その解決に行政・ボランティアの努力が続いた。

〈大震災から学んだもの〉

震災が奪ったものは大きい。が、学んだもの、将来のために考えておきたいものも多い。

避難所への救援物資の配送、被害実態調査時に感じたもの
○家族関係では

同居家族間では、父親のたくましさ、母親の温かさ、高齢者の知恵、子供達の明るさなど、各々の存在を確認し、家族で困難に耐え、乗り越えようとする絆を強くした家族が多かった。困難を通して家族一人一人の存在を各々が認め、心の居場所の確認が出来たようだ。

○男女の視点から

「男は仕事、女は家事育児」の生活形態が一層強まっていた。家の中の家財道具の散乱の隙間で、

余震の危険にさらされながら年若い女性が、あるいは若い母親と幼い子供が生活をしている家も少なくなかった。確かに、男にとって仕事は大事であるが、非常事態の家族の中で父親の役割は、稼ぐということだけではないはずだ。

家族の安全の確保と、家族の安心感の醸成に努力が足りないという不満も聞いた。その影には上司の仕事第一、効率重視、非常事態における職員への人権軽視がある。

「震災当日跡片付けも不十分なまま翌日通勤手段を変えてまで出勤した時、上司は見舞も言わずに小言だけを言ったので、家族の危険を気にしながらも主人は仕事大事、家放置になっている。女の私は仕方がないので仕事を休んでいる」と話す子供を連れた女性がいた。上司たるもの、考えさせられる一件である。

○弱者は高齢独居女性

家屋に大きな被害を被った多くは、高齢者所帯である。中でも、独居の女性高齢者の比率が多いし、支援の情報にも疎く取り残された子供でも、すぐに見舞ったり、生活用品をもって安否を尋ねているのは、同じ恐怖の体験をして自分

も被災者である子供が多い。遠近という地理的条件もあろうが、共通体験というものが、人々の心をいかに繋いでいくかを物語るものである。

〈被災に強い街づくり〉

情報欲求と人間関係作りの欲求は二月までは大変強く、知らないもの同士でも声を掛け合い体験と情報を交換しあつたが、震災後、一カ月も過ぎたころからその光景は消えていった。そのころ復興に向けて、各自治体が「災害に強い街づくり」を叫び始めた。建築物の耐震性、都市計画、インフラの強化、救急体制、情報網の整備、どれもみな大切なものである。が、

震度七に耐えたとしても、それより大きい地震がないという保証はない。財産も大切であるが、一番大切なものはというと、命であろう。この度の震災で、財産的被害は、北淡町も阪神間も同様に大きい。しかし、人的被害は北淡町では非常に少なかった。震災二日後には行方不明者はなくなっていた。

自治消防団と婦人会の連携による救出活動の成果なのである。女性が近隣の家族構成を知り、顔を知っていて避難所に見えない人を確

認でき、その人の家、寝ている位置まで知り尽くし、消防団の案内が出来たという。神戸でも野間地区では企業の消防隊と地域住民の協力で火災を最小限に食い止めたという。つまり、普段からの地域

づくり、ハード重視・土木技術依存偏重のみでは目的達成は難しい。地形が険しいが故に、住みよい心温かい朝霧の街づくりは、住民が自治会・女性の会に参加し交流し、豊かな人間関係作り、災害に強い街づくりのソフトをつくり、朝霧の新しい地域文化を創造した時、目的達成が出来る。

「今もなお 更地に置かる 安否 札 木枯しのなか 年の瀬さむし」

忘れずに生きて行こう

学生 T・O (20)

震災当日、私は東京にいた。朝テレビをつけると神戸の街は燃えていた。あわてて家に電話をかけたがいつこうにつながらない。どうすることも出来ず、ただ、ぼう然とテレビを見つめていた。

午後になって、ようやく家と連

絡が取れた。人も家も無事とのこと。思わず神に感謝した。

東京でもほとんどの人がこの震災に驚き、注目していた。多くの知人が私の家の安否を気遣ってくれたし、中にはボランティアとして神戸に行きたいと言う人もいた。しかし心ないことを言う人もいた。若者が街の燃えるようすはまるで

中朝霧丘

震災の教訓を糧に

中朝霧丘
自治会長 日光 正雄

私は、朝霧に住んで約三十年になります。震災当日、夜明けとともに、私の家から見える朝霧の街の光景にがく然としました。私も微力ながら、地域のために活動をしてきた者として、この度の朝霧の街の崩壊ほどショックはありませんでした。テレビを見て、朝霧地区はまだましかと思ひ、知人から、明石西部は、平常と聞き、朝霧地区は、やはりひどいのかと、いろいろな事が頭の中をよぎっていききました。諺で、怖い物の順番

ゲームを見ているようだと言っているのを耳にしたりもした。

本当に怖いのは想像力の不足である。雲仙の時、奥尻の時、心の奥底ではやはり他人ごとだと思つて私はそれを見ていたのだ。

私は今度の震災のことを忘れずに生きて行こうと思う。

の例えとして「地震・雷・火事・おやじ」というのがありますが、私が幼少のころ、経験した雷と、この度の地震とは、地震は比べようのないほど恐ろしいものでした。福井地震・南海地震等で一応の知識はありましたが、この度の激震は、想像をはるかに越えるものでした。しかし、ア然としているのも、つかの間で、震災当日から地域の方々が店に殺到し、大混乱となりました。とくに、ブルーシートは、すぐに品切れとなり、ようやく遠方から仕入れても原価が高く、皆さんにご迷惑をおかけしました。この時は、緊急時における流通確保の重要性を身をもつ

て痛感しました。

また、立场上、地域の方々から、瓦等のガレキ処理をはじめ、いろいろなことで問い合わせが殺到し、行政からの指示を待つまでもなく、いろいろと対処に迫られました。理解と協力によって、さほど混乱もなく、対応ができました。この



日光さん宅2階からの被災状況

時、私は地域の人と人のつながりの大切さを痛感しました。特に、八月に開催した朝霧地区連合復興祭には、地域ぐるみで多数の方々に参加していただきました。そのため、一部収益金を義援金として、明石市に寄付させていただきました。市長から地区連合会に感謝状をいただきました。これも、地域の皆さ

んのお陰と心から感謝いたしております。

さて、あらためて地域の防災を考えると、震災前は、防災訓練で消火器の取り扱いを行なう程度で、地震に対する備えは全く実施していませんでした。幸い、朝霧校区では、大きな火災は発生しませんでした。が、今後は、あらゆる災害を想定した防災の備えが必要でしょう。そして、お年寄りから子供までが安心して暮らせる街にするために、地域が一体となって、考えていくことが大切です。震災での教訓を糧として、朝霧を素晴らしい街にするため、地域の皆さんと共に、少しでも街づくりのお役に立てればと思うこの頃です。

時計がまた動いた日

井手 ヤス子

震災が発生して一カ月後の二月十七日の朝、突然、低空を旋回するヘリの轟音に驚かされました。音に対して過敏になっているときでしたし、何よりも、内外壁が落ち、半壊状態になってしまってい

た家が揺れたのです。ちょうどそのとき、朝七時のNHKニュースのトップに、天文学館の時計台が映しだされ、正午を期して復旧されると伝えられました。へりはその取材のために飛んでいたのです。大震災の本震は、わずか二十秒足らずのことだったと聞きますが、今でもそれより、ずいぶん長いものだったように思われてなりません。慌てて家を飛び出してきた人達と、お互いの安否を確認し合っていると、冷たい雪が頬にかかってきたことが、妙にハッキリと思い出されます。その間にも地面を揺るがすような余震が何度も続いて、その度に未明の闇の中から響いてくる瓦の落下する音や窓ガラスの振動が、私の耳には悪魔の絶叫のように聞こえ、不気味に染まった東の空が何かもつと恐ろしいことが起こる前兆のように思われました。恐怖と寒さのために、身体の震えがいつまでも止まりませんでした。

午後、小康状態になった余震の合間を見計らって入った室内で見たのは、文字通り、「足の踏み場もない」ほど散乱した家具や食器類の破片の山でした。茫然として

るうちに日が暮れ、様子を見にきてくれた娘夫婦の勧めで、しばらくそちらに避難させてもらうことにしましたが、一日中、何も口にしていないことに気付いたのは、娘の家に着いてからのことでした。数日後、のっぴきならぬ所用があり、神戸へ出かけました。長田あたりで目にした惨状は、テレビで見ると何倍もひどいものでした。用意していたおにぎりも喉を通らず、カメラは一度もシャッターを押す勇気がないまま帰ってきました。さて、テレビのニュースを見た私達は、時計が復旧される時刻に合わせて出かけてみることにしました。上空には取材のヘリが旋回しながら待機し、大勢の人がその一瞬を見ようと待ち構えています。「アッ、動いた」。十二時キツカリに、時計はまた時を刻み始めました。私には、それが明石の再出発を象徴するもののように思われ、家に帰ると、五時四十六分を指したままの我が家の掛け時計をさっそく動かしてみることにしました。活動を停止してしまつたような自分の気持ちを、時計に託して動かしたいと思つたからです。あの日から一年近くがた

ち、町並みも随分復旧した姿で新しい年を迎えようとしています。しかし、震災は終わったわけではありません。人々が負った物心両面の大きな傷跡は、これからも当分癒えることはないでしょう。新しい年が、明るく平穏な年であるよう願わずにはおれません。

人間っていいな

柏井 佐知子

ドドド、車が走る音に「あつ地震！」樋を伝う雨音にまた雨漏りが！ 葺き替えした屋根なのに、一瞬の惨事だった大震災から一年余りが過ぎようとしているのに、いまだ地震の後遺症をひきずっている。突然に立つていられない程の大きい揺れ、ガチャガチャン！思わず耳をふさぎ、台所のテーブルの下にうずくまつた。「〇〇さん、どうしている？ 大丈夫？ 早く出ていらっしやい。」大声で呼んで下さったのは近所のIさん、まだ夜の明けやらぬ余震の続く中、亀裂したてこぼこ道を、いち早く駆け付けてくれた子供夫婦、涙が頬を伝った。やがて夜が明け、われにかえつた目に写つたのは、くずれた屋根瓦、落ちた外壁、転がったり壊れた食器、ア然としている私に「しつかりしないと」と子供に叱咤されたあの日！ それから一カ月、半年と過ぎ、桜の咲く春もなく一挙に季節は移り変わった。屋根にかけたシートが風にあおられる度に「雨漏らない」と声をかけて下さったり、バケツを受けたり、ビニールを敷く手伝いをして下さった方々など、大きな余震がある度に「大丈夫」と電話をかけてくれた子供達、近所の方々、水がいったい入ったポリタンクを運んで下さった方！ きれいな水だから飲み水にとペットボトルを下さった方！。今、こうして新しい年を迎える事が出来たのは、周りの人々の力強い支えがあったからこそである。恐怖だった震災だが、貴重なこの体験、筆舌には表せないことばかり。人間っていいな。生きていてよかつた。人の心の温かさ、物の豊かさに感謝して今晩も震災リユックを枕元に床につく。ありがとう！

あたりまえの

ことにも感謝!

中二 薄 知子

一九九五年一月十七日、午前五時四十六分、大きな揺れで目が覚めた。私はすぐに布団をかぶった。小さな豆電球の光も消え、家中が、がたがたと暗い闇の中で揺れ続けた。私は何が起こったのかと布団にくるまったまま茫然としていた。今まで体験したことのない出来事だった。ショックと寒さで、体がぶるぶる震えた。

幸いにして私の家は、つぶれずにすんだが、予想もつかない被害が神戸、東灘一帯に起きているのに驚いた。鉄骨の建物や高速道路が跡形もなく崩れ落ち、JR新長田駅、鷹取駅周辺は、焼け野原になっていて、思わず涙が出た。親戚の家が新長田駅の近くにあったので、急に心配になった。何日かたって、おばちゃんから無事である、と電話があったので安心した。この震災で沢山の人が亡くなられ、とても悲しいです。御冥福をお祈りします。

鉄道も徐々に回復に向い、学校

へ行くことが出来るようになりま

した。ふだん何事も無い時は、これであたりまえ、と思っていまして、こんな災害が起きると、何にでも感謝しなければいけない、とつくづく思います。電気、ガス、水道も全部止まってしまった時は、本当に困りました。とくに水がなければどうしようもありません。田舎のおじさんが、ポリタンクで水を、そして食料、プロパンガスを持ってきてくれたので、とても助かりました。こんな大きな震災は二度とこないようお祈りします。

「人の心」をくれた震災

藤間 京子

あまりの揺れに、現実は何が起こっているのかわかりませんでした。何回かくる余震に怯えながら夜が明け、はじめて事の大きさが分かり、そのすさまじさに、改めて夢であつて欲しいと願いました。赤く染まった東の空が、今も目に焼き付いています。

や々と通じた電話に「何が欲しい」と聞かれ「カセットボンベ」

と言ったら、千葉から広島、島根から届きました。今もわが家にはたくさんのおボンベがあります。大切に大切に使っています。九州からペチャンコのパンが届きました。

二十五年前に住んでいたアパートの隣人から電話がありました。よく気のつく伯母から割り箸と紙皿が届き、一人で年金生活をしている人から見舞金を頂きました。数えきれない人の心にもふれました。震災それは私にとつて失ったものより与えられた方が多く、大切な心を素直に喜べるやさしい気持ちにしてくれました。

一年たって、自分の生活は何とか元に戻りました。これからは、あの日ですべてを失った人、心身ともに傷ついた人が一日も早く元氣を取り戻して欲しいと願います。出来る事から協力したいと思いません。無責任なエールを送りたくありません。自分を不幸と思ひ、文句を言う前に立ち上がって下さい。そして前向きに頑張ってください。一人でもいい、一日でも早く、元の生活が出来るよう祈っています。

水対策の二週間

日光 芳美

就寝中、突然、背中から突き上げるような感じがし、とび起きようとした瞬間、ぐらぐらとものすごい揺れがきました。「こわい」と一言、口からでましたが、それ以上言葉を発することも、動くこともできませんでした。二十秒という事ですが、その時には、何分にも感じられました。食器類や人形ケース、窓ガラス等割れてしまいました。幸い家族にケガ人もなく、ホッと一安心いたしました。日常生活からいいますと、主人は震災直後から仕事にでかけ、私は子供達と余震に怯えて暮らす生活が続きましたが、近くにおります義父母と義弟に支えられ、安堵感を得ると共に、家族の絆がどんなに大切かを知りました。生活の中で、何といたしましても一番困りましたのは「水」でした。今までは、蛇口をひねれば水が出るのが当然のように使っていました。飲料水、トイレ、洗濯、お風呂等々水は、私達にとってなくてはならないものです。それが、二週間程、まっ

たく出ませんでした。前日のお風呂の残り湯が、トイレに洗濯にと大変活躍しました。その他は主人が毎日、給水所に水を汲みに行ってくれました。洗濯は、つけおき、もみ洗い、ため濯ぎ、水洗トイレは、ペーパーはゴミ箱へ、そして一回分流すのにバケツ三杯は入れないと流れなかつたので必要な時だけ、流すようにするなど、どうしたら、水の使用を最小限にすることができかを、考えさせられました。震災から一年が過ぎようとしており、私達は、今までどおりとはいかないまでも、不自由のない生活を始めています。震災の教訓を活かし、毎日の生活に役立てていかなければいけないと、毎年一月十七日という日がくるたびに、思い起こさせてくれるでしょう。

大地震に思う

廣瀬 徳七

阪神淡路地震から一周年を迎え、犠牲者の御冥福をお祈りします。さて新聞に次の記事が出ています。お父さんはガレキの下敷で動

けない。火は次第に迫ってくる。父は「早く逃げよ」と叫び子は「お父さん」と叫ぶ、父を救けることは出来ない。また夫はガレキの中からやっと這い出し、懐中電灯でガレキの中を見ると妻は元気な声で「ここです」と叫んだ。しかし火事の火は迫ってきた。「お父さん早く逃げて」と叫んだ。このような悲痛な別れ、断腸の思いで、居ても立ってもいられない。水があれば消火でき救われるのに。消防車が来ても給水管が破壊され水は出ない。水道水が出なければ川の水、海の水を使ってでも消してほしい。幸い倒壊をまぬがれた、または、半壊だが修理可能な家屋、家財が火災のために失われ、それと共に多くの人命をおとすことにつながったのは誠に残念であった。私は神戸で生まれ、四十九年間、教職に就いていた。日本の何処かで地震が発生し、地震の会話のとき「神戸には地震がない。神戸は地震に強い」という会話を何度か聞きました。この噂はどこから出たか知りませんが、神戸大学のあの教授は、神戸の地層を調査して、神戸に地震の起こることを警告されましたが、それは軽視、或は無

視された感がする。神戸は地震に強いという先入観に支配されたと思う。地震の際の火災については七十年余り前の関東大震災で苦い経験を持っている。大火災になると熱風が風の如く吹きまくり、手の付けようがない。地震対策は種々研究されている。地震の予知、活断層の研究、耐震建築の研究だが、防火消火の点でどうか、とくに大地震の際の処置は、どの程度進歩したか、天災だから、ではすまされない問題である。

火災には初期消火が重点の一つである。水がなくても消火出来ないものか、消防署員が来るまでに、少しでも消火出来ないものか、消火器は火災のそばまで行って使用しないと効果がなく、危険である。消防署が来るまで、近所の住民で安全第一で初期消火が出来ないものか、即ち住民参加の初期消火である。私が中学生のころ消火弾の話がありました。消火弾ならば、水がなくても、二十〜三十秒離れた場所から使用でき、住民参加で消火弾の数で効果をあげる。現在の科学で効率のよい消火弾が開発されないものか。最後に寺田寅彦先生の言葉「天災は忘れた頃にや

つて来る」が強く胸に響きます。

夫婦でぼつぼつと 行きます

村田 成吉

起きている気配、新聞の音、伝わる日常の流れ、^{グドン}、顔の前に飛ぶテレビ、濁流の如く棚から図書がくずれ。ひざまずいて中腰の体位を保つに懸命。「大丈夫、怪れないか」「ハイ」の声。手探りで手にした枕元の懐中電灯を片手に妻は「すごかったね」の一言、わりと冷静に見えた。玄関が二つに割れている、体当たりで開く、家の周囲を点検、支えの鉄柱の傾き、壁のふくらみ、雨樋の離れ、建っている、住めるなど一安堵。街は真っ暗、風呂に水を、入るもの全てに飲み水をと言いつつ電話を、須磨に住む娘と孫（誕生三カ月児、三歳児）にかけてるが混線しており、通話不可、（屋根にある温水器の存在を忘れ、災害には冷静を自負する私も妻も頭になく、後に朝霧小学校への水もらいに四時間の行列を体験した）

妻は黙々と米を磨ぎ、ご飯を炊いている。余震に気を配りつつ、十円を握り、カードを持って公衆電話に。だれかが車で通話中、通話可、石川、東京、金沢と親戚代表に、「無事住める」の報と伝言方を依頼、大阪息子宅と交信、見舞いには二次災難を恐れ、絶対に来ないようにと指示、味噌汁のさめない近所でなかったことを喜ぶ。

やっと須磨と話せる。マンション無事なれど、水停止、停電、オムツの欠乏を心配、紙オムツ三ヶ一ス、自転車に十八リ水二、朝食等々を乗せて出発、途中西へと黙々と歩く人、人、ヒタヒタと足音が聞こえる静かな大地、第二国道異様な橋の鉄柱、日が過ぎ時が立つ、変化する道路、東へ向う車、人、二人乗り単車、トラック、応援車、音を立て鳴る警笛、被災者を脅かしわが物顔で走る。父親の夫の家のと災害の対応も多面的に強制される。負けては遅れてはならじ、なぜこんなに俺達の一生はシート支給、行列、一喜一憂、後で壊すとも知らず屋根に登る幾度となく、無駄な努力だったが、満足感はそのなりに日々を充実させた。

市からの貸与ガス用器は長期の燃料器として不便さを補って余りがあった。市役所通い二月八日から、被災証明(居宅半壊・別宅全壊)減免申請、解体関係、氏名訂正、二月一杯届出、証明書の入手等々で日が過ぎた別宅分十月二日付け法務局明石支局より、平成七年壹月壹七日震災による建物の滅失登記の通知のハガキ。倒壊家屋の終末である、なにかこれで切りがついた感。市の窓口の対応は総じて冷静、控え目で好感があった。臨機応変に災害に対処された消防職員に感謝と敬意を表します。

年賀状百六十枚、丙子の絵と「静楽迎春」と記し、平成八年丙子満六十九才妻六十五才無事息災と年が明ける。被害居宅未修理分若干、工費未払い額残高数十万円、約一年間カギの閉まらなかった体当たりの玄関が、自然に開閉するようになった。不思議な復元力を持った木造建築。「どうれー」夫婦共々ばつばつと行こうか。

何かおかしかった

海の中

山谷 美恵子

平成六年は雨が少なく、断水の日が何カ月か続いたこと。そして九月十月になると、秋の魚でサワラ・サゴシ・サバ等が獲れるのが、ほとんどといつていくらいダメだったこと。そして十一月、淡路島北淡町斗ノ内の親戚に行つた時、五十年間井戸の水が無くなることになつたのに、井戸に水が一滴も無くなつていた。今思えば地下に変化が起つていたのですね。そして十月末にかけて、イイダコの大漁にはびつくりしました。私は魚の小売りをして十二年目になりますが、年末に大漁のイイダコを売るのは初めてでした。不思議でたまりませんでした。そして平成七年一月の初売りからもイイダコ、手長だこの大漁にびつくりしました。海の中がおかしいと平成六年の十月ごろより私の頭から消えませんでした。

十七日の午前一時、犬が吠えるので十分ほど散歩して帰る。まだ犬の様子がいつともと違う。それは落ち着きがなく、すぐに外に出たがる、そうして午前四時ごろ、また、犬を連れて散歩に出た時の空の色にびつくりしました。夕焼けともいえない気味の悪い頭から押さえられそうな空の色でした。今思えば日本沈没というテレビを見た時の空の色でした。私は十七十八日静岡に旅行に行くので午前五時三十分起きて、コーヒーを飲むにお湯を沸かし、顔を洗おうとした時、突然、ドーンと上にあがつたかと思うとすぐ横揺れがきた。私はガスをすぐ消して、冷蔵庫とガスレンジを両手で押さえていた事に気が付いた。すぐに揺り返しがきた。そして収まったので外に出ると、ガスの匂いがするので元栓を閉めました。それから電気がこない、水がない、食品がないのに困りました。食料品は一週間分位保存をしなければならぬことを思い知らされました。今後注意して観察してもらいたい事(一)空の色、(二)お月さんの色、この二つが違った色をした日はほとんどと言つていくらい地震が起こ

っています。

仮設住宅での生活

和田 保子

大震災後一年が過ぎ、忘れないように、風化させないようにと、言われはじめましたが、私共では家の再建もまだこれからです。家は重要文化財十分の一の模型を制作しております。あの朝、まず隣の作業場へ、倒れた木材の山をかき分け、完成間際だった唐招提寺講堂の無事を確認し、胸を撫で下ろしました。が、その後家の内外の被害を見てがく然としました。擁壁亀裂、地盤沈下、家も傾斜して九月に解体致しました。三十年前、亡父と主人とで建てた家、シヨベルが入る箇所毎に、父の仕事していた姿が思い出されました。現在、昼は朝霧の作業場で、カセットガスでの食事づくりや屋外の水道で洗い物、夜は大久保の仮設へ。屋内でお湯が使え、入浴して一日の疲れも癒すことができ、有難くおもっております。しかし朝の冷込みは厳しく、高齢者の方等

大変だと思えますので、きめ細かな行政の対応を願っております。

震災にあつて

匿名

平成七年のお正月気分も少しぬけかけた一月十七日の早朝暖かい布団から起き上がったとたん、グラグラと地の底から突き上げてくるような不気味な揺れに、しばらく動く事も出来ずじっとしていました。隣の部屋の主人の所へ這つていき、二人で硬直したようになつていました。揺れが止まると犬の鳴き声や人の話す声で回りが騒がしくなつて、大変なことが起こつたのだとわかりました。先ず神戸のマンションの七階に住んでいる息子夫婦に電話し「こっちは大丈夫、そっちは」「おやじは」「大丈夫」と確かめ、電話は切れてしまいました。今思うと、つながつたのが不思議です。それから、テレビに映る惨状は目をおおいたいばかりでした。電気だけは通じたので、情報が入つたので良かったと思えます。家の中はタンスが

倒れ、食器やガラスの破片、土壁が落ちたので足の踏み場もない状態で、気が張っていたのか疲れも感じないで動き回っていました。水の確保には困り、友人が単車で飲み水を届けてくれたり、前の家の御夫婦が貯水場に水を汲みに誘つてくれ、ポリバケツにゴミのビニール袋を三重にして水を一杯汲み助かりました。物の不自由はあまり感じませんでした。生協でパンや麺類を並んで買ったのですが、何でも代わりの物ですむと考える

と、戦時中の母達の苦勞がわかつたような気がしました。人の暖かさも心にしみるのが一杯で、一人の出すエネルギーも多く、人間とはこんなに素晴らしいものだったのか、とつくづく感じました。家を無くした人、家族を亡くした人、哀しみはいかばかりかと思ひ、テレビを見る度に胸が一杯になります。あれから一年、人間の記憶は段々薄れて行きますが、今年は何事もないように神に祈ります。

東朝霧丘

地震當時を思い出して

石原 絹子

昔からこんな故事をよく口にしました。「地震・雷・火事・親父」やっぱり地震の一揺れに、恐怖感が一番強いと実感しました。一月十七日午前五時四十六分、あの二十秒間という地鳴りと上下左右の震動には、血の気もなくなり、今も絶対に忘れません。私も明石に四十年間住んでいます。まさか、

明石直撃の地震が起きるとは、夢にも思いませんでした。過去に福井地震・鳥取地震など大きな地震の余震として、震度二・三は何回も感じましたが、その度に明石は何事もなく良いところだと喜んでいました。台風にしても予報があり、五十年前の第二次世界大戦でも警報が出ました。しかし、地震は予報も予告もなく、突如として大揺れに揺れ、道路も家も塀も、電気もガスも水道も根こそぎ破壊

し、その後も何回となく余震が襲い、日常生活のできないまま地下に潜り活動しているかも知れませんが、この腹立たしさはどこへもつていけば良いのでしょうか。

地鳴り後は開かずの雨戸自動ドア
震災で家の中で朝霧丘
一月十七日の夜明けは、雪がちらちらしていました。やっとの思いで雨戸をこじあけ外を見ると、庭の石灯籠がなくなっています。ぎばしとかさは、何と塀を飛び越え道路まで飛んでいたのです。あの重い石灯籠がと、まだまだ、家の外壁がほとんど落ちてしまい、



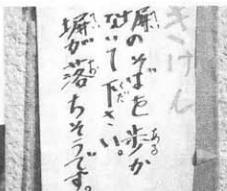
石原さん宅の台所の散乱

東朝霧丘の道路

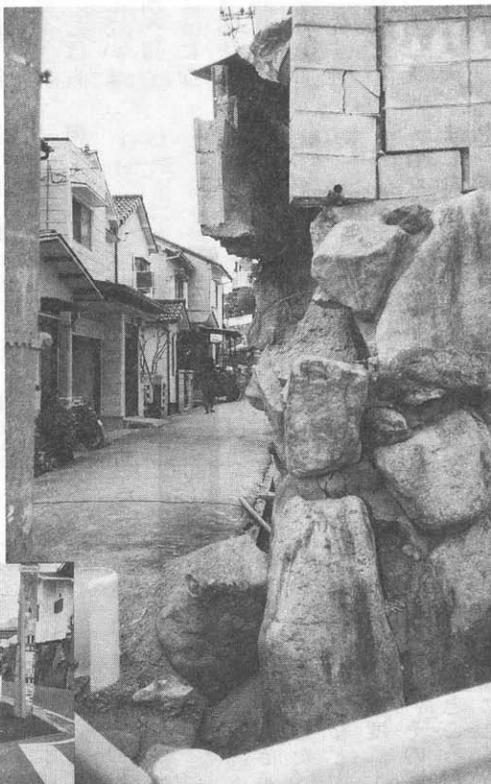
1.17.AM6:00



東朝霧丘中部の道路



炊事場・洋間・日本間とも足の踏み場もなく物が倒れ、ガラスが割れ、食器が重なって割れ、ただ呆然と立ちすくんでいました。今も時々ガラスの破片が出てきます。前の道路をダンプが通るたびに余震だと、何回も錯覚したものです。明石の東部がこんなに破壊しているのに、テレビには垂水区から姫路に、豊岡に尼崎にいつも明石がニュースからとんでしまう。明石はどう



東朝霧丘西部の石垣



木村さん宅の前の道

なっているのかと不安になりました。私達の住む地域に対する情報の必要性を、今回程、ひしひしと感じたことはありませんでした。昨年は、地震災害の上にオウムサリン事件の恐怖、金融関係破綻

の信用問題、核実験の国際不信など、余りにも多くの事件があり、この用紙に書き尽くせません。

神戸で被災された方々が、負けるものかという心意気で、復興に努力されている様子を見て、人間の力には輝きがあると思いました。

平成八年は、末広がりに平和な年でありますよう祈るのみです。

地震の思い出

大塚 勝弘

平成七年一月。我が家の正月は昨年のお繰り返しの様に穏やかに明けた。例年のとおり、家内や娘達が暮れから大騒ぎしてこしらえたおせち料理。友人や親戚などとの交流。これらが全く毎年のおくり過ぎてゆき、一月十五日、十六日の連休も、ほとんど正月気分も抜けながらも、恒例のように家族でのテニス、娘達の初釜の振り袖を楽しんだ。小生、昔から貧乏性のため、休み明けの朝は早く目覚めその週の仕事などの計画を練る習性がある。運命のこの日も五時に起床し、やおら新聞を丹念に読んで後、トイレでいつものように用を足しながら、何かと計画を考えていた。考えもほぼまとまり、

立ち上がったのが五時四十五分。まさにこの時間である。

とても立ってられないひどい揺れ。こんな揺れは、小生の五三年の人生のなかで未だ経験がない。一体何が起きたのか。これがその瞬間の考えである。さてはダンプか何か？が家に飛び込んできたのか。しかし、前の道路はダンプがフルスピードで走れるほど

広くはないし。そのうち停電。それにしても、家族の声が聞こえない大丈夫か、悪寒が走る。何ともあれ懐中電灯をと、ありそうなのを焦りながら探す。家族が二階の寝室から降りてくる。とりあえず全員無事。やっとなつかれた懐中電灯。あたりはガラスや瀬戸物など散乱。何回も地鳴りと揺れを感じた。とりあえず暖かくして車に避難。ラジオを入れる。地震とひびく言葉が聞こえる。明石が一番ひどいのではないか、と思っているのに、ニュースはもつとひどい状況を刻々と伝えてくる。

午前七時、夜が明け出した道路には、瓦が山のように落ちていて、向かいの家のブロック塀が道路に倒れている。四、五軒離れたお宅は、どうみても傾いて見える。ご

近所の皆様も表へ出てお互いの無事を喜ぶ。

親戚の皆はどうなのか。心配をするも電話が用をなさない。結局、その日の午後四時ごろ、ほぼ皆が元気であることが判明。

ところがしかし、須磨の八十五歳と八十歳のご夫婦の消息が漏れている。大丈夫か、気持がいら立ち焦ってくる。車はあっても道路は使えない。ご老人だけに、きつと心細く誰かを待っているに違いない。無事であって欲しい、みんなの祈る気持。自転車！これこれ。明石から須磨へ全速力。自転車できえ、途中押ししてしか通行できない箇所がある。とにかく須磨へ着いた。須磨駅前より離宮の方向に斜めに横切る所がおじいちゃん、おばあちゃんの家。たくさん家がつぶれている。方々で火事が起きている。おじいちゃんの家途中までがこの状態。自転車に進むことも無理。後は自分で走る。必死で走る。やっとなついた。家は傾いており、隣の家もつと傾いて、おじいちゃんの家が支えている。玄関はつぶれて、開けることができない。裏木戸が開いた、勝手口が開いた、大きく叫ぶ。奥の

ほうからご夫婦の心細い声。よかった！助かっていてくれた。誰かに感謝というわけではないが、誰かに感謝している自分に気がついた。自然という大きな力。人間は自然を自分流に変えることができるという奢った考え。この傲慢な奢りを頭から粉々に打ち砕いたのがこの震災であるのか？

あと何年か経て、この教訓をまた忘れてひどい目にあう。

これを繰り返しているのが人類の歴史なのであろうか。

震災雑感

匿名 古稀 姫

昨年末、震災死六千三百八名と報道された。また、いまだに約千名もの人達が避難所生活をしているという。こんなに多くの尊い命が奪われたり、住居に困っている人達のことを知る時、わが家は、家屋は取り壊したものの、建て替えるの目途もたち、代わりの住居もあって、少々不自由ながらも普通の生活をしていることと比べてしまふ。何にもまして、家族・親族

のなかから一人のけがする者もなく元気に生かされていることに對して、まず感謝せねばならない。

未曾有の大地震がこの兵庫県南東部に起きようとは、私たちは全く予期しないことであつた。あの朝の大揺れに、一体何事が起きたのか分からず、ふとんをかぶつて震えていた。地震後は有識者により、大地震の歴史・列島の活断層の位置・活動期に入つたことなど聞くにつけ、地震に対する認識が高まるとともに、列島のどこかでまた、大きな災害が起きるのではと案じられる。それにしても度重なる各地の地震速報には不気味ささえ感じられる。

地震は、人間の力では避けられない天災だといふものの、日本は世界でも有数の地震国であることは分かつていたはずなのに、私たちは、どんな準備をしておけばよかつたのか。余りにも無関心・無防備であつたと、改めて考えさせられる。震災後は、部屋の中はシンプルにと考えたり、貴重品袋を持ち回つて、余震におびえていた私も、もうあれ以上の大きな余震はない、と聞くと心が緩み、部屋のなかに飾り物を並べたがたり、

何の備えもない暮しになろうとしていることに、反省することも少しばしばである。今後、耐震性のある建造物や、災害に強い町づくりが研究されているようであるが、この被災地が一日も早く復興することと、二度とあのような悲惨なことが起きないことを心から祈る毎日である。

一九九五年一月十七日 午前五時四十六分

小久保 富男

この時刻、わずかに十秒程度の地殻の揺れが、こんなにも大きくその人の人生を変えてしまおうとは誰が予見できただろうか。

「人間万事塞翁が馬」と言うが、自然はこんなにも残酷な仕打ちを人間に下すものかと思う。自分の宅地の修復にかまけて、気になりながらも、安否を尋ねそこなつた神戸、芦屋、西宮の知人に、こんな時に不謹慎なやつ、と叱られるしまいかと、恐る恐る出した年賀状の少し遅れた返事が返ってくる。案の定、岡山・滋賀・大阪から、

そして各地の仮設住宅から自宅全壊の報が続々と届く。不幸中の幸いで、ほとんどの全・半壊の方々は、家族全員無事との知らせだったが、中には奥様が梁の下敷きになつて亡くなられ、本人も生き埋めになり、四時間後に救出されたというケースもあつた。

この日、我が家では、息子が早朝に出立するので家内は、朝食の支度を終えようとしていた。突然ドン、ドン、ドンという音とともに、地の底から突き上げるような上下動が四〜五秒続き、引き続いて南北方向の猛烈な横揺れが、五〜六秒続いてから次第におさまつていった。このひと揺れで、新築

四年目のわが家は、無惨にも内壁の方々に亀裂が入り、家具も箆筒こそ倒れなかつたが、本立は倒れ、テレビは転げ落ちるなど、惨たるものであつた。また、台所などの観音開きの食器戸棚の中身は、ほとんど落下して瓦礫の山と化した。それに加え、庭には大きな亀裂が走り、長さ二十メートル程の二段積の石垣の下段部分が膨れ出して崩落の危険が生じ、その修復に莫大な費用と時間を要した。この間、石垣下の隣家の方をはじめ、

沢山の方々の御協力とご援助によつて、危機が回避できたことを心から感謝申し上げたい。

全・半壊の知らせを受けた方々は、年配の方たちばかりだが、悲しみを乗り越え「災いを転じて福となす」意気込みで、やり直すと云っているのを見習つていかねばと思つている。

僕のまわりでは

寺田 裕

ちようど眠りが覚めかけたとき、弱い地震がグラグラときた。

その後の強い揺れは、自分の家に何が突つ込んできたよう、何が何だか、さっぱりわからなかつた。とりあえず「外へ」と部屋の戸を開けた途端、次の揺れがきて母親のタンスが倒れてきた。外に出てみると近所の人たちが騒いでいた。

友人から電話があり、お互いの安否がわかつたが、他の友人の家は、柱が倒れて住めない状態となつていたので、しばらく小学校の避難所にいた。今は仮設住宅にい

るが、おばあちゃんの話では、四人暮しなので狭くて辛いそうである。

兄の家は鷹取にあり全壊。授乳の時間で起きており助かったが、生後二カ月の子は、まだ首がすわっておらず、大変だったようである。家の外は目の前で火事があり、とても怖い思いをしたといっている。

地震のあと、父と車で兄のマンションへ様子を見にいったところ、途中の階段は傾いていて、昇るのがとても怖かったことを覚えていいる。部屋はもちろんグチャグチャ往復に九〇十時間かかった。

祖父は神戸市の荒田に住んでおり、瓦が全部落下。ブルーシートを張りに行った。祖父の弟は、長田で家がつぶれてしまい、何時間も生き埋めになっていたが、助かったそうである。

東灘区の親戚へは、兄が地震後すぐに見にゆくと、家はペチャンコになって、跡かたもなく「もうこれはあかん」と思ったが、近所の人に「今避難所に行つとうで」と聞かされ「不幸中の幸いや」と一安心していた。このように家族も親戚も大きく被災したが、飲み

水やパンなど自分の食べ物、古川などの西のほうの親戚に持ってきてもらったのでとても助かった。感謝している。

もう二度とあんな思いをするのはいやだ。一生、僕の頭の中からあの時の出来事が消えることはないだろう。

涙はあとまわしに

増田 まさみ

一九九五年十二月十六日、約一年ぶりに明石に戻ってきた。倒壊したわが家を捨て、地震直後から垂水の知人宅で三カ月。神戸のポートアイランドで八カ月の避難生活を体験した。幸い仮設住宅への入居は免れたが、家族離散の生活を強いられることとなった。明石に戻って、空き地がさらに増えていることに驚き、自分の経験を重ねあわせ胸が痛んだ。

このほどようやく、ささやかな家を再建し、三カ所に分散していた荷物ともども住み慣れた朝霧丘に帰還したばかりだ。

旦の新聞が出てきた。そこには、兵庫県知事と市長らの新年の談話に掲載され、二十一世紀に先駆ける近代都市計画の展望と抱負が語られているのが目にとまった。今にして思えば、それが果たしてまもなく襲った未曾有の大地震を意識下にとらえたものであったかどうか、また、真に市民生活の安全と幸せに即したものであったかどうか、疑わずにはおれない。高度成長に惑わされ、あらゆる波に乗って、昇りつめた外観上の発展。無反省な時代の奢りへの自然の逆襲だとの思いが、改めて胸をよぎるのは当然である。

地震直後の混乱期、明石の被災が報道外に置かれていることの不安から、私は地元の新聞社、明石市役所の広報室などに、被災の実態を外部に伝えて欲しいと懇願する一方、居住区の窮状を把握して対応してもらいたいと申し入れをした。じつとしてはおれなかったしかし、手応えはすべてもどかしいものだった。

失望のあげく、くじけそうになつているとき、市民運動のS女史に出会い、周辺の被災状況をつぶさに見聞してもらった。それが私

たちの生の声が外部に拾われた初めての日で、地震発生後二十日以上たったころであった。女史のアドバイスにより、まず自治会の声を結束すること、単独でなく同じ被災状況を抱える地区が結束して、組織の力を形成することが基本だと教えられた。丘陵地帯にあたる地域は、すべて足元の崩壊で危険にさらされていた。梅雨期を迎えるまでに対策をうたねば余震による倒壊が予測された。有志数人で、被災家屋数をつかむために市への陳情書を兼ねた記名書を作成した。その署名の数からほとん



子供広場に捨てられたごみ

どの地区住民が、不安と被害に苦しんでいることがわかった。

私たちは、隣り町の清水地区の方々と合併し、災害対策促進協議会を発足させ、定期的に意見を出しあい、まとめた意見書を市へ提出し、回答を求める交渉も行なった。(四月私は移住のため中断)明石市の被災家屋は、地震直後の役所の調査数の十倍にのぼっていることなども徐々にわかった。

我が家の石垣と地盤はその後、改修工事を施し、近所の家の塀も擁壁の改修も目立つ現在、多くの犠牲を払い、矛盾を抱きながらの復旧に複雑な思いが走る。あの忌まわしい震災から一年。まだ災害の爪跡は深い。

涙を流す暇もなくつつ走った月日が、遠い昔のようでもあり、昨日のようでもある。非常時に何を考え何ができたか、感慨新たな新年である。

帰れない

山下 麗子

轟音と 安否のニュース 寒土用

寒土用 炎の画面見入りつつ

今や遅しと 明石のことを

如何せん

炊き出しの手薄嘆くTEL

今ほど鳥のうらめしきかな

東大阪市の娘の家にいて流感に罹り、交通網も断たれた中、なすすべもなく、ただテレビの画面に見入っていた。そんな時、会長より炊き出しの電話を受けて、そして、帰宅後、まさかわが家の被害甚大とは想像だにもしなくて……。

大地震を乗り越えて

H 生

元来、地震に対する感覚はグラグラ来るもの、と思っていた考えを根本的に変えた今回の兵庫県南部地震。一説によると数百年ぶりとか。

突然、夜明前に「ガン」という音ではじまった。時間にしてわずか十数秒間が、随分長く感じられた。だんだん激しく、そのうち家具の倒壊、棚の上のものすべてが落下。ベッドの上にはテレビ・人形ケースが飛んできて、部屋中、

瞬時にしてガラスの海。周囲は真っ暗闇。度胸を決めて夜の明けるまでベッドの中にいることにする。

しかし、繰り返し襲ってくる余震のために落ち着かない。その時、ふと思いついたのが、奇しくも五十年前の昭和二十年一月十九日の米軍のB29による明石大空襲のこと。同年七月七日まで、何度もうけた爆撃の恐怖。防空壕で経験した、爆弾落下の瞬間の衝撃に近い今回の地震は、その子供の時に受けたあの恐ろしい体験に似ていた。

夜も明け、電気が回復し、テレビを見るほどに、各地の想像を絶する被害の大きさに再び驚く。我が家の被害も相当なものだが、天災ゆえ、致し方なしと諦めざるを得ない。ガス・水道も止まり、生活の手段も一時的にせよ困窮し、食料品も流通が止まり、供給不能になって、物資購入のため大勢の人の列ができる。道路も寸断されて町は車の洪水。あらかじめ予想されたこととはいえ、現実目撃されたことを見ると、今更のように、今日の社会の弱点を思い知る。

再び五十年前に思いを馳せる。当時は裸一貫になっても「国のため」という一言で、皆黙々と再建

のために努力して働いた。その経験を持つ年代の者は、最早現役にはほとんどいないと思うが、いつの時代にも、不屈の精神力を必要とする時が来ることを実感する。

幸いにして、今は世の中が平和なおかげで、落ち着けば物資も豊富にあり、世界から全国から救援もあり、徐々にではあるが、町も活気を取り戻してきている。最後に再度五十年前を思い出して頑張ろう。

私の震災

T M

一月十七日早朝、私は単身赴任の夫を駅に送るため、地下の車庫に入ったばかりだった。もう一分地震が早くきていたら、私は地下車庫に閉じ込められていたかもしれないと思えばゾーとする。今は文明の発達とともに、すべてが電気で物を動かす時代だ。

電動シャッターのわが家の車庫、停電するとどうなるのか。今まで考えてみたことなど一度もなかった。私は、いかに毎日の生活の中

朝霧北町

よみがえった家

加古 紫園

野島断層から明石海峡を隔てて、真北に当たる明石市朝霧一帯は神戸と同じ震災地でした。私の家も例にもれず家全体が南西に向って傾いたのです。柱は五度ほど傾いて窓、障子は三角形の隙間が上下に出来ています。震災の直後から桧の柱を間口に八本突っかえ棒として支えていたのです。建築業者の方々は口をそろえて「修復は無

で無頓着に生きているか、この震災で最悪の時のことを予想して、今の生活を、一から見直さなくてはとつくづく考えさせられた。幸い家は、大した被害もなかったので、小学校の避難所にお手伝いに行かせて頂いた。朝昼とおにぎりが届けられるのである。余ってしまった昨日の分が何百個と、まるで冷凍のようになっている善意の市民のおにぎり。テレビで見ていると、食料の届かない所があ

ると報道されているのに、何故こんなに不平等になっているのか疑問で一杯だった。情報の伝達が早く速やかに届く時代に、こんな不公平なことが起きているとは理解に苦しむ。もとの確に避難所の状況を把握し、集約する体制の必要性を感じた。インターネットで世界中が結ばれている時代、もうこんな不平等がないことを願う私である。

理。不可能です」という。床下は断層が三本縦横に深く走っていて、基礎は割れ、胴付け、敷居、鴨居、その他が、ほぞがはずれかけているのです。ことに西北と東南の角とがネジるようにして動いている。雑排水の配管は土の中で切れている。まったくこれからの生活をどのようににすればよいか。取りあえず足下の山と積まれた、瀬戸物の割れ、本、家具の整理が先。しかしテレビでは盛んにマグニチュード六の余震があるだろう、と放送している。忘れもしません四月二

十日奄美大島から、この震災見舞いに若干三十六歳の萩原秀紀君夫婦が私の家を訪ねて来てくれました。「僕がこの家を直してあげる」と天にも登るとはこの事かと涙が出て来ました。後日、何故家が直ると言われたのか、と聴きましたら一言「二階の屋根裏がしっかり生きていたから」と。昭和一桁生まれの私は小さい時、道路の上で家が運ばれている姿を見た記憶があります。曳き屋です。その要領で直すとか、しかし私の家は不等沈下しているとの事、北東側は四センチの上げですが、南西側は

二五センチの上げ、一定の高さの家の移動とは違うのです。翌日から奄美の人と機械が呼ばれて工事が始まりました。正味五十日ほどかかったでしょうか、家財道具いっさい動かさず、生活しながらの状態での補修工事でした。毎日毎日床下にもぐつての工事、レベルは水盛で、布基礎をはつり、三十個程のジャッキ位置を造ります。少しづつ家が上がりて行きます。ギイギイと音を出しながら。やっ



朝霧北町、加古さん宅
角材による支え①と
ジャッキで持ち上げ修理



とのこと、家が水平になったのです。その瞬間の嬉しかった事、この感慨はひとしおです。ところが、それだけでは終わりません、北東の方向に家全体を八センチ動かさなければなりません。色紙のような鉄板二枚の間にコロを三本入れる、その個所も三十カ所造り、チエンブロックワイヤで四カ所の位置を工夫して括りつけたワイヤを今度は、滑車二台にくくりつけて引張るのです。裏になる北東の地には、丈一メートル、直径十センチ程の釘型の鉄柱を埋め込み、それからませて引張る工事でした。

柱がゆがみ、縦横に裂けていた座敷のじゅうらく壁がピタッとひつきました。当然柱は真直ぐになり、建具はなおの事、その間一カ所一カ所ほぞを入れながらの工事です。私の家は四十坪の建物、何か所ほぞがはずれていたのではありません。家がまた裂き状態になり、さげふりは、一階からでは十センチあったそうです。

この家の修復工事に情熱を燃やしてくださった萩工建の代表者萩原秀紀君をはじめ、従事して下さった諸君に感謝してもしきれない

思いを抱いています。萩工建の方はこの後も私達のような家や、寺の庫裏のジャッキアップをされておられますが、私の家程、倒壊寸前のひどい家はないそうです。このような技術がもっと早く一般に知られていたらと思うと同時に、またの天災が起こらないとは言えません。この記録が役に立てられる事を願って各方面の方々も途切れなく研究され、技術の継承を願っています。

地震と私

松浦 一馬

あの時、スベリ台とトランポリンを合わせた物にあおられたようになり、自分の意志すら奪われました。やっと震動がおさまり、横の家内に「フトン」を冠って寝ておれ、台所を見てくる」。ふだんから足冷え防止の足袋を履いていたから、足の怪我を気にすることもなく、停電中の台所に直行。流しの水道栓を開いたが、水は出なかった。玄関から外に出て、プロパンガスの元栓を閉める。屋外は夜明

け前の静穏。二階に二歳・六歳の孫が居たが、別段の心配もない。倒れるような家具もない。若嫁さんは、深夜勤で付属病院に勤務中。それから一週間ほどは顔を見てない。神戸市内の病院まで、マイカー通勤に片道に三〜四時間もかかったらしい。

地震からもの十分ほどの点検で、寝床に戻り、また眠り込んだ。起きたのはいつもとおなじ七時過ぎ。一番困ったのは「水」。朝霧川に梯子を取付け、杓子で汲みました。飲み水をくださったお二人の思いやりが、どんなにありがたかったか。それらと共に、家屋損傷が軽微だったのはL字型に擁壁が埋め込まれていた事です。地震後の点検か、近くの掘削を見て余計に安心しました。関心ある方はぜひ見に来てください。説明します。昨年六月、家の横に街灯が点いて、市民税を払っていることを実感しました。地震の後遺症だけではありませんが、混迷が続いており、これを打破すべく、例えば、新聞の併読で、より多くの導火線をつくり、自分に「発破」をかける毎日です。

朝霧川逆流

山内 淳子

その日、朝五時四六分、悪夢の数秒「ドドド」と地鳴りと同時に部屋全体が揺れ、ガラス類はガチャガチャと割れ、棚の物が落ちる音。真暗闇の中ガラスを踏まぬよう、とにかくがに気をつけながら、子供達と一家四人で分厚い布団を頭からかぶり、自動車に避難した。カーラジオから流れる死亡者のニュースは、私達に底知れぬ不安を与えた。小雪がチラチラと顔に舞っていたが、マンシヨンのドアだけは出入りができるようにした。寒いし暗いし四人が車の中で不安な心境していると、自宅前の朝霧川がゴウゴウと鳴っていた。後に近所の方が見られた話では、水は川の堤いっばいに逆流し、その後は川草が上流に向いてなびいており、小規模の津波が起こったことがわかった。こんなにも海から遠く離れている所でこのような現象が起きたと思うと恐ろしさを感じさせられた。次第に夜が白むにつれ、周囲を見ると一瞬目を疑うほど驚いたことに、目前に立ち



朝霧川逆流。逆流したあとの状況

並ぶ家々の屋根瓦はほとんど無く、その凄い光景は今でも思い浮かぶ。東の空が赤く染まっていたのはきつと長田あたりの火事だったのでしようか。白い車の天井には黒い灰がポロポロと落ちてきていた。その後毎日伝えられた地震のひどさのニュースは、いうまでもない。近くの学校の体育館の天井が落ちるなど多々の被害があった。ライ

リます。通渋滞、買物も物不足でパニック状態、本当に何もかもが最悪だった。けれど神戸辺りの被害の大きさに比べると私達には家族全員が無事であったという慰めがあった。今はもう二度とこのような悲惨なことが起こらぬよう、防災意識を高めると共に、亡くなられた方々への御冥福をお祈り申し上げてお

フラインはストップさけが何よりの命つなぎ。水、ガス、風呂も不可。外に求めに行くけど交

ついてきた。いろいろな想いが頭の中を駆け巡っていた私はこの時になって、やっとその揺れが、今までに経験したこともない大きな地震と気付いた。この間およそ二十秒位だったと聞いたが、ほんの数秒だったようにも思えたし、長い揺れのようにも感ぜられ、私は全く時間の観念をなくしていた。「お父さん大丈夫か。すごい地震だったな。」息子が驚きの声と共に部屋に飛込んできた。「皆大丈夫か」と私、「うん大丈夫」と息子。

める。歩むにつれて、瓦の散乱、石垣の深い亀裂、ブロック塀の倒れ等が目立つ。さらに北に進んだ。集会所まで来た所で始めて見知りの方三、四名が道に集まっているのに出合った。「家の方は大丈夫だったですか。瓦が落ちてきて危ないのですね。道の中真中に居て、しばらくの間家に入らないようにして下さい。」と声をかけてなお進んだが、屋根や外壁の被害は眼に見受けられた。勿論、室内が無被害だった家は一軒もないであろうが、少なくとも人命の安全は保たれている様子に一安堵して、朝霧中前の坂を少し上がった処で折返し帰路についた。

この時私の頭に自治会長の責務が忽然として浮んだ。事態が理解できずに泣く二人の孫を両脇に抱えて立ちつくす嫁と、ただあわてる家内に後を頼んで、息子と共に無惨にこわれた玄関の階段を踏んで、まだ暗い道に飛出した。

朝霧小の中に入って校庭が液状化現象を呈して居たのに驚き、その上各校舎の基礎部分が、大きく割れたり陥没して口をあけているのを見て、もし学童の在校時間中であつたらと想うと何か肌寒い想いであつた。

大蔵谷奥東山

大地が裂けた二十秒

大蔵谷奥東山自治会
朝霧校区連合老人会
会長 本多 常泰

老人のせいか、私はこの時刻既に起きて新聞に眼を通していた。

その時それは前触れもなく襲ってきた。大きな音をたてて、目の前の家具が激しく、大きくゆれ動いて、ばたんと倒れ、上にあつた物が落ちてきて体に当つた。「お父さんどうしたの。どうなったの」目覚めた家内が後から必死にしがみ

だろうか。とにかくと、もの五十センチも歩くと、道に二十センチもの高低差ができ、さらに十センチ程口をあけた断層に出合った。そして二軒並んだ家が大きく壊れて傾いていた。「あっ、この家は高齢独居の方の家だったな」声をかけたが応答はない。「どうされたのかなあ」道には全く人影はない。なお歩を進

聞きに行つたが、当直の人からは何の事情も聞けなかつた。自治会内を一回りしたのは三十分位の時間であつたらうか、帰宅して、ひ

十四軒の家が三軒に

岩木 香織

つくり返ったテレビをおこしたが、停電して映ることはない。取り敢えず余震に備えて整理に汗を流した。さて、その後の数日は、中には心の地金が出る人もあって、不快の念にかられたでき事もあったが、何より困ったのは情報の不足であった。おかげで電気はすぐ復旧したが、映るテレビに明石の情報も少なく、水道と都市ガスの復旧は、二月末までかかった。引続く余震の恐怖の中、漸く明石の様子が公報紙によって判明した。二月一日のことであった。一月十七日午前五時四十六分ごろ近畿地方を襲った「兵庫県南部地震（当時の稱呼）」は、震源地は淡路島北東約三*の明石海峡、震源の深さは二十*、地震の規模はマグニチュード七・二、震度は六の烈震。死亡者五人、負傷者七十二名、火災六件、家屋の全壊百三十戸、半壊四百五十戸、一部損壊を含め五千戸以上。道路の亀裂・陥没二百カ所以上。これ等は市東部に集中であった。

一九九五年一月十七日早朝、隣で寝ている妹が叫んだ。と同時に私は自分の掛け布団をかぶったまま妹に覆いかぶさった。「地震や。まだ死にたくない」思いながら布団から顔を出せない。何分間だったか、かなり長く感じた後、少し治まり様子を窺ってみると枕元にテレビが数センチのすき間もなく横転している。「頭に当らんでよかった」。電球は粉々、本棚のガラスが割れ足元に突きささっている。向きが良かったためか幸い倒れてはこなかったものの、中央にすり寄った形で書籍や洋服箱の中身がガラスの破片と共に、私達の上にとっかり座り込んでいた。

り階段を下りた。テレビがついた。ニュースで震源地が淡路で、かなり大きな地震であるとわかってくる。余震が小さくなって幾分落ち着きを取り戻し、着替えて片付けをすることにした。家の中はどことも、ガラスや食器の破片が散乱し、足の踏み場がない。窓から外を見ると並ぶ家並みに瓦が半分なくなっている。地面が割れ壁が傾いている家も見えた。

さて我が家は……とグルリ回ってみると、裏の家の高いブロック塀がもたれかかっていた。これまた幸いに、小さな窓の鉄格子がクッションになり、ギリギリのところで止まっていた。しかし余震で落ちる可能性もある。恐ろしかった。父親は近所の人と声をかけあっていた。「家族みんな無事でしたか？」「すごい縦揺れでしたなあ」。ご近所にも大きなケガをされた方はいなかったようで、不幸中の幸いと、動く私達を見て微笑んでいた。余震が怖くなってくる。電話は遠隔地からならつながらうで、愛媛の親類を通じ、東灘の親類がとりあえず無事であることを知った。トイレには用を足した後、風呂の水を用いる。問題は飲み水だった。夕方になり、近くの小学校の校庭で水をもらえると聞き、寒い中バケツを持って並びに行った。運動場をグルリと回る列。何時間か待った。着込んできてはいるが、足先から冷えてくる。ようやく市のトラックがやってきた。「え？」荷台にあるのは小さなポリタンクばかり。皆が「えーっ」といわんばかりの嫌な顔をした。でも仕方ない。まさかこんな状態になるとは誰も思っていないし、そのための用意をしていなかったのだろう。そうは思ってもやはり腹が立つ。一台のトラックで列が前へ進むのはほんの少し。順番がまわってきてもそれ程もたらえるわけじゃない。それでもあるだけマシか……。自分のバケツが重くなると、大事なものを運ぶように地面をゆっくり踏みしめて帰った。

ちは大丈夫やあ」〇〇さんとこちよっと見たってえ」暗闇の声が何だか頼もしく感じられた。続く余震の恐ろしさに、家族四人こたつに集まって夜を過ごした。電車も通らないので私はしばらく会社を休むことにした。父と妹は車で活動、動きのとれない人たちの分もということでも無理して出社。母は家のこと、近所のお手伝いと忙しい。私だけがただただ恐ろしくて何もできなかった。夜も眠れず、食事ものを通らず、胃がおかしくなった。

二日後には新聞で死者二千六百余名と発表された。その翌日には一千名程増え、五日後その数はおよそ五千名になった。「可哀相、悔しいやろなあ」そう思うと一層生きている、無事な自分があるが

大蔵谷清水

もつと避難所を

赤松 峯男 (78)

昨年正月、トソ気分も未だ抜けきらぬ十七日早朝の五時四十六分、

たいと思えた。余震が少なくなっていた。家の補修をしたり、荷物をまとめて故郷に戻る人もいた。近くの小さな公園にまで仮設住宅が建てられた。仕事を無くし、遠くへ行ってしまう人もいた。もうすぐ地震から一年になる。十四軒あった並びの家も三軒になった。多くの人がいろいろなものを失い、そして何かを得た一年だったと思う。「生きていること、元気なこと」に感謝し、前を向いて歩こう」それが地震を経験して一番強く感じたこと。あの日、とっさに妹をかばった私のことを、妹は「姉ちゃんはやな」って思っていたと聞き、大笑いできたのも、今元気でいるお陰だから。

天地振動、地響きと共に安眠を破られ、飛び起きた。激しい縦揺れ横揺れに、部屋にあったオーバーを着て、靴下を手を持って玄関に下りようとしたとき、電話のけたたましい音、家内が受話器を取る

と子供からの安否を尋ねる電話があった。双方共に人的異常がなかった。ひとまず安心。その後から電話が不通となった。靴を履くのもどかしく、素足に靴下を持ったまま、玄関の東側のガラス戸を開けようとしたが、開かないので仕方なく、西側のガラス戸を開けて外へ出た。近所の人も次々と出てこられた。私達は外で立話をしていたが、寒くなり近所の人の車内へ好意にあまえて、夜明けまで避難させてもらった。だが電灯が付いたことを知らせてくださった。その間も余震が度々発生して、皆さんもかつてない大地震に恐々としておられた。

しばらくして八時過ぎ家に戻り、被害状況等を見て回った。水道が断水し、トイレの水は昨夜沸かした風呂の湯で応急処置をした。しかし、風呂場内のタイル損壊、トイレはタンクのヒビ割れで使用不能。階下六畳のテレビは落下、破損して使用不能。また玄関の錠前金具が飛び出て庭に落ちていた。早朝からの疲労で六畳の間でうたたねをしていたが、昼前になって子供の家から、水や食料品等を持って来てくれた。また外壁破損箇

所をセメントで応急処置をしてくれたりして、大変心強く感激した。子供の家も内部はもとより玄関までの石段の損壊等、被害は甚大であるとのことであった。夜になって余震の危険性に対処して朝霧小学校へ近所の人と共に避難した。

避難所では朝霧、清水地区等は被害がひどかったと見えて、相当数の人々が夜具を持って避難してきておられた。皆さんは大変親切で、慰め励ましの言葉を交わし合った。その間、ボランティアの方々には、献身的なお世話になり大変ありがたく感じました。十七日から三日間の避難生活中、教室に備え付けられたテレビで神戸市内の地震発生状況を見た。この度の大地震はかつて、神戸地方は安全だと油断していたところが、あにはからんや、一夜のうちに淡路北淡地区を震源として、神戸、阪神地方一帯に天変地異。振り返れば戦後五十年節目の年、日本列島、世界各地からも記録的な異常気象が伝えられている、今後、平安な生活が破壊されるような甚大なる災害が発生した際、地区住民が「速やかに避難でき得る空地を平素から確保し、人的被害を最小限にとどめる

ことが勘要であると思われず。しかるに現在の避難所は朝霧小学校。居住地区から遠く離れ、万一の際、一時も早く避難しなければならぬ時には遠すぎると思われず。

震災一周年を契機に被災弱者への保健医療、福祉サービス等の援助充実を計り、一日も早い復旧、復興を願ってやまない。

震災から一年を

振り返り

東 健志 (35)

あの震災から一年を迎えようとした、平成八年一月十六日の晩、ある教会で行われた追悼コンサート。フォーレ作曲のレクイエム、ソプラノ独唱による、深い悲しみの祈りの歌に、地震に幸福な生活を奪われた多くの人の、数えきれない悲しみを思い、流れ出る涙をとめることができません

でした。



朝霧川より東の方向。
道路の損壊状況。

一年前のあの日、私は、高砂にある職場で徹夜で仕事をしていました。そして、うとうととしていた明け方ごろ、未だかつて経験したことのない激しい揺れにとび起きました。散乱する書類の山に茫然としながらも、ラジオをつけてみると、震源地は淡路島というではありませんか。慌てて自宅に電話をかけてみると、興奮した母の音が聞こえてきました。たまたま、寝る方向を変えていたために、家具の下敷きにならずに済んだということでした。しばらくすると、電話も不通になり、ラジオの情報だけを頼りに、心臓の弱い母のことを気にかけてながら、四時間以上もかけて自宅に帰ったこと、そして、余震に脅え、鳴り止まぬサイレンに眠れぬ夜をすごしたこと等を、

昨日のように思いおこしました。震災により、命を、家族を、家を、仕事を、そして、生きがいまでを失った多くの人達に比べれば、私などはまだ恵まれています。しかし、その私でさえ、オウム一色になった報道や、復興よりも明石大橋建設、大蔵海岸工事を優先する行政の他人事感覚には、憤りを覚えます。テレビで放映された、被災地住民と行政側の対立を見るにつけ、思いやりに欠けた政治家役人達に怒りを感じるのには、私だけではないはずです。

近い将来、起こりうるかもしれないという関東、東海地震の際、「阪神大震災の教訓は生かされなかった」と、無責任な言葉がでなければと、思います。

しみじみ知った

水の有難さ

井登 慧

水は人間の生活に不可欠のものであると知りながらも、つい、その恩恵を忘れて、粗末にしがちであったが、今回の大震災で水の有難さを思い知らされた。

ポリバケツを持って、給水車の来るのを待つ人の行列が長々と続いた光景は、まさに戦時中をほうふつさせるものであった。

このような日々が何日か続いたある日、自宅の庭にある散水用の水道栓をひねって見ると、ちよろちよろと水が出たので、思わず大声で「水が出たよ」と叫んだ。他の場所の蛇口はどうかとためして



(浜野親男氏提供)

見たが、全然出ないので、この水を近所の方々に分かちたいと思っで、「この水道栓から少しづつ水が出るのでご利用下さい」との張り紙をしましたら、多くの方々がこれ、感謝されたことは、せめ

ても慰めであった。

大震災という一瞬の出来ごとで、私達は物質的にも精神的にも多くのものを失った。

物の大切さや、人間の和や助け合う心のつながりが、一段と深められた良い機会でもあった。「禍い転じて福となる」という言葉のように、犠牲になられた方には申し訳ないが、せめても命ある者にとって、この教訓をこれからの生活に生かしてこそ、犠牲者に報いる道であろうと思います。

「コップ一杯の水で歯を磨き、顔を洗った」との体験談を聞き、胸の痛む思いがすると共に、水の有難さをしみじみと知らされました。

惜しかった

「通り過ぎるだけの 広報車」

池田 瑛

「先進国」、そして「経済大国」等々発展途上国の羨望的にされて、いい気になっていたまでは良かったが、神ならぬ誰一人として、予知できなかった未曾有の大震災

は、一瞬にして、街も人もすっかり変えてしまった。徐々に復興が進んでいるとはいっても、住民の分布と町並は、もう元には戻って来ない。風通しの良くなったでこぼこ道を歩く度に、心の奥深くまですきま風が通り過ぎて行く。人の声 暖房も明かりも消えた暗闇で、ひたすら、夜明けを待ちわびた長い、長い一時間、やたらと人の声が聞きたいのに、電話は一切通じないし、ただトランジスタラジオの声だけが唯一の情報源。この日からだったと思う、夜寝る時、ラジオが鳴っていないと寝つけなくなったのは。

今でも、乗り物を待っていたり、座席に座っていたりすると、震災前までは、全くなかったことであるが、見知らぬ人が、まるで、ずっと、以前から顔見知りでもあったかのように語りかけて来て返答に戸惑ってしまう。「そうだ、この人も、人が恋しいんだ、やっぱり。一人暮らしか、それとも家族と同居していても、心通い合う会話を交わして生きている人ではないんだなあ、きつと」

通り過ぎるだけの広報車 買い置きした食料で、何日かはしのげて

も、飲料水の確保だけは何処へ行っても、長蛇の行列が瞬間に出た。思いがけず役立ったのは、道端の漏水であった。次に買い急いだのが屋根のビニール・シート。何処の店も品切れで、遠くまで買い求めなくてはならなかった。後で分かったことは、市民会館のロビーには、救援物資が山積みされ、何でもただでもらえたそうである。広報車は確かに情報をばらまきに来るが、行き止りの狭い道には近寄りもしない。慌てて大通りへ走り出たころには、もう、陰も姿も見えず、情報から孤立させられて、幾度口惜しい思いをしたことか。

J Rの対応 震災後十日間、姫路の山奥の避難先から垂水まで通勤した時、元J Rの職員と名乗る人が、口惜しそうに話してくれた。

加古川駅は最も安全で便利なホームを下り新快速専用に使っている。

特別ダイヤが組まれていた震災時は、新快速は運休しているのであるから、当然、そのホームが各停用に使われているものとはかなり思い込んでいたら、何と平常通りわざわざ、陸橋を越えなくては乗り降りできない。不便で、危険な

ホームを使っていたのである。その理由は、変更した情報をコンビニエータにいったん入れてしまうと、復旧後、トラブルの原因になる恐れがあるからというのである。乗客の安全と便利さより、その方を優先するというのは、旧国鉄の体質をそのまま、受け継いでいるということに他ならない。折角、分割・民営化したのだから、非常時の細かな対応が素早く出来るようにしてほしい。

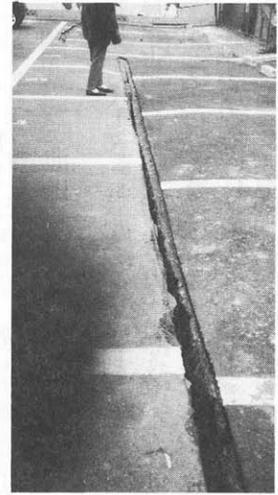
震災に脅えてばかりいたのでは復興は進まない。忘れるべきことは早く忘れ去る方がよい。しかしながら、震災に因って、得た教訓もけっして少なくなかったはずである。「ノド元過ぎれば」ではなくて後々までもしつかりと語り継いでいかななくてはならないことは、戦争の体験と同じである。

「天災は忘れたころにやってくる」のではなく、人間の愚かさ、つまり、「ノド元過ぎれば暑さ忘れる」を、寺田寅彦は、見事に戒めているのだと思う。

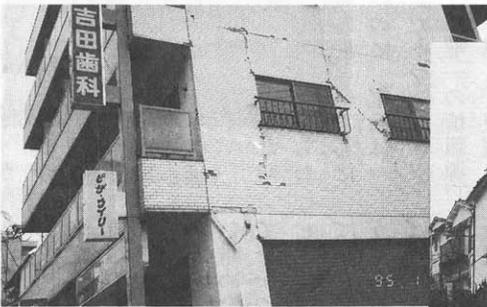
「貴重品、持たずにペット連れて逃げ」―ペットを連れ避難者を見て―



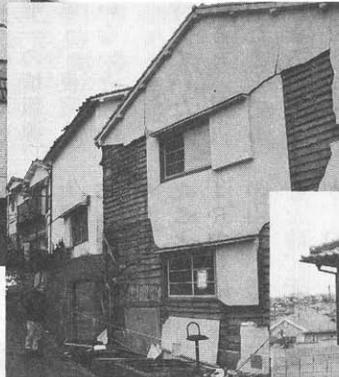
大蔵谷東山付近の惨状 (浜野親男氏提供)



村西電気通信横
の駐車場の亀裂



ビザ屋さん、写真屋さんのビル損壊



なにわ銀行前から
東側の壁の損壊
(浜野親男氏提供)



村西さん宅南面の塀



全日空団地付近の塀の損壊



大蔵谷奥地域の屋根の損壊 (浜野親男氏提供)

徳不孤必有隣

龜井 泰而

この度の兵庫県南部地震により不幸にして亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、住まいを失われた方々、とくに高齢者の方々にはお見舞い申し上げます。この被災で感じたことは、戦後五十年、物質的に恵まれ、過度の要求と技術文明を過信し、さらに京阪神には地震はないであろうと油断と慢心があったのではなからうか？

地震発生の直後の行政の住民に對する即応態勢の不手際を感じたのは一人私ばかりではないと思う。まず、被害状況、情報の不足(明石市)。生活関連情報(飲料水ガス)等の情報伝達。避難所開設時の即応態勢。高齢者、身障者世帯に對する対応など、それに引き替え各国より直ちに救助隊員、救助犬等の外、全国よりボランティアの方々が駆けつけ、寝食を忘れ長期にわたり活躍されたことは唯々感謝すると共に深く感銘し次の詞を呈上しお礼を申し上げます。

〔徳不孤必有隣〕

次に行政に對する提言
一 住民が安住出来る都市計画の策定

二 現在の避難所の外一時避難可能な空地の確保

三 防災のための緑地帯の設置

四 災害時、住民に對する情報提供の手段の策定

終わりに私の来し方を振り返れば、小学生のとき、関東大震災を体験、戦場に戦災に、そしてこの度の地震と。その他諸々の都度、人の温かさに支えられた日々を感謝しつつ余生を全うしようと心がけている。

その日の朝

久保 久永

平成七年一月十七日、その日の朝、私は五時ごろ起床して居間にいた。石油ストーブをつけ、お湯を沸かし、こたつに入って、お茶を飲みながら新聞に目を通していた。

突如、猛烈な上下動。「地震だ！ストーブを消さねばー」這って進んだ時、電灯が消え、同時に自動

消火装置が働いて、ストーブの火がスーッと消えた。手さぐりで懐中電灯を探すが見当たらず、あせる。「おとうさん、大丈夫！」と妻が飛び込んできた。妻はすぐ別の懐中電灯を見つけてきた。ラジオをつける、震源地は淡路島北部という。とすると、この辺が一番ひどいのかなと、思う。

妻は、まだ床の中だったのだが、激しい音と揺さぶりに「戦争だ！」と跳ね起き、隣の寝室に駆け込んで叫んだが返事がない。居間に行こうと、再び自分の寝室を通った時、今まで寝ていた布団の上にも、仏壇、鏡台、小だんすなどが覆いかぶさっているのが、暗闇の中でわかったという。起きるのが一瞬遅かったら大事に至るところだった。

着替えをし、靴箱などを起こして通路を作り、妻が外へ出ると、隣のご主人(警察官)が、「ご主人も大丈夫ですか！」と声を掛けて下さりながら非常出勤。心強かった。

プロパンボンベの栓をしめる。水道栓をひねった妻が「水が出ない」と、十リットルのポリ容器を持って走る。近くのマンションの

最後の水を辛うじて頂いてきた。うす明るくなってきたので外へ出た。わが家も近所も傾いたり瓦が落ちたりはしていないようだ。眼下の国道2号線は、パトカーが一台、神戸方向へ走っていくだけで静かだ。放心状態で海を眺めていると背後から黒い落葉のようなものが降りかかって来た。「火事！」と振り向いたが、その気配はない。全日空団地の瓦の下に敷かれたルーフィングだったようだ。

家に入ると、廊下にかけていた電話機が点滅している。早速かけてみると、関東、東北の親戚に通じたので、無事の伝言を託して一安堵する。九時半ごろ、電気が通じたので、「とがなくてもよい米」を仕込んで、テレビに見入る。

水道屋さん

間違われながら

栗木 義雄 (69)

第二の人生で夜間の作業が本業の会社に務めた関係で、懐中電灯に、ラジオ・サイレン・蛍光灯を組み込んだ物、ポケット型の物等

数種類も備え付けていたお陰で、グラツと来たとき、どちらに手を伸ばしてもすぐ取れる位置にあったこと、居間が板間であり、身近くにスリッパがあったこと、ポータブル掃除機で簡単にガラス破片が吸い取れたこと、喫茶用に浄水器より採水した紙パック（一・八ℓ入）を十数本貯水していたこと、予期しなかったことが役立ちました。ゴミ用のビニール袋が飲料水の容器に早変わり出来ることも体験しました。

最初は朝霧川沿いの道路より吹き出した水道水を家族総連れでパケツ、ビン、パック等人海戦術の夜間運搬作業でしたが、数日たれば体裁を考える気にもならず、明るくなっても実行しました。

そのうち道中の隣保の方々が、ビニール袋の水を分けて下さったり、家まで運んで頂いたり、隣保の人と人とのキズナの有難さを感じ知らされました。

また自治会の連絡窓口に私の電話を使うことになった結果、各家庭の漏水についての問い合わせが多くありました。水道工事屋でないのですが、市役所より依頼のあった漏水箇所の判定法での止水栓

を持って、自転車でも走り回りました。当自治会は広いうえ、起伏も大きく、きつい坂道もいくつかがあって、自転車では登れません。一刻も早くと気のみあせるばかりです。漏水は敷地を泥化します。またその箇所より高所には給水出来ません。メーターの内側のバルブを止め、メーターが動けば市の財産部分ですから市へ通報、蛇口を止めてもメーターが動けば家の中で漏水ですから、ただちにメーターの外側の門前、または道路の止水栓を締めることが必要。家庭内の漏水は私財産ですので、水道工事店に修理を依頼する段取りとなるわけです。

その説明までが私の仕事であつたわけですが、それからが大変。修理が必要な人に水道屋さんではないといつてガツカリさせたり、水道屋さんにご電話してほしいといわれ、今度はこちらがギャフン。水道屋さんを紹介して下さい。水を止めたらどこに水を汲みに行つたらよいのか。等々説明するのに水臭い答しか出来ない歯がゆさ。今思えばあれでも精一杯の仕事だつたと苦笑いです。

ひとり暮らしの

高齢者のお手伝い

菅原 理代

思い出したいくない忘れてはいけないあの震災で、被災されたひとりで暮らしの高齢者のお宅へ伺い、ヘルパーの方として「女性の会」の会員二人、計三人にて家具、ガラス、瓦等の片付けをお手伝いさせていただきました。

ひとり暮らしの方にとりましては、本当に心細い思いをなさつたことと存じます。

ボランティア活動を通して、共に安心して暮らせる地域づくりは日ごろのおつきあい、人と人とのふれあいで生まれることを学びま

子よ孫よ

高橋 花子

風花や色失ないし激震地

酷寒や無事できて欲し子よ孫よ
極寒にふるえ余震を恐れをり
凍る夜の攻めて来さうや淡路島
氷雨降る瓦礫に母を呼ぶ少女

した。そして、ボランティアのネットワーク作りも災害を乗り越える知恵でもあると思えました。

小さな小さな草の根ですが、根が広がりたい皆さんの花が咲きますことを思うこのごろです。

一月十七日、長い
一日やったなあ。

弁木 善行

『東北や北海道は、地震で大変やなあ』

『この辺も、このごろ、ちよつと多ないか』

『それでも、ここらは大きいのではないやろ』

と、正月の会話。まだ、その気分が抜けない平成七年一月十七日。

ドン！ビュビュン ビュビュン
ビュビュン

おh！ おh！ おh！…

どうして立っていたのか分らないが、部屋の入り口の柱を、必死に捕まえていた。電気が消えて真っ暗闇。

『おーい皆大丈夫か？』
『大丈夫や』

弁木さん方、駐車場と塀の損壊



とにかく灯りが欲しい。台所にある懐中電灯を取りに行くが、足元がガシャ ガシャ。どないなっとなねん？

懐中電灯をつけてビツクリ。足元には棚にあった食器が散乱起きてきた妻がこれを見て「なんで、なんで」と絶句。

二階で寝ている息子に「降りてこいや」と言ったが「階段をおりられへん」との返事。階段を照らして見ればなんと階段の横の壁が、畳一枚分落ちて階段を塞いでいる。これはえらいこっちゃで。

世間はどうかとなねん。携帯ラジオを引っ張り出してスイッチON。

「先程京都方面で地震があった模様です」

ふーん京都が震源地か。

「〇〇では棚の物が落ち…」
何言うとなや、こりや明石が震源地やで。

そろそろ明るなってきたか、裏の方で外へ出た人達の声がある。

表へ出て見ると、隣家の玄関がくの字になって、傾いているのが真先に目にはいる。

わが家はどうや、二階の壁が十センチ程開いて、亀裂が入っているコンクリートブロックが大きく傾いている。

道路の端がいたる所うねって亀裂がある。

ア然としてみると裏のほうで呼ぶ声がある。

「裏の壁が石垣の下に落ちそうですよ」

慌てて裏へ回ってみれば、これも畳一枚分、外壁が今にも落ちようとしている。雨樋の釘一本にぶらさがっている。

手助けをしていただいで、これを取り除ける。

階段に落ちた壁もなんとか外に出した。

長男夫婦が「大丈夫ですか」と顔をだす。

「そっちはどうやねん」

「タンスが倒れて、水屋の食器

が放り出されてこわれてしもた」

「まだ、まっさらやのに」
でもまあ、その程度でよかったなあ。早ように見舞いにくてくれ

ておおきに。
寝ていた布団を見ると、顔の位置にテレビが倒れている。ふた昔

前の家具調の重量級が、顔を直撃してきたらと思うとゾーツとする。

「今日は会社を休もか」

「会社の様子も見にいったら」
バイクに乗って西新町の会社へ走る。

国道2号線沿いでは、倒れた家はないものの、壁が落ち、屋根の瓦が散乱した家が多く、道路が波打っている。

山電西新町駅の手前の踏切では、電車の架線が切れて落ちている。

エライコッチャ。
会社へ着くと、もう十人程出社していた。

会社は、思った程でもないが、それでも亀裂、剝離があちこち、棚の物は散乱している。機械類は大丈夫な模様。

このころになって、どうも神戸

が大変らしいと判ってきた。社員
の状況が心配になってくる。しかし電話で安否を聞こうとしても、

かかる範囲は西方面ばかり。

「こうしていても、今日はどうもならん」

すぐ帰ってもよいと言われ、ともかく帰る。

家に帰ってみれば、二階をかたづけ中。

見るとタンスがたおれ、これを元どおりしている。

石油ストーブが曲がり、部屋の回りの壁が、見るも無残に剝離している。

六甲道の姉夫婦や、淡路の親戚の安否が気にかかる。何度電話をしても、呼び出し音が出るがでない。

どうなっとなや。

屋根にかぶせるシートを大勢買いにいっていると聞く。

慌てて走ったが、もうないといわれる。

破れたものでもと、すがって、なんとか古いものを三枚手に入れるまさか、この年になって大屋根にのぼることになるなんて。

次男と二人で大屋根に恐る恐る上る。

見渡せば、ほとんどの家の屋根瓦がぐずれている。瓦はあかん。なんとかかぶせて、まあこれで一

雨、二雨はもつやろ。やれやれと下りかけた途端、梯子がすべつて一階の屋根にドスン。

『どないしたん!!』まあまあ、尻を打っただけで、たいしたことないわ。

ベニヤ板を買ってきて、階段の回りに打ちつける。

コーキングとセメントの買い出しを頼む。

裏の剝離した壁に、シートをかぶせる。

テレビでは、神戸の惨状が出てくるようになった。死者は二百人から三百人。

芦屋、西宮、宝塚、淡路も大変らしい。

明石はなんにも出ん 明石はどうなんやねん。

水道はストップ。ガスも出ない。電気があるだけでもましか。

余震が起こる。震度二かな、三かな

一日中救急車が走り回る音がする。

夕方になる、近所の人は避難するらしい。

『私も避難する』と妻が言う。神戸では、何方所も燃えているのが映る。

死んだ人は四百人、五百人と増えている。

まだまだ増えそうやな

『わしは避難所へは、いけへんで』

非常持出袋を用意してゐるな、閉じ込められても出れるように、大きなハンマーをだしとこ、そうや、服を着たまま寝ろ。

長い一日やったなあ、あしたはあしたや。

妻は避難者・ 夫は自宅不審者？

M・A

余震の続く中、擁壁崩壊の危険を感じて娘親子共々、車で午前六時三十分ごろ家を出た。まず朝霧小学校へ行ったが、閉鎖されていたので、松が丘南小学校へと向かった。いたる所でガス臭がしていつ火災になっても不思議でない状態の中、また松が丘南小から朝霧小へ戻ってみると、運動場に避難している車が数台あり、人々も徐々に集まってきた。昼過ぎに市職員が来られ、毛布一枚と乾パ

ンの配布があった。家からは何も持ち出すことができなかったのので、ありがたかった。とりあえず視聴覚室で避難ということになった。理科室は危険で使用不可のため、図工室と他一、二階とも、数教室が開放された。

夕食はおにぎり一、二個と漬物の配給があった。余震の度に声が出る。はじめは校舎が壊れたら困ると思ひ、運動場の車の中にいた。車もどんどん増えて運動場が一杯になった。信号も止まっているのに、市バスは当日から動いているのが奇妙に感じられた。十七日夕方には給水車も来て、水汲みの人の長い列ができた。電話も全く不通、公衆電話だけが使用可能、そんな中二、三日は何の感情もなく過ぎた。

中には利己的な人もいた。視聴覚室では円陣を組んで酒盛りを始める人々、また愛犬を人同様につれ込む人があり、室内には赤ちゃんなや病弱の人も居るのに、少し考えてほしかった。人が増すに従って、トイレの回りが水浸しになってくるようになり一日も早く自立することを考える、次第に自分達

が何かしなければと思いはじめた。

誰かにしてもらって当たり前と思つてゐる人、他を思いやる人にと二分されたように思う。市の職員もボランティアの人も皆被災者であり、家族もあるのに大変だなと思つた。

夕方になると人が多くなり、朝帰って行くという様子で、食事も救援物資も充分あった。それでも同じ部屋の人達で分け合つて食べる等、共同体の感じがとてもよかつた。二、三日して無料の公衆電話もつき、一週間くらい経つて見たテレビはほんとに新鮮に見えた。居られただけでも幸せと思う。

やがて家に帰つた後、今度は家にある物で炊き出しをした。個人的では大勢の人が見舞つて下さり、友人が多いことはとても嬉しかった、お陰でバスと山陽電車で大久保の友人宅のお風呂にも入れた。普段のつきあいの大切さを痛感した。

それにしても赤ちやんのミルク、余震で湯が沸かせずどうなつたかな。主人は水島工場に単身赴任していた。会社がすぐ船を出して下さり、春日の道港へ着いたが、十七

日は入港を止められ、十八日朝から歩いて昼過ぎに帰りついたそうです。直接あの地震に合っていないので、あの怖さを知らず、一人で家に残っていた。一軒だけ明るいのでそのために巡回中の警察官に不審がられ、身分証明書の提示を求められたそうです。自分の家において不審者と間違えられるなんて震災ならではのことと今はおかしく思い出しています。

我が家は全壊・ ただ今、仮設入居中

松竹 喜満

僅か二十秒の揺れであったが、自然の力の怖さを改めて認識した。我が家も全員二階で寝ていたが、あの大地震で目が覚め、初めは何事が発生したか一瞬分からなくなり、その時『この世の終わりか』と思った。二、三秒後地震だと分かったが、立つこともできなかつた。隣室の長男も這いながら、我々の寝室にきたが、あわてて一旦自分の部屋にもどり、アルバイトで買ったばかりの大事なコンピ

ューターを棚からそつと下におろしてもう一度、われわれの寝室にきた。娘は直ぐ横で寝ていたが、和ダンスが倒れてきて、足元に覆いかぶさってきた。さいわい布団がクッションとなり無事だった。

幾度となく襲ってくる余震におびえながら、夜の明けのを待つた。外で近所の人の話し声がするので、頭に座布団をかぶり、恐る恐る外に出た。玄関を出ると門柱が崩れ落ち、階段を塞ぎ、道路に出るのにひと苦労した。その間も余震が幾度も襲って来た。早急の確な地震情報をと、その後は車の中でラジオをつけて、耳を傾けながら一家四人寒さと怖さにおののいていた。

ようやく気持ちを取り戻し、家の片付けと、被害の把握のために家の中に入った。台所に行くとき食器は全て床に落ち、ものの見事に壊れており、足の踏み場もない有様であった。部屋の建具は引き戸が開かず、障子が開かず、根太は落ち、照明器具も落ちて、土壁も落ちかけている。また風呂場とトイレのタイルもあちこち落ちていた。

ラジオの情報によれば、神戸市

東灘区、芦屋市、西宮市の被害が大きいと聞き、両親が西宮市に住んでいるので、安否が気掛かりになり、公衆電話で順番を待ち、電話したが全く電話は不通だった。

しばらくすると、会社の人が安否を気にして家に来てくれた。そこで初めて会社のことが気になり、とりあえず家族が無事なので、会社に出社することにした。出社すると主な幹部社員と近くに住んでいる従業員は全て揃って居た。私は役職上百名の社員の安否と、会社の各支店の情報を把握することに専念することにした、出社している社員からの情報が頼りであった。とにかく情報不足で、いつ大きな余震が来るかも分からぬ怖さで、一日が終わろうとしていた。夕方になって西宮と連絡が取れ、両親も無事であることが確認でき安心した。

今回の地震が関西特に兵庫県地区を直撃したことで過去の歴史を調べてみたところ、以外と近畿地区が大きな地震に見舞われていることが分かった。主な地震を年代別にあげると下記の通り。

一五一〇年 河内地震

M六・五〜七・〇程度

一五八六年 天正地震

M七・八程度

一五九六年 京都伏見地震

M七・五程度

一六六二年 寛文地震

M七・二〜七・六程度

(琵琶湖)

*その後約一七〇年間静かな時期

一八三〇年 天保地震

M六・五程度

(京都中心)

一八五四年 伊賀上野地震

M七・二程度

*その後又約一四〇年空白時期があった。そして今回、

一九九五年 兵庫県南部地震

M七・二(震度七)

野島断層

全壊のわが家にただ今仮設入居中、寒さにふるえている。三月にたてかえのわが家にもどる予定です。

(注・平成八年三月十七日新築なつた家に無事落ち着かれました)

(記)

阪神大震災

山本 きくよ

平成七年一月十七日午前五時四六分、その時、私も夫婦は、市場へ仕入れに行く前のコーヒータムの矢先だった。

『ゴオーゴオー』と地鳴りがし、鉄筋コンクリート建のわが家が揺れ、物は落ち、割れ、すさまじい音と共に停電、暗闇で何が何だか

分からぬ。すぐ三階に上がり、子供達の無事を確かめ、家族五人震えながらこたつにもぐり、夜明けを待った。外の明かりでようやく部屋の様子が見えた。台所は食器類が割れ、足の踏み場も無く安然とする。早く片づけようと思いつながらも恐怖で体が動かない。もうこの世の終わりかと思った。数時間後、やっとテレビのニュースを見る事が出来た。震源地は、淡路島だという。にもかかわらず阪神高速が横倒しになっている、神戸東灘の方だ。長田では火災も発生し、火勢は強く水が無い。だ

れも立往生だ。ニュースで大まかな様子が分かり、われにかえる。やっとわが家が自治会の役員だったことを思い出し心配になる。東山町でも電気、ガス、水道が寸断された。電気は数時間でついたが、ガスと水はなかなか復旧しない、小学校まで水汲みに走る、ガスコンロ、ボンベ等を調達する人々。

みんなが必死に動いていた。その間も余震は続いている。ガレキが山のようにたまり、下の民家に落ちそうだと苦情が来る。市に連絡したが、いつ収集に来れるか分からないという。仕方がないので、役員と町内の人々で協力し、大久保のゴミ処理場まで運び、二、三度目は市が収集してく

れた。その間にも「あっちの水道管が破裂してる」「こっちも水漏れしてる」との町民の声に應える役員。市の対策本部に擁壁部分の陳情にも幾度となく行ったが、皆さんの思いはかなわず「届けは、個人単位で提出するよう」と指示が

出た。そんな中で、だれかが発案した仮設水道設置を市が認めてくれた。これには、皆さん両手を上げ喜んでいた。このころには、プロパンガスが使用出来る所も増え、少し生活らしい暮らしが出来始めていた。

東山町では集会所も被害に合い、階段部分と壁の亀裂等、修復が必要になった。この時にも、役員と対策本部に足を運び陳情する。その結果、費用の半分を市が持つて下さる事になり、すぐに修理にか

かる。震災前には、八〇世帯程の会員だったが、震災直後は、六〇世帯にまで減った。中学校へ避難された方々。田舎に疎開した人。仮設住宅に入居された方々。いつの日か、またここに帰って来て下さい。一年たった今、さら地だった所にボツボツ家が建ち始め、にぎわいを見せて来ている。

いろいろな苦労もありましたが、町内の多くの皆さんに助けられました。そして、忘れてはならない水の大切さ、コップ一杯の水がどんなにありがたかったことか。暖かいお鍋がどんなにおいしかったことか。私は生涯、子供達に言い

伝えていきたいと思っています。

こんなときペットは

須賀 由美子

あの恐ろしい震災から一年が過ぎた。私の家は、盛り土の上、築二十三年の古い木造家屋だ。玄関はゆがみ、戸が閉まらない。寒い風がビュービュー入って来る。でも家があり命があっただけでも幸せと思わねば、バチがあたる。あの日の恐ろしかった事は動物も同じであろう。わが家も犬三匹がいる、家の中に二匹、外にシバの雑種が一匹。余震のたびにおびえた声で鳴っていた。外が明るくなるまで家の中の犬二匹を抱いて車の中で待っていた。この先の事を考えていた。不安で私も泣きたかった。私の都合で犬を飼っていたが、こういう時かわいそうでならない。とっさに逃げなければならぬ時、おそらく置き去りにすることもありうるだろう。その無責任さに胸が痛む。鎖につながれ、口がきけない動物だけに余計につらい。やつの事で家の修理も終わり、ホ

ツとしているころ、娘が切り出しにくそうにポツリ。実は犬を拾ってきた半年前から飼っている。どこかで大事にされていたようでどうも被災犬らしい様子という。朝早く、夜遅い仕事柄の自活の娘に世話は大変だろうと、とうとう引き取ることになった。ボランティアはできなかつたけれど、その代わりにこの被災犬(?)を大事に飼ってやろうと思っている。

家族の無事の幸せ

谷口 敬子

何が何だかわからないまま、机の下でうずくまっていた揺れが終わるのを待っていた。十一階建てマンション最上階のわが家はたんすが倒れ、食器もほとんど棚から飛び出し、この世の終わりだと思つた。当時主人は大阪で単身生活をしており、その日も家に居りませんでした。地震をニュースで知り、昼ごろ車で大阪を出発、明石には次の日の夕方やつの思いでたどり着きました。家族を心配し、また途中の景色が一変し、恐ろしいも

のを見た驚き、不安、恐怖で避難民のような形相で帰ってきました。家族が無事であることを確かめ合い、五人そろつての生活は本当に心強いものでした。水道やガスが出ない不自由な生活も、家族がいれば何の苦痛でもなくなり、この震災で大勢の方が一瞬にしてご家族、身内の方を亡くされ、いいようのない寂しさや悔しさに耐えておられると思うと心が痛みます。お亡くなりになった方々の御冥福をお祈りするとともに、まわりの方々が一日も早く精神的な苦痛から立ち上がられ、よい社会生活を送って行かれることを願ってやみません。

震災それから一年

山崎 玲子

二カ月ぶりに右足のギブスと松葉杖がとれ、楽しいお正月を過ごしたのも束の間、十七日未明、あの大震災だ。ちやうど朝食の準備中で、「ドドン」と云う音とともに大きな揺れ、調理台に手をついたまま、足が動かなくなった。「怖い

」と叫んだ時、「ドドン」。目の前に水屋が倒れて食卓に当たり、中から大きな音をたて、食器類が飛散したところまでは判つたが、その後は何が何だかわからず、電灯が消え、真暗闇の中で、ただ「怖い、怖い」を連発していたように、四十秒がとて長い時間に思えた。揺れが治まり、家の者に助けられて、居間まできたときやつと、懐中電灯をつけて部屋の中を見回す余裕ができた。当日は食器や家具ばかりに目が向いていたが、後で外を見ると、家は傾き、地割れがして、基礎は浮き上がり、市から避難勧告を受け、もうこの家には住めないと分つた。それから二週間後に知人を頼り、姫路の آپパトに避難することになったのだが、その間、水道もガスもない状況で、

近隣の人の助けあい、励ましあいの輪が強く、大きく広がった。一日も早く明石に帰れることを念じながら、当座の生活用品だけを持って、満員電車で姫路に着いた。見知らぬ土地の寂しさと、安心して眠られる安堵感が交錯し、複雑な心境であった。それからは主人と娘を送り出した後、明石と姫路を往復する日々で、この間東山町や姫路でも、ご近所の方々の幾多のご支援、激励を頂き大変有難く思っています。今回の震災ではすみなれた家と、思い出深い多くの家具を失つたが、それにも増して、人情の温かさ、共に生きる大切さを等、日ごろ忘れていた大切なものを学んだ一年であった。これから復興に向う明石の町が人に優しい住みよい街になるよう祈ります。

北朝霧丘

地震のない所に

来たはずでした

斎藤 ゆみ子

予測もしない地震がお正月気分

を吹き飛ばすように一月十七日明け方、私達を襲いました。かつて六年間暮らした関東では、いつも「地震がある」ということが頭の中にあり、実際、震度四も経験して家具の補強をし、寝る時も安全

な向きを選んでいました、神戸転勤の時「地震がない所でいいわね」そんな声に送られて来たのに、震源地を眺めるように建つ十三階建てマンション六階の自宅で体験した揺れは、観測の震度より激しいものだったと思います。家具の倒れる音、物が落ちて割れる音、わからない不気味な音（壁など建物が揺れる音？）実際よりとても長く感じられた十数秒間は室内を、そして建物自体を一変させてしまいました。安心しきった生活で当然、家具の補強もしていなかったのですが、ただ一つ整理タンス上の人形ケースだけは、片方を固定していたので、斜めになりながらもかろうじて乗っており、もし落ちていたら、それは私を直撃していたと思われず。余震に悲鳴をあげながらも、徐々に夜が明けて室内の惨状にはア然としましたが、何よりも家族全員が無事でよかったと思うだけでした。多くの人々が住むマンションでは、自宅内の被害だけでは済まない事態が起きていました。敷地内の多くの箇所が破損し、エレベーターも止まり、いたる所の壁に大きな×印の亀裂が入り、これで建て物は大丈夫な

のかという不安でいっぱいでした。それから長く続いた不便な生活、さらに一日でも早く、安全な建物にするため、の話し合いを経て、復旧工事が続き、平成七年は暮れていきました。誰も思わなかった災害、誰も考えなかった水やガスのない生活、でも思いがけない親類、友人、知人の思いやりや知らなかった人との交流等、心が温くなることも沢山ありました。二度とこんなことはあってほしくありませんが、いつも「万が一」という心の準備だけは、忘れてはいけないと思っています。

五時四十六分の腕時計

坂田 優子

一九九五年一月十六日午後九時頃、少し強い揺れを感じた。「さっき地震がきたな今度来る地震があるの北海道みたいな大地震やったらどーする？」私達は、そう言いながら床へ着いた。一月十七日午前五時四十六分一体何が起こったのか分からなかった。私は、夢だと

思っていたのか寝ぼけていたのか寝たまま一緒に揺れていた。そうしたら、「ゆうこー！ゆうこー！」と雄叫びのような父の声が目が覚めた。

私は、何がなんだか分からないまま、妹と必死で父と母の寝ている部屋にいった。二十秒程の強い揺れのあとも、まだ余震が続いているようだった。とにかく一度、外に出ようと家族四人で懐中電灯をつけて外へ出た。ふと母の足元を照らすと母のアキレスケンの二、三センチ上の方から血が出ている。私は、とっさにもう一度家の中へ入りタオルを何枚か持って母の足をタオルでしばった。

ようやく明るくなつてくると祖母の家が心配になってきた。車で急いで祖母の家へと向かった。祖母の家は、無事で、電気もガスもついていて、テレビの画面を見た瞬間、言葉が出なかった。神戸の町がとんでもないことになっていった。一週間前に行った時に見た風景とは、まったく別のものになっていた。信じられなかったというより信じられなかった。自分が見た場所、歩いた場所が今、テレビの向こうでどんとどんと燃え広がるのを見て、驚きとショックで複雑

な気分だった。

私達はその日とうとう、あの恐ろしい揺れを体験したあの家にもどることができずに祖母の家に泊まることにした。翌日私達は、一度家に帰り、ドアを開けた瞬間、本棚は倒れ、テレビはひっくり返っているのが見えた。

ふと目についたのが、タンスの下からベルトが数センチ出ている腕時計。父にとつてもらったその時計を見た時、あらためて、地震の恐怖を思いしらされた。五時四十六分びつたり止まっている。父が「この時計は、この地震を忘れないためにもとっておこう」と言い、今もちゃんとしてしまっている。そして、電気やガス、水がないだけでこんなにも生活が不便になるなんて考えてもみなかった。自分がどれだけせいたく暮らしをしていたかと考えさせられた。普段何気なくおこなっていた生活が、すごく幸せだったんだと思った。自分になにができるか分からないけれど、できることがあれば役に立ちたいと思います。

三日間の避難生活

松尾 洋子

私の住んでいるのは十三階建マンションの四階。激しい揺れで外壁には無残な亀裂。ひどい所はコンクリートに穴があき、内装ボードも壊れ、部屋の中から外が見えたと聞く。素人の私達には、もうこのマンションも駄目かも知れないと思えた。テレビやラジオで亀裂のあるビルに近づかないように言っているので、避難を考えた。大蔵中学に行き、様子を見ていると、先生らしい方が出て来られ「武道場を開けます」と言って下さった。武道場は半分の部屋に畳が敷いてあり、行くのが早かった私達は、そこに一人毛布一枚分の場所を確保した。

暖房がなく、夜は底冷えがし、畳部分にいる私達でさえ、寒くて寒くて、家から持っていた毛布の上に、災害の毛布が一枚ずつ配られたが、それでも寒かった。神戸の人達は校舎の中にも入れず、外で夜を過ごした人もいるという。一人一枚の毛布も当たらず、家から持ち出すことも出来なかった人

達は、どれ程寒い思いをしたことであろう。夜、おにぎりと、たくさん配られた。他市からの救援物資だった。温い人の情けが身にしみた。翌朝も遅い時間だったが、朝食のパンが配られた。時間はずれていたが、一日二〜三食が支給された。西からの道路事情は良いためか、さまざまな救援物資が届き、余る程になった。ラジオを聞いていると、神戸では一個のおにぎりさえ、届いていない所もあるという。余る分を神戸の人達に回してほしいと役所の人に言ってみたが、明石市に送られた物を他市へ横流しは出来ないという。お役所仕事の不合理さ。寒さに震え、食べる物も届いていない人達のことを思うと涙が出た。四日目、消防署の人がマンションを見に来て、居住に問題はないというので家に帰った。主要な柱等の損傷がないということ、「一部損壊」になった。外壁の損傷はひどく、判定に納得できない気もしたが仕方がない。室内も内装ボードが割れてとび出し、クロスもあちこち破れ、共用部分の補修費用と内装をあわせるとかなりの金額になったが、一部損壊には、義援金も当たらない。

い。それでも全てを失った人達に比べれば、まだ恵まれている。被害の大きかった人達の生活の再建は、もっともつと大変だろう。雲仙や奥尻では一千万円以上が支給されているのに、阪神大震災ではわずかな金額しか支給されない。

義援金のみならず、国の責任で個人補償なり、保障がされるべきだと思ふ。米軍への思いやり予算や住専処理問題等、一体、国は誰に目を向けているのだろうか。私達の税金は、もっと国民に目を向けた使い方をしてほしいと思ふ。

その他の地区

天の涙を：

大久保町 坪倉 克樹(28)

震災後 我也忘れて 友人宅へ

一周忌 晴れてくれよと

願いつつ 天の涙を 我は待つ

花の生命力に拍手

朝霧町一丁目 田中 治

平成七年一月十七日未明。明石市はまだ暗闇の底でありましたが、まことに突如、天地が鳴動して激震が走り抜けて行きました。兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)がそれでありました。明石市内で

も、私たちの住む東部地区は「激甚地指定」にふさわしい大被害を生じました。水・ガス・電気のいわゆるライフ・ラインに損傷が大きく、水の出ない水道の有難みを、東部地区の住民のすべてが実感したのであります。木造家屋が次々に解体され、そのあとが更地となつて風が吹き抜けるなんて、気候温暖で住みやすさを自負していた当地の多くの皆さんは、等しく、地震の驚異に目を見張られたのではないのでしょうか。震災後、二度目の春が、桜と共にやって来ましたが、花の生命力に拍手を贈りたい気持ちであります。私達は、心を寄せ合つて天与の試練を克服し、住み良い朝霧が生まれるよう祈りたいものです。

子どもたちの声

一の三 いづつ ゆか

じしんのひ、わたしはねていました。おかあさんが、だっこをしてくれました。おとうさんはおにいちやんのところにいくと、おにいちやんのうえに、たんすがのつていました。

つくえのしたにみんなはいりました。

おさまったとき、いえがむちゃくちゃでした。

一の三 おく かずのり

じしんのときにきがついたこと、ぼくはびっくりしましたが、いっぱいいらはつていました。テレビでは、こうべのほうは、いっぱいつぶれていました。

おばあちゃんのうちのかわらが、おちていました。

一の一 くりき はるな

一月十七日に「じしん」がきた。

わたしが、きかえるときに、きゆうにきたのでびっくりした。わたしは、おとうさんのこえにきがついた。おとうさんは「ベッドをもち

なさい。」っていったから、「おねえちゃんどこにベッドがあるの。」ってきいてみた。でもでんきがまつくらで、みえなかった。わたしが「さぶい。」といったから、おねえちゃんが、あしであったかくしてくれました。

とけいは、一こおちたけど、ほかはおちなかった。たくさんわれた。ほとんどがガラスだった。れいぞうこがすごいまえにきてた。いとこはゆうきくんもありさちやんもだいじょうぶだった。ともひろくんは、なきながらうちにき



小学三年 甲申 康まさ
 ぼくは、目がやめるほど、じしんのときに、いげたダンボールの箱や、くぐりかたつて、その上、ダンスがのつていました。すべこく、重く、あうて、自分、ろし、からたです。それをおとこ、せんかの、けてくれました。ダンスが、そのま、またおれて、こが、くつて、よかったです。となりの室のか、くも、またお、い、ました。一階、お、あ、く、た、や、で、家、か、た、むいて、い、ました。それは、き、く、こ、つ、て、した。テレビで、し、ん、の、地、し、ん、だ、と、あ、か、りました。家が、す、め、ん、い、の、で、お、は、あ、あ、や、ん、と、お、い、ち、ん、は、し、ん、の、家、へ、い、き、ん、ぼ、く、た、ち、は、二、月、に、む、つ、か、た、へ、い、ご、ま、し、た。も、月、に、家、が、で、き、た、の、で、帰、り、き、ま、し、た。また、家、を、く、い、い、し、よ、う、す、め、る、と、メ、ン、バ、ン、に、か、り、よ、か、た、で、す。

たよ。かいちゆうでんとうをもつていた。

本が、わたしのあしにおちてきた。いたかった。でもがまんした。おばあちゃんはおでこをきっただけで、おじいちゃんは、トイレにいったからだいじょうぶだった。わたしはドキドキしてしにそうだった。三人ともなきそうになった。「ドカンガシャン」とおとがしてこわかった。

もう「じしん」なんてきてほしくない。もうよしんもきてほしくない。しんだ人もいっぱいいるからね。もうこないでね。おねがい、やくそくだよ。

地しん

二年 今い まさき

ぼくは、じしんがきてびっくりしました。テレビはついたけど、ガスはつきませんでした。水も出ませんでした。その時、のどがからからでした。公園に行ったら人がいっぱいひなんしていました。道を見るとひびがいていました。大きな道ろもひびがいていました。

た。それで、ぼくは地しんてすごいんだなってわかりました。

夜、ぎふのおばあちゃんのところに電話をかけました。つぎにまがさきのおばあちゃんにもかけました。家に帰ったらおなかがすきました。するとまた地しんがきました。いきなりきたから、びっくりしました。

地しん

二年 長野 とししげ

一月十七日、ぼくのすんでいた下畑にも地しんが来しました。アパートのいかいのおじちゃんは、おしつぶされてしましました。おばあちゃんもしましました。五さいの男の子だけたすかりました。ぼくの家は、その二かいでした。ゆれた時、おかあさんが、「小さくなりなさい。」と言ったからすぐに小さくなりました。ぼくのまくらには、ガラスがいっぱいあったから手にささっていたかかったです。

おにちゃん、ねこがしんだと思てなきました。でも生きていました。地しんはこわいと思て

ました。

地しん

二ねん 林 よしかず

その時、ぐらぐらとゆれて、音がした。ぼくは、ふとんの中にもぐりこんだ。食きとか、みんなおちた。大きなはこもおちて、いもうとのふとんの上ののっかった。

ぼくは、ひっしではこをのけた。びっくりした。おかあさんもびっくりした。おとうさんも、弟もびっくりした。こわかった。ぼくたちは、ひなんした。おなかがすいた。遠くまでいってやっとお店でごはんを食べた。おとうさんの会社のおふろに入れてもらった。大きなおふろだった。とても、こわかった。もう地しんなんていやだ。

地しんの時

三ねん くらこ ますみ

一月十七日(月)五時四十六分地しん発せい。わたしは、五時ぐ

らいからおきていました。ねげけながらめざましどけいを見たら、五時三十分になっていました。

ちよっとたつてからふとんから出ようとしたら、キーンキーンと耳鳴りのようなおとがしました。「へんだなあ。」と思っていると、いきなりゴードドドーンガツ

シャンとすごい音とともにぐらぐらつといきなりゆれました。わたしは、ゆめだと思いましたが、ほんとうでした。

まだゆれている中で、お母さんが、ひっしにおねえちゃんの頭の上においてある、たんすをささえているのがちよっとだけ見えました。わたしはこわくて、いつもよこにおいてあるぬいぐるみをだきしめました。

お母さんのしんけんな声が聞こえました。お母さんはわたしたちに「ふとんをかぶりなさい。三人とも。」と言っていました。

すこしおさまったとき、ちがうへやでねているお父さんをみんなだよびました。すると、お父さんが小さな声で「おーい」とへんじをしてくれて、あんしんしていました。

ちよっとたつて、お母さんが「か

「中電とうある？」と聞いてきたので、みんなでさがしました。そして、みつかったので、お母さんは、お父さんといっしょに、下のへやにいってしまいました。

それからお母さんがあがつてきて、下におりてもいいと言ったのでおりました。おりてから、みんなでカーラジオを聞くと、しんげんちが、あかしがいきょうあたりだと言ったので、びつくりしました。そのとき、おじいちゃんがつぶに行っていて、よかったな、と思いました。

地しんのとき

三年 ほり内 ふみ子

一月十七日に地しんがありました。わたしは、地しんがくる前まで、ねていました。ねていて、いきなりじしんがきたので、ふとんの中にもぐりました。

その時、お母さんが、バイクのつて、しんぶんはいたつに行こうとすると、いきなり地しんが来たので、ぼうにつかまっても、立っていられたかったと言いました。

地しんがおさまって、だいどころを見にいくと、電子レンジがたおれて、おさが五、六まいわけていました。地しんがきたからふとんの中にもぐったら、地しんでおぶつだんが、どんとたおれてきました。

お母さんが「みんな、地しんやでー」といってみんなをおこしました。お姉ちゃんは、ねていたので、わからなかったと言っていました。

お母さんが、電気をつけようとしたけど、つきませんでした。ていでんで、かい中電とうをさがそうとしたけど、いつもおいているところからころがつて、さがすのがたいへんでした。

やつとさがして、あかりをつけると、つくえの上がめちやくちやで、直すのがたいへんでした。お兄ちゃんのところ、すぐくめちやくちやで、直したら、ちよつときれいになりました。おぶつだんの戸がとれて、ポンドでくつつけました。

わたしは、地しんがはじめてだったので、地しんがこんなにこわいとは思いませんでした。とてもこわかったです。

地しんのとき

三年 真鍋 憲司

一月十七日、ぼくは、ずつと起きていました。すると、ガタガタという音がしました。そして、お父さんと、お兄ちゃんのあしのところ、たんすがのつていました。お父さんが目がねをさがして、ぼくがねているへやへきて、「だいじようぶか。」と言いました。

そして、お母さんがおきて、ぼくのとなりにたんすがたおれていました。したのへやにいくとまっくらでした。お母さんがだいどころのドアをあけようとするときあきませんでした。

そしてお外にみんなでました。「こわかったなあ。」とおもいました。

地しんのとき

三年 田中 康喜

ぼくは、目がさめると、ふとんのう上にへしやげたダンボールの箱やふくがのつていて、その上にタ

ンスがのつていました。すごく重くてあつくて息ぐるしかったです。それをおとうさんがのけてくれました。タンスが、そのままおれてこなくてよかったです。

となりの室のかぐもたおれていました。一階もめちやくちやで、家がたむいていました。そとはまっくらでした。テレビでしんど七の地しんだとわかりました。

家がすめないの、おばあちゃんとおにいちゃんは、しんせきの家へいき、ぼくたちは、二月にひらかたへひっこしました。

六月に家ができたので帰ってきました。また家ぞくいっしょにするようになるよかったです。

じしんがあつた日

四の三 赤松 由美子

一月十七日にじしんがありました。

ぐつすりねていたら、ガタガタとふるえてきて洋服ダンスとつえが私の体の上に乗ってきたそうです。重さはんじませんでした。私はさいごの力をふりしぼって、ダンスとつくえの中から出てきま

した。

「おちつけ。」とお父さんの声。

「お兄ちゃんは大丈夫かしら。」とお母さんの声。両親はお兄ちゃんの家に行きました。一人になると心細くなってきました。しばらくするとお父さんがきて「ゆみ子、気をつけて来い。」と言いました。

下に行ってみると、和室の電気は落ちていて、もうすごいことになっていました。ほかにもいろいろな物がたおれていて、足のふみ場もなくなっていました。げんかんはくつ箱がたおれていて、出られる様子ではありませんでした。ようやく外に出ると、ほかの家もす

ごく大へんなことになっていました。何日かたって、神戸に引っこすことになりました。しばらくの間楽しかった朝ぎりとは、おわかれです。神戸で、いろいろな思い出を作って、はやく帰りたいです。

(三年の時の作文です。)

地 しん

四年 海野 伸弥

一月十七日の朝、しん度六の地しんがおこりました。

その地しんがおこったのは、五時四十六分ごろでした。三十秒ぐら

いつづいていました。ぼくは、そのとき、さいしよはねていました。やっと地しんがおさまった後で、家の中を見たら、つくえの本だな

がひっくりかえって、たんすはひっくりかえって、台所では、おさが何まいもわれていました。リビングでは、物がいろいろと、つみ重なっていました。家の中は、ごみ箱のようでした。

ぼくは「すごい。」と思いました。お父さんは、その後で、神戸港に仕事に行きました。九時ぐらいに電気がつきました。それでもよしんは、つづいていました。お父さんがかえってきて、

「東に行くにつれて、ひがいがひどくなって、すまでは、あっちこちでかじがおこったよ。港では、ガントリーが海に向けてたおれていた。」

と話してくれました。

ぼくは、「朝でよかった。」とおもいました。なぜならお父さんは、ガントリーの運転の仕事をしていたからです。

ぼくは、もうあんな地しんは、来てほしくないと思いました。

とつぜんの地しん

四年 笹田 晶子

朝、五時四十六分ぐらいに、ガタツとゆれたので、私はとびおきました。そのとたん、ものすごくゆれて、いろいろな物がおちる音が聞こえました。私は、電気の真下にねていたので、すぐその場からにげて、へやのすみにいました。お兄ちゃんも、へやのすみによりました。私は、(このまよまなかつたらどうしよう。じしんをテレビでみて人ごとと思ってたけど、じつさいなってみるとこわいなあ。)と書いていました。今にも家がつぶれるかと思うほどゆれたようにかんじました。

じしんがやみ始めると、外から人の声がします。お父さんがやって来て、

「外、でてるんじゃないか。みんな。」

と言ったので、お母さんたちと外へ出ました。かいたんはザラザラでした。

かいちゆう電灯をつけて、外へ出ました。そしてまた中に入りました。服を着て、じつとすわって



▲朝霧小学校校庭。一ぱいの避難者の車
(どちらも朝霧小学校提供)

◀朝霧小学校の出入り口

いました。その間も、ドキドキしておちつかなくて、そわそわしていました。

はじめ私は、(また来たらどうしよう。)と黙っていましたが、明るくなっていくと、だんだんおちついて来ました。

その日の夜は、学校へひなんしました。その時には、(ただゆれるだけじゃないか。来てもどうってことない。)という気にかわっていません。

あと十日以内に来るとか言っていました。早く来てしまつてほしいです。いつくるか分からないのに、不安でしかたないからです。でも、(このままずっと来ない方がいいかな。)とも思いました。(いつかテレビでみてたじしんの人も、こんな思いをしていたんだな。)と思いました。

地震をふりかえつて

六年 田原 愛

「一年前の今頃、がらくたまみれになった部屋をばおーつとつたつて見てたなあ。」と、朝起きて、

部屋をながめて思った。

あの時、ひどいゆれがやつとおさまつた時に、自宅のガス管がはれつしていた。その日、自宅じゅうのお父さん方が、子供の工作ねん土をつめたり、いろんなくふうをし、力を合わせ、みんなでガスをとめることができた。また、水が出なくなつて、トイレもいけななし、ご飯を食べることができなくなつて、どうしよう。と思つていた時、近所のおばさんが、「うち、お父さんが、会社が水が出るからつて、水くんできてくれたから、ほい！ 早くバケツだして！」と言つて、水を分けてくれた。それから、おむかひに住んでいるお姉ちゃんとおばさんは「こんな時だから、お互い、助け合ひましょう」と言つて、いざ、逃げる時のため、に車に荷物をつんだりするのを手伝つてくれました。

私は、この時、いざ大変な事がおこつた時、こんなにもみんなで助け合う事ができるんだ。と思つたと同時に、もしこの地しんが、後何時間後かになつて、おこつていたら、家族四人ともばらばらで、お父さんは、会社に行く途中の電

車の中で、もしかすると、死んでいたかもしれない。すると、もつとたくさんの犠牲者が増えていきます。

私も、地しん後の生活は、とても不自由で、すごく困つたけど、家族四人が、無事そろつていいることが一番、何よりでした。神戸の方の人達の中には、家族を失つて、泣きさけんでいいる人がたくさんいます。テレビで見ると、「ああ、何かしてあげたいな、はげましてあげたいな。」と思ひます。

今、もうあれから一年で、すっかりとふつうの生活にもどつていけるけれど、一年前の不自由な生活から、ちつとも変わつていらない人もたくさんいます。

すっかり生活がもどつていいる人も、一年前のでき事は忘れず、困つた時、周りの人達と助け合つた事、人々の心のあたたかさを忘れずに、これからの世だいの人達に伝えていきたいと思います。

そして、一日も早く、不自由な人達が、ふつうのくらしができるように、私も協力したいです。

震災から一年

六年 畑井 由香

震災から一年がたちました。あの、一年前の大地震が、何年も前のことのように感じます。

去年の一月十七日の五時四十六分に、まるで、ジェットコースターに乗つていいるような状態で目が覚めました。天井が、ぐらぐらゆれていいるのを見て、おもわず、お母さんにしがみついていました。

何時間かたつてから電気がついたので、テレビをつけると、神戸の、まるで、つみ木の建物がこわれたようなビルの光景が映りました。私は、ぼう然として、テレビを見ていました。

これが一年前で、今では震災前と同じような生活をしていいます。でも、まだテント暮らしの人もいいるし、学校で暮らしていいる人もいいます。

今、復興作業も、あちこちで行つていいます。私達の住んでいいるところは、神戸よりかは、ひ害は大きくなかつたけど、地震のために、上にあまり物を置かないように、用心していいます。

一年たっても、いろんな所で余震があります。だから、今度地震がきても、安心なようにしておくと私は思いました。

それと、私は地震後にきてくれた、ボランティアの人たちをテレビで見て「ありがとう。」と言いたいなと思いました。

震災から一年

六年 広松 和歌子

あの日、九五年一月十七日から私の中で物に対しての考え方が変わった。たった二十秒ぐらいの地震だったけど、あの時。あの日。あれからの事は、まだはっきりと頭にやきついてはなれない。そう。それは、忘れたくても、忘れられないぐらいに何もかもがすごかったからだ…。

お父さんの「地震や！地震や！」と言う大きな声で目をさまして私はとてもびっくりました。家の中がゆれている！地震！私は声もできないくらい、動くこともできないくらいにびっくりました。とてもこわかった。全然思ってもみなかった。

頭の中が真っ白になって、もうこの世は終わり、死んでしまうとも思ったほどだった。

落ちついてから家の中に入るとメチャクチャで、すごかった。何となく、今にもこわれそうだった。あれから一年。私はあの兵庫県南部地震で水やガスの大切さや、生きていることがどれだけうれしいことか、他にもいろんなことを学んだんだと私は思う。この震災でお父さんやお母さんを失ってしまった子や、死んでしまった人の

ことを聞くと、かわいそう、と思う。これからはずっと、一月十七日という日がくるたびにあの地震のことを思い出すと思う。そして私はずっと地震のこと、地震からこのことを一生忘れないんだと思う。

あの大地震を

ふり返って

六年 柳田 敦子

一月十七日、午前五時四十六分

「ガタンガタンガッチャーン。」という音を立てて阪神、淡路に震度七のおそろしい地震がおきました。たったの二十秒ぐらいだったのに町中をめちゃくちゃにしてしまうなんて、今もその風景を思い出すと、とつてもおそろしいことです。

電気はその日のうちにつきましたが、水もガスもまだ出ませんでした。でも、神戸市はまだ電気がつかないと言っていました。水が出ないから、学校へ水をもらいに行ったりしていました。地震がおこる前までは、そんなに水を大事にしていなかったけど、地震がおきてからは、水は生活に欠かせないほど大事なものだなと思いました。水、ガスが出てきたら、私の家はほぼ前と同じ暮らしができたけど、家がこわれてしまった人は、学校に避難したり、テント暮らしをしている人がいると聞きました。寒い冬なのに、テント暮らしなんてかわいそうだと思います。

三月ぐらいに、神戸市の長田区の方へ見に行ったけど、と中までしか電車に乗れませんでした。ずっと歩いて行くと、焼けてしまっている家や、傾いている家を見ま



朝霧小学校体育館(左)と避難者でいっぱいの見聴覚室(下)
|| 写真は同小学校提供

した。公園の横を通ると、ビニールシートで作っているテントがたくさん張っていました。

高速道路が、と中で曲がって切れている所や、橋げたの中の鉄が見えているのを見ました。

今もまだ復興工事などしていたり、仮設住宅にいる人がいるけど、早く地震前の神戸市にもどってほしいと思います。

兵庫県南部地震

中一 井尻 響子

一九九五年、一月十七日午前五時四十六分に、兵庫県南部地震がおこった。

私の家は、半壊だった。

それからが大変だった。毎日毎日、水くみをした。こんなにしんどい思いをしたのは初めてだった。ガスもでないから、食べ物にも苦労した。

でも、やっぱり、自分の家から祖母の家三木市に、避難することになった。

最初は、学校が始まって、学校に行けなかった。学校に行こうと

思ったら、朝五時には起きないのだめなのだ。でも、何日かすぎてやっぱり学校に行きたかったからがんばって行つた。お兄いちゃん、加古川のおじさんの家にいた。だから、こんな日々は、もうきてほしくないと思う。

兵庫県南部地震を

体験して

中一 後藤 美香

一九九五年一月十七日午前五時四十六分。

この時を、私は忘れることはないでしょう。

とても大きな揺れに、びっくりして目が覚めました。真っ暗で、何も見えなかったけれど、その時のゴォーという大きな音と、止まらない揺れに、「これは、ふつうの地震じゃないな。」と思いました。

やっと揺れがおさまった後も、私と妹は、部屋の戸が開かず、しばらく閉じこめられていました。その後、窓づたいに部屋から出た私は、自分の目が信じられませんでした。

大きな棚が、タンスが、全部倒れていました。台所のガラスや、瀬戸物のお皿も、たくさん割れていました。外に出ると、道路に、瓦がたくさん落ちていました。アスファルトが、ひび割れていました。

とりあえず電気は戻ってきただけ、水道管が壊れていたから、隣の家から、バケツにいっぱい入った水を、何回も何回もお風呂に運びました。ガスも来ないから、ご飯はインスタント食品ばかりでした。バスに乗って、何度も銭湯に行きました。そうやっての間にも、余震が毎日のようにありました。毎日、いつになったら、前までの生活に戻るのか、とても不安でした。

それから、もう一年がすぎようとしていきます。この辺は、わりと早く立ち直ったけれど、まだ避難所にいる人や、仮設住宅にいる人や、その他にも、自分の家がなくなくなった人たちが、たくさんいます。神戸の街も、まだ前のように、元通りにはなっていません。早く、みんなみんな、元のように戻ってほしいと思います。そして、前よりも、もっといろんな意

味で、「前進」していったってほしいです。

自然っておそろしい

中一 流郷 礼奈

一九九五年一月十七日、午前五時四十六分に突然襲った「阪神・淡路大震災」は、六千名を越える人々の命を奪い、また平和に暮らしていた人々の家屋を一瞬にして破壊してしまいました。

明石に住んでいる私たちにも、いくつかの被害がありました。家の中にはびっくり返っているし、外へ出れば道はめちやくちやだった。が、まさか神戸の町があそこまでひどいとは思いませんでした。みんな、自分の家、近所の家のことで頭がいっぱいでした。でも、道に転がった瓦を集め、少しでも車が通りやすいようにと、私たちにできることをした人もいました。私たちは、一年前にいろいろな体験をし、学びました。たとえば、水、ガスなど生活に欠かせないものが止まってしまつて、たいへん困りました。それがきっかけで家

族又は近所の人たちと協力することもありません。他にも大切なことをたくさん知ったけれど、私が一番思ったことは、自然のおそろしさです。地震なんて、思いもしなかったことです。地震でどうなるかなんて、想像もつきませんでした。それが、予告もなしに、急に起こったので、本当にこわいことだと思いました。

今、一年経て神戸の町もだいぶ復旧し、新しい建物もできて、地震のときについた傷は、消えようとしています。人々の心についた傷は、なかなか癒えるものではないです。でも、それに負けないうで新しい明るい町づくりに、私ができる限りのことをしていきたいと思えます。

バケツリレー

中一 揚野 藍

一月十七日。たくさんの人々を苦しめたあの震災から、もう、一年が過ぎようとしています。だけれども恨み、憎み、苦い体験をしてきたんだと思います。わたしも、あれだけ「こわい」と思ったのは

初めてでした。

わたしの場合、運が悪かったというべきか、たまたま、その前の夜に妹と一緒に寝ていたために、本棚の下じきになってしまいました。今は、こうして笑って話せることですが、その時は、本当に死んでしまうかと思ったほどこわかったです。十七日五時四十六分、その時点では、ただ苦しい。ただ、すごくこわい。そんなことばかり考えていて、本当に、何があったのか、全然分からなかった。不安で、どうしたらいいのかわからなくて、まだ夢の続きだと思いたかった。数分して、お父さんが来てくれました。力は入らないけど、必死に

「お父さん、出して。」とさげんでいたような気がする。やっとなの地獄からはい出たときは、足がガクガクで、少し泣いていて、それでも、その時は、まだ何が起ったのか分からなかった。お父さん達が「震度：六ぐらいか。」と話し合っているのを見て、ああ、これが地震なんだ。とふるえていました。しかし、それも短い間で、おやつのような朝食を食べるたびに、ぐちゃぐちゃになった

部屋を片づけました。

お母さんたちは、長い間止まって出ない、電気とガスと水をどうするかを、一生けんめい考えていました。だけど、何といても、あのバケツリレーは忘れられませんでした。近所の人たちの役にもたてたし、おもしろかったし、終わった後で、すごく気分がいいものでした。

それにしても、五千人以上もの人の命をうばい、何十万人という人々を苦しめ、数えきれないほどの人々の涙を流した、あの、地震。一生、忘れられない思い出の一つとなると思えます。

聞いてきた中では、近所づき合いがうまくいってなかった人が、震災を通して、仲良くなったとか、震災で、家を引っこしてきた子と、友達になったりとか、いいこともたくさんあるようです。でもやっぱり「地震」というのは、ひどいものだと思います。罪もない、ふつうの人を殺していったり、やさしい心を持った人や、おじいさんやおばあさん、生まれて間もない赤ちゃんまでも苦しめていった。天災だとわかっていても、やはり許せない。わたしが大人なら、地

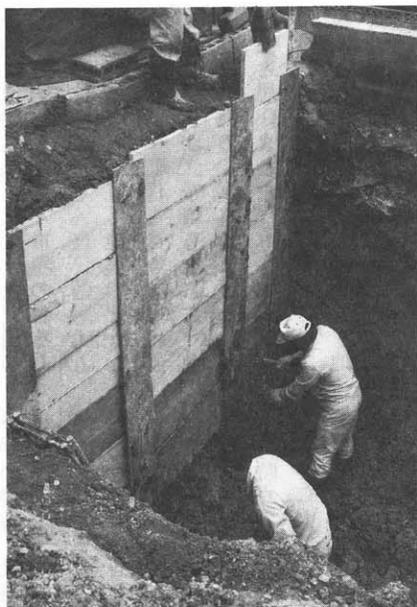
震に対しての、少しでも人々が安全でいられるもの”をつくってみたいと思う。わたしはまだ、半人前の子供だけれど、わたしでも役に立つものがあれば、ぜひ、やっていきたいと思えます。だけど、やっぱり、これからはこんな悲しいことはないように、毎日のようにのっけています。

(中一の人には地震当時小六でした)



地震直後、道路に避難してきた子どもたち。大蔵谷東山西山で(浜野親男氏提供)

崩れた地盤を支えなおす工事
 (大蔵谷清水の傳寶さん宅)



東朝霧丘東部の石べい



震災の発生時刻をそのまま残していた
 明石市立天文科学館の時計台＝明石市提供

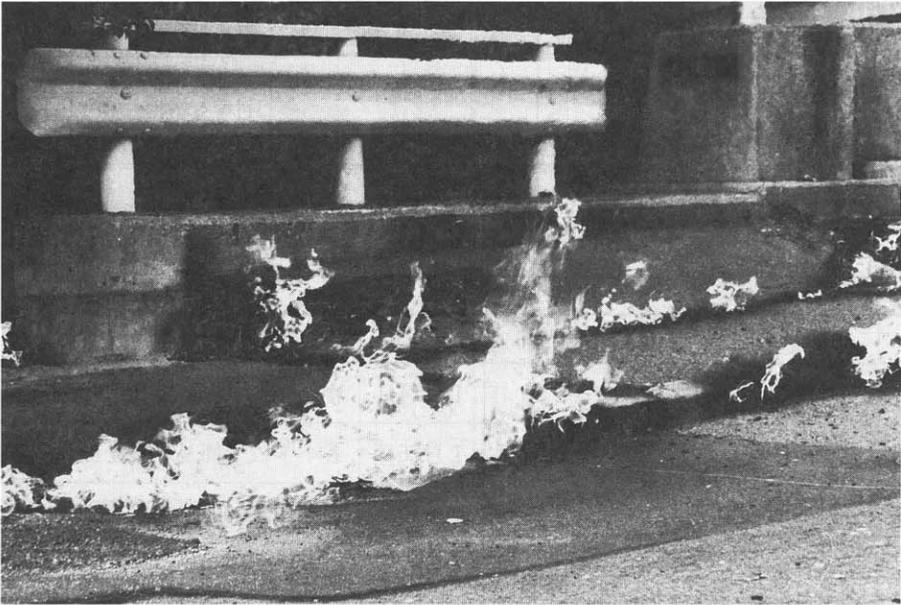


給水に長蛇の列
 ＝朝霧小学校校庭で
 (写真は同小学校提供)



記

録



ガス管が破裂し、激しく炎が地上へ吹き上った＝松が丘1丁目
(神戸新聞明石総局提供)

◎被災状況（朝霧中学校区）

校区内世帯数	被災世帯数	比	全壊世帯数	比	半壊世帯数	比	一部世帯数	比
8,713	6,292	72.2	894	10.3	2,282	26.2	3,116	35.8

（明石市 死者24人、負傷者・重傷139人、軽傷1,745人、
全壊4,209世帯、半壊10,919世帯、一部破損34,833世帯）

◎避難所の状況

○避難場所・朝霧小学校 最大時人数500人 1/17～3/24（大蔵中学校に統合）
・朝霧中学校・松が丘南小学校・大蔵中学校・人丸小学校他

朝霧中学校・朝霧小学校避難者数

月日	1/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
朝中	459	459	410	462	459	460	270	170	169	126	130	130	100	63
朝小	430	500	290	320	320	164	118	130	107	86	97	97	70	65
月日	1/31		2/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
朝中	63		33	30	30	25	23	17	17	15	14	19	17	12
朝小	65		68	56	58	60	58	45	57	59	55	54	45	29
月日	2/13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
朝中	10	11	11	14	9	9	8	8	8	6	5	3	6	3
朝小	32	36	32	28	26	29	25	27	30	30	24	27	21	17
月日	2/27	28		3/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
朝中	閉鎖													
朝小		13		10	10	11	12	11	11	13	14	13	12	14
月日	3/12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
朝中														
朝小	12	11	10	10	8	9	8	7	6	8	8	7	3	閉鎖

月日	災害対策本部等の活動	月日	災害対策本部等の活動
1月17日 6:30 7:30 16:00	明石市災害対策本部設置 避難所になった学校に教職員の配置を指示 各避難所へ食料供給開始 毛布、灯油、日用品等を調達し避難所に搬送 被災証明受付け、発行開始（市役所4階）	1月24日	カセットコンロ無料貸出
		1月26日	各小学校で簡易給食を開始
		1月29日	仮設住宅100戸建設に着工
		1月31日	倒壊家屋等解体・処理 受付け開始
		2月11日	仮住居入居者の第1次抽選
1月18日	第1次仮住宅の申し込み受付け開始	2月13日	学校給食の完全実施
1月19日	日赤義援金申し出受付け開始	2月16日	仮設住宅第2次募集
1月20日	ガレキ回収開始 ビニールシート配布 2月20日まで 約7,000枚	3月8日	仮設住宅の鍵渡し
		3月10日	仮設住宅への生活救援物資の搬送

行政の動き

〈家屋の解体〉

○公費による解体

明石市内 解体家屋2680棟

未解体90棟

(平成8年2月末現在)

(内) 自衛隊解体42件

自衛隊・業者協同解体15件

朝霧校区 解体家屋260棟

未解体14棟

解体件数

業者256

自衛隊3

業者・自衛隊協同解体1

○自衛隊(駐留期間平成7年2月

12日～3月27日)

人数

陸上自衛隊 岡山40名

姫路80名

航空自衛隊 小松72名

駐留所 中央体育館(大久保)

自衛隊解体分(1件あたり)

・日数 2～3日

・人数 10人～15人

・重機 1台

・車両 5、6台

〈ライフラインの復旧状況〉

○電気

地震発生と同時にほぼ全域が停電したが、当日の比較的早くに復旧した。

○水道

発生直後の断水率は、約70%であったが、1月28日までにほぼ復旧した。

断水の間、朝霧小学校に來た給水車による給水、地域住民の助け合いでしのいだ。

○電話

地震発生当日(1月17日)の午前6時から7時には、通常時の50倍の発着信があり、輻輳(通話量が回線設備容量を上回ること)したことにより、電話のかりにくい状態が続いたが、1月24日には平常に戻った。

電話のかりにくい状態が続いたため、安否の確認に大きな支障をきたした。各避難所毎に特設公衆電話が設置され、朝霧小学校に電話が3台とFAXが1台設置された。

〈人口動態〉

朝霧小学校区

調査月日	世帯数	人口
平成6年10月1日	4,175	11,602
平成7年10月1日	3,974	10,982

(明石市全域 平成6年10月1日 世帯数101,023 人口281,947)

(明石市全域 平成7年10月1日 世帯数103,127 人口285,277)

○都市ガス

地震発生直後の供給停止は、朝霧中学校区全域(明石川以東24,000戸)に及んだが、2月1日から2月20日の間に全戸で復旧した。

この間大阪ガスから9千セットのカセットコンロの無料貸出があり対応策が講じられた。

都市ガス復旧状態

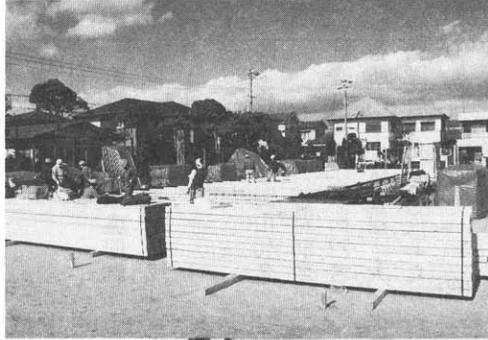
供給再開日	地域	戸数
2月1日	朝霧地区周辺(中朝霧丘 東朝霧丘 朝霧山手町 朝霧3丁目ほか)	約2,200
2月2日	同上地域周辺	約1,800
2月6日	大蔵谷・松が丘地区周辺(清水 狩口ほか)	約2,400
2月8日	同上地域周辺	約200
2月10日	朝霧・松が丘地区周辺(朝霧中学校付近 東山町ほか)	約1,100
2月13日	朝霧地区周辺(朝霧台 朝霧北町 朝霧小学校付近 大蔵谷奥ほか)	約1,300
2月20日	同上地域周辺	約1,500

〈仮設住宅〉

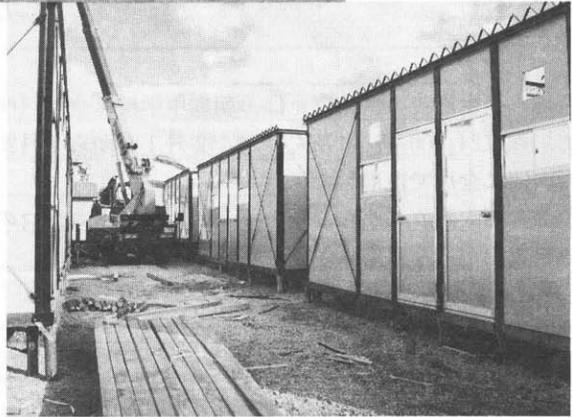
朝霧小学校区から仮設住宅への入居者は当初は142戸で、平成8年1月現在では128戸(明石市全体856戸)に入居している。電気カーペット、電気ポット、厨房用品、整理タンス等の生活救援物資が配布された。



仮設住宅間取り（一例）



⑤⑥仮設住宅の建設現場



救援物資の手配（市役所で）
（このページの写真は明石市提供）

- 救援物資 毛布、ふとん、カイロ、衣類、電化製品、医薬品、日用品、家具等。
- 義援金

全壊・半壊にかかる支援状況

支援項目	全壊	半壊	備考
明石市見舞金	40,000円	20,000円	単身世帯は半額
兵庫県見舞金	100,000円	50,000円	
日赤義援金	100,000円	100,000円	

〈応援・義援〉



市役所に設けられた被災者相談センター

消 防

朝霧分署担当区域の 地震直後の 出動状況について

明石市消防署
朝霧分署 消防二係長

消防司令 宮本

昭

朝霧分署担当区域では、地震直

後、都市ガスの漏洩事故が多発しました。ガス漏れ事故で消防隊が出動した地域は、東朝霧丘、朝霧丘、西朝霧丘、朝霧山手町、朝霧台、朝霧町一丁目、三丁目、太寺大野町、荷山町、大蔵谷清水地域などです。中でも東朝霧丘地域と中朝霧丘地域では、付近住民の



松が丘でガス管から炎が吹き出す
＝神戸新聞明石総局提供

明石市からのお知らせ

(震災3日後、自治会・町内会長あて)

(1995.1.20 月 6:00)

自治会・町内会長 様

明石市役所

未曽有の大震災による災害復旧に特設のご協力をいただき、心から感謝申し上げます。市も道路や水道施設などを損壊し、市民生活に大きな影響を及ぼしておりますが、現在全力を挙げて復旧に取り組んでおります。今しばらくのご辛抱をお願いいたします。なお、復旧の状況は下記のとおりとなっており、市の広報車や街頭広報を行っておりますが、会員さんよりお問い合わせや相談がありましたら、ご配慮のほどよろしくお願い致します。

記

- ① **市役所に相談センター開設**
市役所2階ロビーに、地震被害に関して、あらゆる相談に応じる「兵庫県南西部明石被災者相談センター」を設けております。
開設時間は、土、日曜日も含めた毎日24時間です。電話(07912-1111)でも受け付けます。開った時はお気軽にご利用してください。
- ② **水道復旧作業開始 いましばらくのご辛抱を**
市では、震災で水道の復旧作業に取り組み、現在、給水不能世帯は全市の32%、約3万5千戸までに回復しました。引き続き完全復旧をめざして、全力を傾注しております。市民の皆さんには、今しばらくのご辛抱をお願いします。なお、市東部地域では、次のところで給水をしておりますので、ご利用ください(給水場所一市役所、伊川谷浄水場、明石川浄水場、朝霞小、人丸小、松が丘小)。なお、市役所と浄水場では24時間態勢で給水をしています。
- ③ **ガレキ処理は20日から開始**
道路上に落下したカワラヤガレキ量は、20日から順次回収をしています。
車での回収が可能な場所、通行の支障にならないようまとめて、出してください。
- ④ **大久保清掃工場でも搬入受け付け**
大久保町松原にある大久保清掃工場(製造2号館 大久保市民センター西側を北へ、東二神明道路明石サービスエリア北側 07935-2995)で、ガレキ量の減便搬入を受け付けています。
時間は、土、日曜日も含めた毎日午前9時から午後5時まで。搬入は無料です。
トラックなどの手配が確保できる方は、搬入してください。
市民の皆さんのご協力をお願いします。
- ⑤ **カセット用ガスコンロを貸与**
都市ガスは、明石川から東の地域では供給を止めています。家の元栓は、しっかり締めておいてください。
なお、当所の対応として、大阪ガスの協力を得てカセットコンロとボンベ一式を先着8千名の方々に無料でお貸しします。

○と き 1月24日(火) 午前10時～
○と ころ 明石市民会館前

皆さんの協力を得まして、火災警戒区域(火災発生のおそれある区域をロープ等で明示し付近住民に對して火気の使用を禁止し、若しくは制限する区域)を設定し、消防車で付近の住民に火気の使用禁止等呼びかけました。住民の皆さん方の協力のお陰でこの地域では、ガス漏れによる火災もなく負傷者もありませんでした。また、松が丘地区では県道平野舞子停車場線の神明大橋南詰の道路が陥没、埋設している直径五十ミリのガス本管に亀裂が入り炎が高さ約一メートル幅約八メートルにわたり噴き出す事故がありました。それ以上拡大することもなく地震当日の午後九時ごろ、ガス事業所によ

兵庫県南部地震による火災・検索等即時調査報告

1月17日の動行			
出動番号	日時	場所	概要
1	6時00分	明石市大蔵谷清水	プロパンガス漏れ
2	6時15分	明石市朝霧町3丁目	天然ガス漏れ
3	6時20分	明石市大蔵谷清水	プロパンガス漏れ
4	6時30分	明石市松が丘1丁目	天然ガス漏れ
5	6時35分	明石市松が丘1丁目主要幹線道路 県道平野・舞子停車場線、神明大橋の南詰めの雑目	天然ガス漏れによる火災
6	6時50分	明石市松が丘1丁目2	天然ガス漏れ
7	6時51分	明石市東朝霧丘市道	天然ガス漏れ
8	6時56分	明石市中朝霧丘市道	天然ガス漏れ
9	7時05分	明石市太寺天王町	天然ガス漏れ
10	7時10分	明石市朝霧山手町市道	天然ガス漏れ
11	7時15分	明石市太寺1丁目	救助出動
12	7時20分	明石市松が丘1丁目主要幹線道路 県道平野・舞子停車場線、神明大橋の南詰めの雑目	天然ガス漏れによる火災
13	7時30分	明石市東朝霧丘市道	天然ガス漏れ
14	8時10分	明石市大蔵町	火災出動（誤報）
15	8時28分	明石市朝霧町1丁目	天然ガス漏れ
16	9時03分	明石市朝霧町1丁目	天然ガス漏れ
17	10時15分	明石市朝霧山手町市道	天然ガス漏れ
18	10時27分	明石市松が丘1丁目市道	天然ガス漏れ
19	10時40分	明石市松が丘1丁目主要幹線道路 県道平野・舞子停車場線、神明大橋の南詰めの雑目	天然ガス漏れによる火災

出動番号	日時	場所	概要
20	10時48分	明石市松が丘1丁目	天然ガス漏れ
21	10時50分	明石市松が丘2丁目	建物火災
22	12時17分	明石市松が丘5丁目市道	天然ガス漏れ
23	13時10分	明石市朝霧山手町市道	天然ガス漏れ
24	14時05分	明石市松が丘3丁目	天然ガス漏れ
25	14時18分	明石市松が丘3丁目市道	天然ガス漏れ水道破裂
26	14時30分	明石市大蔵谷清水市道	天然ガス漏れ
27	15時10分	明石市太寺大野町	天然ガス漏れ
28	15時30分	明石市大蔵谷東山西山	天然ガス漏れ
29	16時10分	明石市朝霧町3丁目市道	天然ガス漏れ
30	16時15分	明石市東朝霧丘市道	漏水
31	16時30分	明石市朝霧山手町市道	天然ガス漏れ
32	16時40分	明石市東朝霧丘市道	天然ガス漏れ
33	17時30分	明石市朝霧台	天然ガス漏れ
34	17時35分	明石市松が丘1丁目主要幹線道路 県道平野・舞子停車場線、神明大橋の南詰めの雑目	火災ガス漏れによる
35	17時40分	明石市松が丘3丁目	灯油の油漏れ
36	17時50分	明石市荷山町	天然ガス漏れ
37	17時55分	明石市荷山町市道	天然ガス漏れ
38	18時10分	明石市西朝霧丘市道	天然ガス漏れ
39	19時40分	明石市松が丘1丁目主要幹線道路 県道平野・舞子停車場線、神明大橋の南詰めの雑目	天然ガス漏れによる火災
40	20時50分	明石市松が丘5丁目	屋内での天然ガス漏れ
41	21時38分	明石市松が丘3丁目	油漏れ

警察

犠牲者があり、残念

明石警察署朝霧交番
 巡査 宇治 徳仁

る本管の開閉バルブの閉止作業によりガス供給を停止することができました。火災については、当日の午前十時三十分ごろ、松が丘地区で建物火災が一件発生しましたが、幸い発見が早く部分焼ですみました。家屋の倒壊については、

ご承知のように明石市内では、特に東部地域の被害が多く、朝霧分署担当区域では、倒壊建物の下敷きになり太寺地区と大蔵谷地区では、六十六歳の男性と七十八歳の男性がなくなりました。

地震の時は二十四時間勤務で、仮眠中だった。交番の建物は柱がひび割れ、壁が落ち、窓は吹っ飛んで、内部はメチャメチャになっていった。すぐに本署に連絡をするが現場の状況把握に混乱。とりあえず朝霧交番地域をパトロールに出て調べる。周り中ガスの臭いで、住民は不安そうに道路に集まっていた。人々に火の注意を呼びかけ、ガス会社に連絡をとる。しかし、ガス会社も早朝で担当者がいなかった。当日の住民より直接の要望は二〇〜三〇件ぐらいあった。主にガス漏れが多かった。朝霧北町で地滑りや、池の土手にひびが入ったた

めの水漏れ、松が丘地区で給水塔に亀裂が入って倒壊の恐れがあるなどの被害があった。道路は一部交通規制したが（ガス漏れのため）、停電中で信号が停まっていた割に混乱が少なかった。また、中朝霧丘でアパートの一人暮らしの男性が行方不明との届けがあり、調査したところすでに避難しており無事だったが、残念なことに倒壊建物の下敷になって亡くなられた方もあり、突然襲った大地震とにかくだ変な一日であった。（談）

まず避難所の

位置を覚えて：

明石警察署

警部 本位田 安輝

明石市全域において一一〇番通

報は普段は一日に六〇件程度。十七日はガスもれの一一〇番が一番多く、パニックで回線がつかない状態であった。十八日にもやはりガスもれ通報が多く、また、交通事故や各種の問い合わせが増えて、一日の件数については記録ができていない。災害後は不眠不休の百日間であった。署員の半数が神戸方面に応援出勤のため、残った人数で崖くずれやブロック塀がくずれた事故などの通報で、パトカーなどで走り回った。食事にも困り、遠方(社町方面)まで買

交通機関

西明石以東の交通が麻痺し不便な思いをした。各交通機関に事情を聞いてみた。

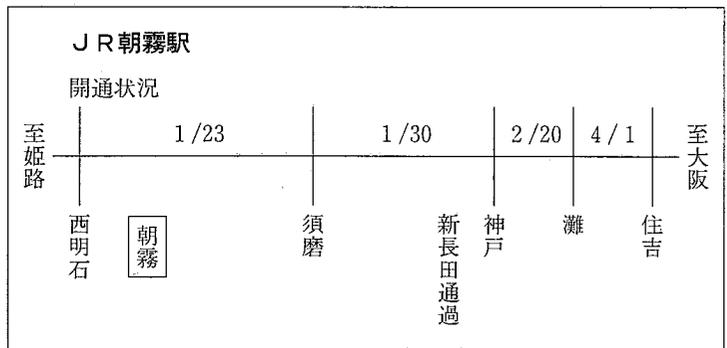
J R朝霧駅

金沢 大治

東海道線七四日ぶり全線開通四月八日新幹線新大阪↔姫路間開通山陽新幹線八日ぶり全線開通
J R神戸線と山陽新幹線が長期間にわたり列車の運転が出来なく

いにいたりした。このような大規模災害の場合、警察や消防には各種機材がなく、人海作戦の手作業に頼るしかない状態であった。今後は大規模災害の対応が各方面で考えられており、出動ほか他のマニュアルができつつある。市民にお願いしたいことは、大災害の場合はまず避難すること。明石市内には一六八カ所の避難所があるので、自分の地域にある避難所の位置をしっかりと覚えておいてほしい。(談)

ご利用の皆様大変ご不便をかけました。当朝霧駅においても地震発生時は、三人の社員が業務に就いており、また、ホームには十人程度のお客さまが電車を待つておられたが、当駅社員の誘導により全員無事駅前広場に避難してもらった。駅の被害はホーム屋根のプレートに穴があき、跨線橋の通路

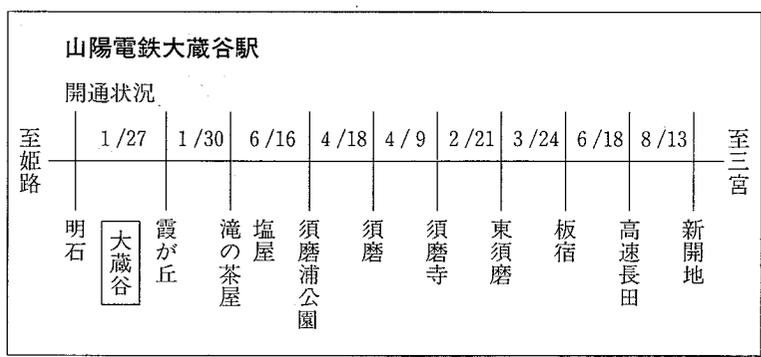


に段差が出来たり、蛍光灯が通路に吊り下がり、また駅東側の道路に大きな亀裂ができ、駅の周辺も大変な被害があった。駅業務でも自動券売機が横向きになって機能しなくなり、事務室の壁にも多くのひびが入り散々な状態であった。が、関係者の積極的な復旧作業により通勤通学や救援に向かうお客さまの足の確保に努めた。(談)

山陽電鉄大蔵谷

助役 増田 勝英

一月十七日全線不通、一月十八日明石駅以西は開通、明石駅から東は被害が大きく線路は寸断され全壊した駅舎もあった。五時四十六分、当駅は無人の為責任者が点



検したところひびが入った程度で大きな被害はなかった。塩屋は仮駅舎を作り開通。日七年八月十三日に全線開通し現行ダイヤができた。仮駅舎で営業中の塩屋駅は、日八年三月十三日に装いも新たに元の場所で営業を再開した。お客様にできるだけ迷惑をかけないよう一日も早い復興を願って社員一丸となって努力している。(談)

明石市バス

一月十七日A M五時四十六分和坂車庫、出庫に向けての点呼、運

転前の点検の最中に地震発生。給油設備などの危険物や車輛に大きな被害は無かった。六時四十分全路線の運行を一時休止、路線パトロールを実施。六時五十分ガス漏れが発生していた神陵台路線の運行休止を決定。八時四十分パトロール完了、和坂、大久保とも運行再開。道路危険箇所が多く信号機は作動せず大渋滞のため大幅な遅延となった。P M八時以降の全路線運行休止を決定。夜は明かりが少なく、非常に暗い感じであった。

一月十八日始発から終発まで平常ダイヤで運行、ただし終日大渋滞。一月二十一日ホテル南風付近大型

車通行止。一月二十二日松が丘給



歩道が盛り上がってつぶれた
明舞中央病院前バス停

水塔が倒壊の恐れ、北センター前道路通行止。朝霧二丁目経由は権現下の道路事情により運休。明舞団地方面は北センター止まり、明舞センター前の歩道橋が落ちそうとの事で迂回した。一月二十三日

タクシー

朝霧駅前の運転手
さん達の声から

○お客さんに乗せて走っていた時に地震にあった。ドンドンと飛び上がった。道がうねって運転できなかった。

○自宅は御影で全壊、妻と子供二人が家の下敷きになり、八時間後に出してもらったが娘一人が亡くなった。

○多数のJ R利用者が列車の不通で困り果てていた。東方面へ行きたい人を神鉄の鈴蘭台回りで運んだ。

○淡路経由で大阪へ行く人を播但汽船の乗り場まで乗せたが、二



倒壊の恐れがあった松が丘給水塔

学 校

朝霧小学校

明石市立朝霧
小学校校長

岡本 武司

時間かかった。

○道路が、通行止めになっている事を知らないお客さんが、他の道を通っていくと「なんでそんなに遠回りして行くんですか？」と文句を言われた。

○運転手さんが所定の勤務地（朝霧駅前）までくるのに、地割れ、

盛り上がり、道路ふさぎ、など道路事情が悪く時間がかった。やっと着いてもお客さんが少ないので仕事にならなかった。

○駅前の店へ食料品を運んでくる車を待って、沢山の人が並んでいるのが見られた。

一月十七日午前五時四十六分、地震が発生。振動は大変大きく、長く感じた。これでもか、これでもか、という感じだった。布団を頭からかぶって地震が終わるのを待っていた。その時間が本当に長く感じられた。あたりはまだ暗く、ちようどその日は曇っていたので七時ごろまで薄暗かった。そのうえ停電で、様子はよく分からなかった。

家を出ると、隣の家のブロック塀が倒れ、民家の屋根瓦が崩れて

いる。林崎あたりでは瓦はもろろん、壁や塀が壊れており、傾いた家もある。明石の月照寺では、墓石が道路に転げ落ちていて、被害の大きさに驚きながら学校に着いた。いつもは、山陽電車と市バスを利用して出勤しているが、当日、山陽電車は不通となっていたので、車で出勤した。なお、山陽電車は一月十九日、明石まで開通、市バスは一月十七日から走っている。

学校に着くと、運動場には避難してきた人と車でいっぱい。出勤していた職員と一緒に急いで教室を開けて避難してきた人達を校舎内へ誘導した。体育館の天井が落ちていたため、視聴覚室と図工室を避難所として開放した。学校は

休校にしたが、避難してきた人やその後、続々避難してくる人達の対応に夜中まで忙しかった。避難した人達のために市役所の人もやって来た。その日の夕方までは、避難してきた人は四十人程だったが、暗くなるにつれてだんだん避難してくる人が多くなり、また、余震のある度に多くなった。夜中の一時半頃には避難者は約五五〇人。視聴覚室、図工室のうえに、一年生三クラスの教室、特別活動室と児童会室の合計七教室を開放した。運動場は車であふれた。車の中に避難している人や家族も多かった。当日は学校に泊まり込んだ。

だ。一月十八日の朝早くから学校周辺の人々が水を求めて、給水車の前に列をつくり、列は運動場をぐるりと囲み、一、二時間待ってやっと水を得ることができた状態であった。その後、二十二日の日曜日まで教頭と一日交代で学校に泊まり込んだ。一月二十三日（月）からは、全職員が交代で当番や宿泊をしている。

学校は二十一日の土曜日まで休校にした。学校の被害状況は、校舎本体はしっかりしているが、校舎の周りの地盤が沈み、校舎と周りの地面との間に大きな段差ができた。渡り廊下と校舎の継ぎ目は



Ⓛ 震災当夜の避難所にさっそく救援物資が届けられた

Ⓧ 避難所のトイレ用水

いずれも朝霧小学校で

朝霧中学校

明石市立朝霧
中学校校長

池澤 典昭

はずれ、通ることができない。校舎内は、棚、本箱、ロッカー、テレビ等はみんな引つ繰り返つたり落ちたりしていた。被災備品は、九十三品目 四、六九五、一五五円になった。(二月十三日現在) 防火シャッターも全部閉まり、継ぎ目はすべて壊れた。体育館の天井は落ち、使うことはできない。水道ガスとも不通になっていたが、水道は一月三十一日、普通教室棟だけ仮復旧したが、管理棟はまだ断水状態である。ガスも二月一日に給食室のみプロパンに替えたが、学校全体はまだ不通の状態である。児童や保護者には、大きな怪我等はなかったが、家の屋根瓦、塀や壁等が壊れたため、児童の中には自分の家を離れて親戚や知り合いの所へ避難していった子どもがいる。県内はもちろん、鹿児島県から滋賀県まで広域である。県内十四人、県外十一人、合計二十五人。また、神戸市等から十一人の児童が仮転入してきている。(二月十六日現在)

め骨折し、三か月の重傷を負った。自宅が全壊した者二人。屋根瓦が壊れた者、家具が倒れたり、家財が壊れたりした者がほとんどである。今なお水道、ガスが出ない者もいる。交通途絶及びこのような状態のため、一月十七日の地震発生当日、出勤した者は十七人(全職員三十五人)であった。全職員が顔を揃えたのは、学校を再開した一月二十三日であった。このような中にも職員は、授業再開にむけて、児童の安全確保のため、瓦礫を取り除いたり、棚、本箱、ロッカー、テレビ等倒れた物をおこしたり、整理をした。児童の通学路の安全確認のため、手分けして地域へも出かけていった。

一月二十三日(月)より学校は再開し、二十六日(木)からは簡易給食も始まった。二十三日は、地震発生以来、初めて児童が登校してきた。元気を顔を見せてくれるかと心配したが、五五三人(全校生の約八十五%)が元気にやってきた。この週は、始業時刻を九時、下校は昼まで、簡易給食が始まってからは給食後とした。児童の安全を図るため、全職員が地域まで出かけて登下校の指導をした。

日記

一月三十日(月)からは、八時四十五分始業、五校時終了後下校とし、登校指導はPTAの協力を得、下校指導は職員が行った。給食も温かいメニューが一品加わった。

二月六日には、読売テレビが「温かい給食」を取材に訪れた。地震発生から一か月が過ぎ、余震もかなりおさまってきたので、二月二十日(月)からは、地震発生以前の平常授業に戻す予定にしている。

まだ、学校内には片づけた瓦礫が運動場の隅にあつたり、危険な場所にはロープを張ってあつたり状態である。施設、設備の修理、修復はできていないが、児童の心も少しは落ち着いて来たように思える。学校に避難している人たちも、昼間は五、六人、夜間は三十人余である。学校周辺の家々の屋根は、雨漏りを防ぐための青いシートで覆われている。一日もはやく人も物も完全に復興して欲しいものである。

本日正午、児童とともに、兵庫県南部地震で尊い生命を失った犠牲者へ黙禱をささげた。

(地震発生以来一か月の二月十七日)

今回の大震災で、学校は(一)避難所としての学校の有用性、(二)防災教育の必要性という二つの面で特に注目されることになった。本校も、被災時の避難場所として地域住民の拠り所となり、長期にわたって被災住民の生活の場に開放された。また、校区への情報提供、水の提供等、避難所だけでなく、校区の中枢としての役割をはたした。災害はいつ起こるかかわらない。登下校中、ましてや授業中に発生したら、冷静に対応することができたのだろうか。「防災教育」や「防災拠点としての学校」「教師のメンタルケア」等の課題に直面した。

震災後、朝霧中学校に着任した私は校舎を見てまわり、その被害の大きさに大変驚き、続いて生徒の心情を思いやり、いたたまれぬ思いを抱いたことを記憶している。ようやく校舎修復の目処もつき、工事も本格化する。本校はもとより地域も、被災からの早急な立ち

直りを心から願っている。
次は、震災後の本校の対応を平成七年十一月に記録としてまとめ

た資料の一部である。ご活用いただければ幸甚である。

「その時、生徒は、教職員は、学校は」

朝霧中学校の
まともから抜粋

○5..46兵庫県南部地震発生

大きな揺れ、停電の中、家族の安否を確認。幸い、壁に取り付けた「非常用懐中電灯」をはずすと明るい光が。合わせて、年末に電池を取り替えていた「強力ライト」を、散乱している本の下よりさがしだす。本棚の本がすべて落下。台所の食器棚よりすべての食器が、床面に散乱。市内の実家と静岡の息子に安否の電話連絡。(この時は通話できた)外に出ると、自動車のエンジンをかけ、自動車のラジオを聞いている。ご近所の方々、新聞配達の方が、単車のエンジンを止め、押してやってく。このあたりは大丈夫のようだが、家が傾いた

り、あちらこちらで屋根・壁・塀・道路がやられてい。ガスも吹き出し、水道の水が路上に噴水のようにでてい。等の状況を教えてくれる。

○6..00学校に電話連絡。用務員

室内、転倒落下物で散乱。けがなし。しばらくしたら家を出る旨伝える。(この時も通話できた)家中を点検後、家人に数日帰宅できないかも知れない旨を伝え、着替え等を準備。

○6..20自動車で自宅出発。自宅

↓沢池小西↓明石南高南↓西明石コープ前↓旧神明道路東進。道路の陥没・亀裂多数。水道管の破裂により、路上に水柱が多数。信号機すべて停止。家屋の倒壊・屋根瓦の落

○6..50学校着。停電。屋外、校舎内ともガスの臭い。高架水槽破損のためか屋上より激しく漏水。すでに水を求めて来校者あり。壁面と地面の亀裂多数。校舎内、転倒落下物で散乱。被害甚大。春名校長に電話連絡、停電だが、なんとかつながる。(学校の電話は、AC電源を使用している。停電時は作動しないことあり)「生徒は自宅待機」の決定を受ける。(7..00ごろまでは何とか通話できていた電話であるが、このころより混信・通話不可能に)

○6..50学校の西を流れる朝霧川の水音

激しい。学校北の池が決壊したのかどうか不明。流水の跡が西道路、校内にも見られる。川底がきれいになっている。
○いぜん停電。電話かかってくるが、小さなベル音。混信し通話不可能。公衆電話、いぜん不通。
○電気復旧。
○同時に公衆電話復旧・学校の電話も明瞭な音声になる。しかし、電話は混信し通話できない状況も。もうひとつの電話は、調子悪くなっている。ファックスの調子不明。

○7..30通信混乱のため、連絡網

での連絡不可能。出勤された先生方で、自宅待機の貼紙、すべての門の開錠、立番。余震頻発。屋外で携帯ラジオ・自動車のラジオで情報収集。登校してくる生徒も数名。校門付近で立番の教師によって、安全指導し、帰宅させる。緊急自動車のサイレンの音、激しい。(このあと時間の記録なし)

○校内の電気系統総点検。余震の続く中、すべての配電盤を開け、短絡等で、ブレーカーがOFF

になつていないかの点検。機器の脱落の有無等も点検。機器の脱落・TVの転落・破損等は多数あるが、電気系統に異常なしと判断する。

○TVでの情報収集開始。地震の規模・被害の状況に驚くばかり。(以後七日間、情報収集のため、職員室のTVつけたままの状態続く。また、携帯ラジオも三日間つけたままの状態続く。)

○出勤してくる先生方の話で校区・市内・周辺の被害状況も少しづつ判りだす。

○高架水槽破損確認。水道断水。揚水ポンプ停止の操作処置。

○職員打合せ。

○9・20臨時休業決定。貼紙。

○通信網混乱・教育委員会より通知が、体育保健課山中係長により配達される。電話可能な中学校へ連絡してほしいとのこと。しかし、大蔵中へは電話からない。

○被害の状況点検・記録写真・応急の後始末と清掃。

○明日状況に変化がなければ、臨時休業と決定。

○昼ごろガスの臭い無くなる。ガスの供給停止の処置がなされた

ためか？

○午後市教委へ「被害状況報告第一報」持参。

○教職員については、出勤できないものは、職専免。出勤したものは、交通機関のこと、家の心配もあるため、状況をみながら帰宅してもらうことにする。しかし、生徒のこと、今後のこともあるので、多数の教職員、待機・家庭訪問。

○明石の情報が入らない。TV・ラジオとも明石の情報なし。

○夕方避難所に決定される。(松が丘小被害甚大のため)

○当初、四十〜五十名程度ではということであったが、日暮になり、暗くなる中で、避難される方が続く。

○避難された方四三〇名以上。運動場に自動車百台以上。暖房のため、自動車のエンジンをかけて車内で一夜を過ごされた方も多数。実数つかめず。

○避難所は、市から派遣された方とコミセン職員と教頭で対応。

○教頭は主として、職員室で対応。市から派遣された方とコミセン職員が避難所となった「朝霧北コミセン」で対応する。

○校内放送で情報提供・呼出し等を開始。

○職員室前の公衆電話に長蛇の列。職員室の電話も開放。

○かかってくる電話も多数。垂水区・大蔵中学校区に関する事項も多数。大蔵中・大蔵コミセンへ電話するが不通。

○十八日未明まで、電話休みなし。(夜中を過ぎたころから、音声が、より明瞭に、また、遠距離通話可能になる。)

○プール開錠(防火用水と市民の水洗トイレ用水確保のため)

○アルミパックに入ったごはんと梅干の緊急食料到着・配布。

○インスタントラーメン・缶コーヒ・寝具等多数、コンビニ等閉店されている中、入手困難な状況にもかかわらず、親睦会が準備。

○宿泊(徹夜)

○余震頻発

一 情報収集について

情報化社会といわれる中で、当初「正確な」必要な「情報」が入手できなかった。テレビ・ラジオにしても、明石の情報がない。地震直後通話できた電話も午前七時を

過ぎた頃より、混信・不通。とりわけ、校区の状況、生徒のこと、教職員のこと等、最も身近な状況すらつかめない。生徒の実態を把握できたのは、震災後、七日目、初めて登校したときであった。(一名は市外に避難したことは友人の情報でわかったが、場所がわからず、市内の各中学校に情報を依頼。そして、消息が判明したのは、震災後十四日目、一月三十日であった。)

そんな中で、早朝・夜間の電話が比較的通話可能になり、電話での情報収集が一部できるようになった。また、三日目より「地震関連情報あかし」が避難所を通して入手できるようになり、明石の情報もわかるようになった。また、新聞も避難所を通して、入手できるようになり、震災の全体状況がわかるようになった。しかし、ライフラインの情報収集が最後まで手取った。本校の場合、最後まで残ったのは「ガス」であった。ガス会社・対策本部・市教委・その他ガス工事関連会社等、幅広く情報収集したが、見通しが最後までたらず、完全復旧は「八十日目の一学期の始業式の日の夕刻」であった。情報伝達のあり方・方法

等、震災後、報道機関をはじめ行政も含め、検討されているが、今回の震災を通して、学校として、情報収集・情報提供のあり方等は、どうあるべきかを考えてみたい。

○学校の通信手段の確保が、重要であることはいうまでもない。有線通信は災害で機能しなくなることが実証された中で、「無線通信」

を中心に考える必要がある。いろいろな通信手段の中で、特に「携帯電話」は、その機能を十分発揮してくれると考える。学校に一台常設することが検討できればと思う。

○地元の情報収集の手段として、学校に、コミセンに、地元の「CATV」の受信



全壊した朝霧中学校の焼却炉

施設が必要と考える。

○災害復旧にかかわる情報収集の「問い合わせの一覧」等に、学校に、コミセンにも必要と考える。

○さらに「パソコン通信」も導入し「情報通信網の多重化」を進めていただきたい。今回、コミセンの方が自分のパソコンで避

難されている方々の名簿を作成、効率的に運用することができた。現在、学校のコンピュータ室にはパソコンはあるが、災害時にはコンピュータ室が、職員室から離れており、機能的に運用できない。以前から「職員室にパソコンを」といつているが、日常の教育活動・事務処理にも不可欠の状況にある中で、ぜひ、職員室・コミセン事務室に配置を検討していただきたい。

○防災無線により、対策本部より、校区に情報提供できるシステムの設置が進められているが、このシステムで避難所や学校からも独自に情報提供できるような機能を持たせていただきたい。

今回の震災で、本校に、電話で、また、直接来校されて、様々な情報を求められたり、問い合わせ等が相次いだ。また、救急薬品を求める方もおられた。学校が「地域の情報源」だけでなく、ある意味では、「行政の末端」としての役割をも果たした。しかし、情報が少ない中で、十分に対応しきれなかったことが、いまだに悔やまれる。このことから、学校が、地域の中心として、正確な情報提供がで

きる必要性があると考えられる。そのためには、学校が「情報収集できる機能」と「情報提供できる機能」を持つ必要性を痛感した。

二 生徒のこと

地震後、通信手段・交通等が遮断する中で、教職員も動きがとれない。それでも可能な範囲で、生徒の状況を確かめていく。生徒のことを心配しながら、日が過ぎていく。生徒の状況を把握するのに時間がかかり、生徒の状況を把握できたのは、前述の通り、地震後初めて登校した七日目であり、全生徒の状況を完全に把握できたのは、十四日目であった。この間の生徒の状況は、私たちが想像もしなかったものであった。両手に鞆、背中にリュックをせおい、弟・妹たち家族の先頭にたつて避難所に行ってきた生徒の顔には、「ぼくががんばらないと!」という決意が見られた。崩れた屋根に上って瓦等の後始末をし、シートをかぶせる父親に、下から梯子をしっかりと持って、心配そうにみあげながら声をかけている生徒の姿。崩れた壁・塀・瓦等の後始末に、自分の家だけでなく、近所の方々の中に入って、汗をふきながらがんば

っている姿。先生のこと、学校のことを心配し、かかってきた生徒の電話の向こうから、心配と余震の恐怖から、今にも泣きだしそうな生徒の声。しかし、「私も家のこと

とがんばるから、先生もがんばって！」との声。寒い中、長時間、水を求めて、給水車の到着を、順番を待つ生徒。声をかけると、あいさつをする声にも疲れが感じられる。「風邪ひくなよ！」と声をかけると「大丈夫！先生こそ気をつけて！」とびっくりするような元気な声に安心。急に、遠く他府県へ避難するため、あいさつに夜遅く母親とやってきた生徒。心配そう

な顔だけれども、震災の現実をしつかりみつめ、自分で自分に言い聞かせているように感じられる生徒の姿に目頭が熱くなる。登校日を知らせるため、公報車を借り、校区内をまわっていると、アナウンスの声を聞き、一斉に飛び出して

くる生徒。手を大きく振り、「先生！」と声をかけてくれる。元氣そうな顔に安心。保護者の方だけでなく、校区の方々から「先生、ご苦労様。家のことほっといてずつと学校とか。本当にご苦労様！からだに気をつけてください！」

と声がかかる。今回の震災を通して、「家族の絆」「地域の絆」が強くなつたといわれているが、確かにそんな状況をいたるところで見かけることができた。これが、時の経過とともに薄れないようにしたいと考えている。しかし、自宅が全・半壊し、校区外・避難所・親戚宅・知人宅等、住み慣れた自宅外より通学してくる生徒、仮転入して

くる生徒、仮転出する生徒への対応は、震災当初はさほど気づかなかつたが、日を追うごとに、生徒の「心のケア」の必要性を痛感しだし、現在も課題のひとつである。

三 教職員のこと
地震当日、六時五十分には教頭が、七時半すぎには数名の男子教職員が出勤。余震の続く中、当面の対応に走り回った。電気が比較的早く回復し、TV等の情報が入りだす中で、神戸市方面在住の教職員のこと

が心配になりだす。電話も不通。まったく連絡できない。後日わかつたことであるが、神戸市の東部に実家のある教職員は、家族の安否確認・救出のため、明石から自転車

で神戸市を横断、実際にたどりつき、六時間以上かかって徒歩で、母親をつれて、神戸の街を横断し、明石まで避難した。また、神戸市在住の教職員は、大きな揺れと同時に、家族とともに外に出た途端、振り返ると、家屋が全壊したということ。また、震源地に近い北淡町に実家のある教職員は、八十歳を越える母親が一人住まいであり心配されていたが、実家は全壊したものの、助かつた

とのこと。前述の通り、本校の教職員「十三名」の自宅や実家が大きく被害を受け、それ以外の教職員にも、一部損壊にはならなかつたが、クラックの発生や家具の転倒、食器等の破損等、ライフライ

インの破損等、なんらかの被害を受けている。そんな中、生徒の安否確認・学校の施設・設備・備品等の後始末、学校再開への準備・避難所の対応・宿日直等、困難な中で、様々な動きをつくっていった。特に、避難所の対応や学校再開への、ある程度の見通しが持てるまでは、我が家の状況も顧みず、がんばっていたいただいた教職員に申し訳ない気持ちで一杯である。朝霧

中学校に勤務する全員の方々の協力と知恵を出し合つて、多くの対応ができた。

大地が揺れた恐怖の日から、十カ月が経過した。何度か、「記録と思い」を残そうと筆をとつたが、いままでその気にはなれなかつた。「毎日の対応の記録」(別冊「兵庫県南部地震の記録」地震発生から、ガス完全復旧までの七九日間の記録)をとどめることはできたが、これによかつたのかという考察なり、まとめはできないまま現在に至つた。それは、地震後の対応に追われたということだけでなく、この状況をどこまで正確に書くことができるのか、また、きちんと分析できるのかという不安もあつた。しかし、やつと筆を走らすことを決意した。それは、大地震を体験し、この震災の「事実」と「経過」と「対応」をふまえ、そこから「今後の教訓と課題」をまとめる責務があると考えたからである。また、私自身のまとめの意味もふくめ、可能な限り、現実を直視してまとめたつもりである。

教頭 青山 誠一

病院

入院施設を備えた病院においては、災害がどのように影響したかを聞いてみた。

阪神・淡路大震災を振り返って

— 医療機関の任務とは —

医療法人吉徳会

あさぎり病院

院長 藤原 卓夫

兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）以来、地域の皆様には当院に対しまして、心のこもった激励のお言葉を頂戴し、本当に有難く心より厚く御礼申し上げます。また、震災により医療機器の破損や、建物に多少の亀裂が生じたものの、幸い入院患者さん、そして職員の中には負傷者がなく、震災以来、一日も休まず、診療を続けられました。このことをここに報告申し上げます。

年の改まった早々の平成七年一月十七日午前五時四十六分、淡路島北淡町を震源とする直下型の激震が突然、兵庫県南部を襲い、死者六千三百人・破壊家屋十一万棟

にも及んだ未曾有の大惨事を引き起こしたことは、気候温暖な兵庫県南部そして、戦後の平和の中で生きてきた私達にとって、生涯忘れることのできない出来事となりました。わずか二十秒足らずの激震は、家屋だけでなく、阪神・淡路を中心とした病院・診療所の医療機関にも大きな打撃を与え、医療機関の多くは全壊・半壊・焼失などの壊滅的な状況に陥りました。とくに地震地の病院においては、壊滅的な状況のなか、その職員も被災者でありながら、不眠不休で次々と運ばれる負傷者の治療にあたったということ。当院も大きな被害こそありませんでしたが、

水・ガスなどライフラインが断れた状況の中、震災当日早朝より、外来には多数の負傷者が来院され、また、次々と激震の被災地から入院患者さんが転送されました。私自身も産婦人科医としてではなく、外科医として、多くの患者さんの治療に当たらせていただきました。職員の間には、自宅全壊の者が五名程おり、その職員も被災という大変な状況の中、半壊の家屋を置いて、まず患者さんの治療を優先するべく病院に駆けつけてくれました。また、心配していた入院

〈震災直後の患者の動き〉

医療法人吉徳会 あさぎり病院

(1) 外来患者数

日程	受診科目						合計
1/17	内科・外科・その他を含む合計						113名
1/18	内 68	外 65	眼 40	婦 12	耳	185名	
1/19	内 54	外 36	眼 32	婦 25	耳 20	167名	
1/20	内 94	外 76	眼 97	婦 46	耳 24	337名	
1/21	内 67	外 40	眼 48	婦 16	耳 27	198名	

(2) 入院患者数

日程	受診科目						合計
1/17	内	外 1	眼	婦 4	耳	5名	
1/18	内 1	外 1	眼	婦 3	耳	5名	
1/19	内 3	外 1	眼	婦 2	耳	6名	
1/20	内	外 2	眼	婦 1	耳	3名	
1/21	内 5	外 3	眼	婦 1	耳	9名	

患者さんの食料については、京都の清医療食品が震災当日から、ヘリコプターで空輸してくれたのは幸いなことでした。

外来の負傷者が少しずつ落ち着いて数日後より、ボランティア活動として医師・看護婦・ケースワーカーによる近隣の避難所の訪問などを開始し、老人保健施設の大浴場を都市ガスからプロパンガスに切り替え、入浴サービスを提供し、喜んでいただきました。三好副院長は病院の激務の後、連日、自宅近隣の避難所で夜間、避難されている患者さん達の治療にあたりました。二月十六日には総勢三十八名により須磨滝川高校・板宿小学校へ炊き出しに行き、入浴サービスのため、ガス不通の須磨地域に、むつみ荘のデイケアサービスカーを派遣しました。

病院は、いかなる場合でも患者さんの治療をまず優先させるという使命をもった組織であり、今回の震災においても、病院の使命を再認識した次第です。明石市内の公的病院は「外来休診」という紙切れ一枚のもとに、震災による救急患者の受入れを行わなかったと批判されています。私達は決して

どのような困難な状況下でも、そのようなことのないよう、職員一同、一丸となって、患者さんのため、良心ある医療を目標に頑張

大震災下の当院の医療活動

医療法人明仁会

明舞中央病院

院長 元原 利武

当日朝、地震後、直ちに病院に連絡するも、電話不通、車も停電のため、シャッターが開かず出庫不能、徒歩で病院に向かった。道路は波打ち、水道管破裂のため一部川のようになっていた。

七時過ぎ病院着。外来には外傷患者があふれ、床は血の海のようだった。三名の医師と当直看護婦、外来看護婦で創傷処理に当たらせられた。院内は高架水槽破壊のため、地下から七階に至る各フロアーは床上浸水、地下水槽のメインバルブを閉め、各階のバルブを閉鎖し、水を除去、エレベーターは当然停止、各病棟を回って、入院患者の安否を確認したが外傷者なし。職員も無事、停電のため自家発電開始。その間、救急車来院十二台、

つていきたいと考えておりますので、今後ともご厚情を賜りますようお願い申し上げます。

当日外来四百八十七名、大多数は災害被害、入院十三名内震災分六名、救急隊によれば、当日明石市内で救急受け入れをしていたのは、当院と国立明石のみとのこと。器材、手術室等の損害甚大、自家発電によりICU・手術室・透析室の照明・レスピレーターの作動等は可能。給水配管、高架水槽の破壊により給水不能。関西電力に通報し、午後より通電、照明可能となる。職員は約二／三は出勤してきた。徒歩出勤の者も多数。損害状況の把握に努め、病棟患者総回診を行った。

建造物の損壊は、旧館と新館の間に約五センチの間隙、壁面亀裂無数、隙間から空が見えた。支柱と耐震壁の損傷はなかった。その

間に当日予定の血液透析患者が来院しだした。約四十名、給水が断たれたため透析不可能。地震の状況からみて加古川・高砂・三木等の透析可能な医療機関へ依頼する。多数のため、振り分けと依頼に困難を極めた。患者搬送のため当院の救急車と職員の車で大渋滞の中を依頼先の病院まで、以後十日間毎日繰り返し送り送りを行う。最終は夜間一時過ぎまで連日。

福原泌尿器科、服部病院、神明病院、二見病院、大山病院を主として、その他十数病院の方々に御世話になり、時間外透析など、御配慮頂き感謝に堪えない。

この間、外来・入院診療は職員この努力により震災応需体制をとり、診療を続け、滅菌ガーゼ・綿球等の欠乏・入院患者・職員の給食に支障を来しながらも乗り切った。

各部門の回復状況については後述するが、栄養課においては停電・ガス停止・給水・給湯停止に加え内壁損傷、水漏れが著しく一月十七日は入院患者の給食不能となり、職員の食事を振り替え給食し、県の対策本部に非常食の救援を依頼するも、各市の本部で対応するからと断われ、明石市の

災害対策本部に連絡すると、非常食は罹災者用なので、病院は自分でやれと言われた。従業員の車を動員して、加古川・姫路に買い出しに行かせて急場をしのいだ。翌日より大型の電気炊飯器、カセットガスコンロを調達して、応急的に炊き出しを行った。調理器具の損傷、洗浄機の損傷により二月十六日に至るまで通常給食を復旧できず、この間一月三十日までエ

レベーターの損壊により、給食搬送・水の運搬を人海戦術で行い、使い捨て食器を多用し、途中より大阪ガス提供のプロパンガスによる炊事を行った。

薬局、事務機器等の損傷も水浸等により被害甚大であったが、診療機能を落とさないよう最大の努力を払い、損壊部の補修と並行して診療を続けた。

この間、震災時一月中の救急車搬入総数は五十一台、一月中の入院患者延数二千五百七十三名、新規入院八十八名、その他震災関連入院三十五名、外来患者総数三千七百六十三名、震災関係二千五十名に達した。今回の震災により痛切に感じたのは、大災害時の初期には、救援等を行政に依頼しても

全く不可能であり、数日間は病院自体で熱源、給水、給食、診療を完結することが必要であった。幸いなることに本院職員は、交通事情の悪さにもかかわらず、多数が当日より駆けつけ、震災の復旧に強烈な寒気の中で努力して頂き、事故もなく診療を続けることができたのは感謝にたえない。

人工透析

一月二十八日より屋外に仮設貯水タンク設置し、配管等修理、透析再開。二月二日完全復旧。エレベーター

一月三十日修理完了、運転再開。

配管設備

高架水槽破壊。配管の断裂が著しく給・排水共不能。高架水槽新設し、一月三十一日より一部通水。

検査室

機器一部損壊、一月三十一日給水開始とともに復旧。

手術室

二月八日復旧完成。二月七日迄オートクレーブの滅菌不能のため、滅菌ガーゼ等の応援を私

病協西播支部長の姫路第一病院院長松浦先生にお願いして応援して頂いた。手術器材等の滅菌も一部成人病センターでして頂いたりして急場をしのいだ。全麻手術は、延期できるものは延期し、急を要するものは被害を受けていない病院へ数名依頼した。

ガス

漏水と回復遅れのため二月十三日より復旧。

空調設備

屋上ヒートポンプ式空調機器完全損壊。全面的に新設。二月二十日より運転開始。

放射線関係

(X線CT) 現像不可能、撮影のみ可能。二月六日復旧するまで撮影画像による診断を行なう。特殊撮影、一般撮影は器材故障がみられたが撮影可能。自現像が使えないため現像に苦慮する。

(RI) 二月十三日までに段階的修理、十四日より復旧。

(MRI) 二月十三日より試運転、二月二十三日より本格的稼働。

以上、本稿の要旨は第四十五回

日本病院学会「大災害と病院医療」のシンポジウムで発表したものである。

大震災を顧みて

明舞中央病院
島田 久美子さん

あの震災から、はや一年が過ぎようとしています。多くの人に、苦悩と不安の一年であり、まだまだそうした状態が続く人も多いと思います。周囲をみても空気が目立ち、本当の復興はこれからです。私の場合は幸いにも家族は全員無事。家は半壊でしたが、住むには支障なく、ほっと一安心しました。しかし、それも束の間、仕事柄主人は当日の朝七時前に家を出て、五日間ほど帰宅できず、共働きとはこういう時に悲しいものです。でも長男が高校生でしたので、後のことは頼み、子供だけを残して、私も午後には病院の勤務につきましました。地震の数日後よりマスコミで話題になった「透析」が私の職場です。透析には大量の水を使用します。断水・機械の故障などで当院は透

析ができず、近隣の病院を頼るし
かなか、受け入れ先をみつけるの
に、また、そこへ患者さんに移動
してもらうのに苦労しました。最
近では夫婦二人暮らしの高齢患者さ
んも多く、交通、通信の混乱する
中で自力で動くことは難しくまた、
渋滞する中では救急車といえども
なかなか進めず、透析を終わって
帰るのが、深夜に及ぶこともしば
しばで、十日間ほど患者さんの搬
送にあたりました。今思えば家族、
同僚も皆元気が良かったことが一番の
喜びでした。神戸の方では本当に
沢山の不幸があり、言葉にならない
ことばかりです。しかしそれを
何年かかって、乗り越えて行っ
てほしいと願ってやみません。こ
のたびの震災で多くのことを学び
ました。自然の偉大さ、人間の微
力さ、そして人の温かさ、さまざま
なものがあります。これを機に
普段何気なく使っているものの大
切さ、また地域社会での個人個人
のつながりや、病院間の連携など
いかに大切にしていかなければな
らないか、ということを痛切に感
じました。今回は被災地であり親
戚・知人・全国よりご支援を頂い
たことに感謝するとともにいつ反

私の一月十七日

明舞中央病院
牧田 浄弘

対の立場になっても、これらの貴
重な体験を活かせるように家庭に
あっても職場においても励んでい
きたいと思えます。

ドスツ・ドスツと床を突き上げ
るような感覚の後、グラグラと揺
れる。事務机の前に立って、当直日
誌の整理をしていた私は、転がり
そうになる花瓶を押えながら「随
分揺れたなあ」と呟いていた。
平成七年一月十七日午前五時四
十六分、私の当直明けのときでも
ない一日の始まりだった。電気は
消え、周囲の棚は倒れ、足元はザ
クザクと砂利の中を歩くような感
触だった。手探りで玄関まで行く
と、横の事務室の天井からザーザ
ーと水漏れの音がし、床が水浸し
になっている。ドアを押し開けて
中に入り、散乱したカルテを机の
上に積み、水濡れを防ぐのが精一
杯で、他は手が付けられない状態
だった。次に急いで病棟と連絡を
とろうとするが、電話は通じず、

エレベーターも動かない。四階病
棟までの階段をどうやって駆け上
ったか覚えていない。たどり着い
た四階で深夜勤者の「患者さんも
看護婦も、全員怪我はしていませ
ん。大丈夫です」と元気な声を聞
いた時、ほっとすると共に涙が溢
れそうになった。各病棟の患者さ
ん及び勤務者の無事を確認して、
一階外来に戻った六時過ぎには、
薄暗い待合室に二十人近い人々が
傷を負って、治療を待っていた。
明りが無い、水が出ない、暖房も
入らない中で治療を始めた。患者
さんも医師・看護婦も寒さとたた
かいながら、必死に消毒し、ガー
ゼを当てていく処置の繰り返し
の中で、縫合を必要とする人の創部
はお互いに家から持ってきた懐中
電灯で照らし合い、不思議な程、
静かに知らない人同士が助け合っ
ていた。

あの日からもう一年。病院の復
旧工事も十カ月余りですべて終わ
り、今、暖かな外来の診察室で元
気に仕事ができることを幸せだと
思うとともに、あの、水がない・
暖がとれない・検査・治療機器も
使えない長い苦難の日々を、時に
はくじけそうになりながら、お互
いに励まし合い、乗り越えること
ができた人の和の強さ、助け合う
心の暖かさを決って忘れてはな
らないと思っている。

明るくなるにつれ、周囲が見え
るようになった。所々盛り上った
床、崩れ落ちた壁、そのうえに点々
と血液が落ち、こびりつき、まる
で戦場の様相を呈していた。八時
近く自家発電で明りがつき、取る
ものも取りあえず出勤した医師・
看護婦で処置に当たる人が増えた

郵便局

震災当日も平常業務を行う

校区周辺には、比較的良好に利用する郵便局として朝霧郵便局、朝霧駅前郵便局、松が丘郵便局の三つがある。三局とも、被災したにもかかわらず、震災当日から、平常通り業務を行った。

なお、朝霧駅前郵便局は、現在仮局舎で営業し、平成八年五月初旬、新局舎に移る予定である。

特例

◆被災者宛救助用郵便物の

利用金免除
被災者宛救助用郵便物・小包
み郵便物・現金書留郵便物を下
記送付先に郵送する場合、郵便
利用金を免除する。

日本赤十字、中央共同募金会、
大阪府共同募金会、被災地域の
各地方自治体災害対策本部。

平成七年一月十八日から平成
七年三月十七日まで。

◆貯金貸付

適用利率預入時の適用利率十
0・25%。一預金者ごとに八百
万円を限度とする。

対象・平成七年一月十七日現
在災害救助法の適用地域に居住
していた者。

◆災害基本法が発令された場合

のみ、通帳や印鑑が無くても
出金ができる。

利用金免除

郵便局からお願い!

通帳、保険証書等の記号番号、
預入れ年月日、預入れ局等をメモ
書きして記録しておく、今回の
災害だけでなく、紛失した時の再
発行の手続きが素早くできます。
また印鑑と通帳は、別保管の方
が安全です。

心を伝える

明石朝霧駅前郵便局

橋本 義一

朝霧駅前郵便局は、瓦、ガラス
の割れ、天井、外壁などのヒビ割
れもありましたが、比較的被害も
軽く、震災当日から営業できたこ

震災後の状況 (対前年比)

	朝霧郵便局	朝霧駅前郵便局	松が丘郵便局	
利用状況 来客数				
1月	70%減	20%減	25%減	
2月	20%減	ほぼ同数	15%増	
3月	30%増	15%増	30%増	
救援用無料郵便物を 含む引受状況(小包)	1~3月	140%増	115%増	160%増
通常郵便物引受状況	1~3月	20%増	55%増	30%増
速達郵便物引受状況	1~3月	30%増	65%増	55%増
貯金預入状況	1~3月	35%増	ほぼ同数	15%減
貯金引き出し状況	1~3月	95%増	5%減	5%減
保険金払渡状況	1~3月	40%減	5%増	10%増

とは、大変ありがたいことでした。
しかし、神戸市周辺を中心とし
た郵便局は、三十局ほどが半壊以
上の被害を受けました。そんな中、
道なき道を走り、配達先を捜し求
め、大量の小包を配達できたこと、

通帳や証書がなくても、即時払い、即時貸付をしたことなどで、物やお金の他に、心の潤いを提供できたのではないかなと思っています。

郵便、貯金、保険いずれも、市民生活に密着したサービスを提供する国営事業として、ぬくもりを伝える“心を伝える”ということ、あらためて認識させられました。郵便局の仕事が大きな心のライフラインだと思つて、今後も頑張っていきたいと思っています。

この仕事誇り

明石朝霧郵便局

室田 次範

平成七年一月十七日午前六時二十分。朝霧郵便局に到着してみると、屋根瓦の約三分の一は崩れ落ち、局内部の衝立が倒れ、ガラスが割れ粉々に散らばり、書類ケースは散乱していました。幸い、コンピュータ端末とATM現金自動預払機等には、目立った損傷はありませんでしたが、停電によりこれらの機械類は、すべて使用出来なくなっていました。電話回線は奇跡的に通じていたため、近隣の

郵便局と連絡をとり、今後の対応等について協議し、ともかくお客様に不安を与えないためにも、郵便局を開かなければならないと判断し、行動に移していきました。

まず、郵政省の災害規定を読みなおし、停電及び、災害時に、金銭機を使用しての手動での入出金の方法を確認し、災害基本法が発令された場合の、通帳や印鑑が無くても、出金の出来る特例等を確認していきました。

午前七時五十分、職員が二名、何とか出勤して来ましたので、人員面でも開局の目的を立てることが出来ました。

午前九時、いつもと同じ時刻に開局、しかし大地震の直後のため、午前十時三十分までの間お客様は一名という寂しさでした。

午前十一時三十分、停電が復旧し、コンピュータ端末及び、ATMが回復し、無事使用出来るようになりました。

こうして震災当日の業務を何とか終了することが出来ましたが、来局人数は一月としては極端に少ない四十九名でした。しかし、あなた様により「こんな時に郵便局はよく開けていてくれた、銀行

は閉まっている。」という言葉をかけていたのだいた時などはとても嬉しく、またこの仕事を誇りに思う事ができました。

停電中は手作業

松が丘郵便局長

火口 恒之

建物は半壊となり、入口ドア、

窓ガラス等、ガラス全体に亀裂が入り、応急措置で対処した。又、停電が三日程続き、手作業で、通帳、印鑑を紛失された方にも非常取扱いを行った。

職員は八名のうち三名が徒歩や自転車時間をかけて出勤し、十九日には五名になり、全員が出揃ったのは二週間後であった。水もまた一カ月余り出ない状態での業務であった。(談)

銀行

その週は土・日も営業

二月から手形交換も

神戸信用金庫

一月十七日、震災当日は休業。

翌日からは、平常で九時から三時まで営業した。中央区にある本店ではATMが作動せず、対面の対応しきれなかった。手形、送金は、次の週の月曜日から正常にもどった。しかし、現金による送金を受けることは一カ月くらいできなかった。二月から手形の交換もできるようになった。印鑑、キャッシュカード、通帳のない方もあったが、大きなトラブルもなく、業務できたし、当日一日休んだだけで、その週の土曜、日曜も営業した。キャッシュカードをなくされた方も、手数料を取らずに、再発行した。社員も、西からの人が多かったので休むこともなく、対応できた。お客様の数は一月は三割減、二月は二割減、三月はおおむね、平常にもどった。思ったほどお金を引き出す人はいなかった。逆に、銀行全体として、預金が増えたことを聞き、おどろいたが、地方からの見舞金、その他など、

当初は通帳残高が増えたが、現在は減少している。三月ごろから正常な状態にもどっている。(談)

お客様が冷静で

混乱もなく

なにわ銀行

店長の家が近かったので、早く出勤して、対処できた。スチールの棚も、アメのようになり、書庫は散乱して、階段も斜めになっていたが、建て物のいたみはそれほどでもなかった。しかし、機械関係が、全部だめだったので、三、四日は仕事にならなかった。本社が大阪なので、コンピュータ関係は早く回復した。当日、行員の一人の家は、全壊したため欠勤、その他は、全部出社して来てかたづけた。二日目からは、お客様の安否を気遣いながら営業した。幸い、銀行の外の水が出たので近所の方に使っていただけで、大変良かったと思っっている。最初は来店のお客様にどう対処しようか、現金の確保はなどと考えていたが、お客様の方が冷静で、混乱もなく、

本当に良かった。大阪の本社へ運ぶ書類を一日がかりで、福知山線

をつかうなど、交通機関の面で大変だった。(談)

スーパーマーケット

11時から店頭販売

コープ大蔵谷

中川 康徳



売切れ品はすべてめぼしい品はすべて売切れ=コープ大蔵谷

店舗の被害状況を聞きすぐ車で出勤。北須磨からの交通状況は地震の影響などを感じさせないまま三十分ほどで店に到着した。建物の中から煙のような物が出ていて驚いたが、停電で「自家発電機」の自動運転が煙の原因だったので、すぐ発電機を停止させ店内に向かった。あたりは薄暗く商品が散乱しており、足の踏み場がなかった。空調の送風口が落下、スプリンクラーのノズルが天井から突き出ており、風除室の玄関側のガラスが破損、自動ドアも振動でずれており男子職員何人かで修正したが、元には戻らなかった。限なく被害の箇所を写真に収めた。職員も交通機関の寸断で僅かであったが、全員で散乱しているガラス片や商品の片付けを開始した。十時近く

になって店舗の外では組合員さんの姿が見え始めたが今の状況では開店することができないので、組合員さんにお知らせをした。しかし、時間がたつにつれて店舗の周りには長い人の列ができていた。店長と相談をし十一時から店頭で販売することにし、急いで準備をした。水、カップラーメン、パン、玉子、ウーロン茶など必要な物資の供給に職員全員で全力投入した。物資は瞬く間に完売となった。残念ながら並ばれていた組合員さん全員には行き渡らなかった。時間はすでに十二時を過ぎていた。漸く女子職員の人数も揃ってきて、レジを何台か開けられるまでにな

ったので、午後一時頃開店。数日は開店時間を遅らせた。全国の生協の仲間の支援を受けて何とか物資の供給を続けることができたが、今まで扱ったことがない商品ばかりなので、価格の間違いなどで一部の組合員さんには迷惑をお掛けした。コープ大蔵谷では生活環境を考慮した料理メニューの提供を考え、各部門のチーフたちがすぐに食卓に出せる物をそれぞれに工夫し商品化、メニューを変えながらこの供給活動を続けた。大蔵谷地区のガス、水道の復旧にはかなりの時間がかかったが、幸いコープでは水道の復旧は早くポリ袋に入れて自由にお持ち帰りいただいた。コープとしても何とか「私たちにできること」を考え生活物資や食料品を中心に、二ヶ所の仮設住宅と、被害の大きかった長田の仮設住宅に被害の後を片付ける段階の生活が戻ってきたが日常のお買い物から、この大蔵谷地域の組合員さんの生活環境が変化し、モノに対する考え方も大きく変わってきて、全てに節約志向になり、価値観も変わってきたことがよくみえてきている。

近隣の商店など

美容院

○二月一日から営業したが、ガスが不通のため洗髪用の湯沸かしに大わらわだった。

○一カ月ほど休業、店舗は比較的早く修理してもらえた。

○プロパンガスのお陰で水が出る
と同時に普段通りの状態で営業できた。

酒店

○商品がたくさん転倒してビンが割れて酒、洋酒、調味料、油等が混じって流出、悪臭と後始末に困った。(数店同じような状況だった)

ガソリンスタンド

○ガソリンの販売状況。神戸方面からの客が七割増、品不足で限定販売した。商品の入荷は二月上旬位までに通常に戻った。困

ったことは道路の破損がひどく車の出入りに迷惑をかけた。

○当日は平常通り営業を始めたが、(出光石油)

出勤できない従業員が多く午前中で一時閉店、午後再開。給油車が到着しない中、緊急車両の求めに応じられるように警察から指示があり、備蓄も少なくなりやむなく量を二十リットルに制限した。翌日、岡山から給油車が

到着、垂水、須磨のG・Sが閉鎖のため車の列ができた。困ったことは、洗車、窓ふき等の要望に応えられない。断水の水洗トイレ用に朝霧川から水を汲んだこと等。(関西ヒカワ石油、ハートピア朝霧)

朝霧地区の防災は

防災公園



朝霧公園(地域防災公園)整備イメージパース



④朝霧公園(地域防災公園)整備イメージパース

⑤防災公園の工事中

朝霧公園備蓄倉庫(二二八^m)と耐震性貯水槽が設置工事中。倉庫の中には、緊急災害時にすぐに必要と思われるもの(食糧、シート、毛布、スコップなど)を順次入れていく予定。耐震性貯水槽は地下に埋設し、普段は水道管とつながっており、緊急時には弁が閉じて貯水槽内の水を汲み出す。防火用水のほか、常に新しい水が流れているので飲料水としても使え、容量は百^t。市民一万人が三日間使用できる水量。平成八年五月頃に完成予定。また朝霧町三丁目のポプラ公園には地下貯水槽を設置の予定。

近隣の商店など

美容院

○二月一日から営業したが、ガスが不通のため洗髪用の湯沸かしに大わらわだった。

○一カ月ほど休業、店舗は比較的早く修理してもらえた。

○プロパンガスのお陰で水が出る
と同時に普段通りの状態で営業できた。

酒店

○商品がたくさん転倒してビンが割れて酒、洋酒、調味料、油等が混じって流出、悪臭と後始末に困った。(数店同じような状況だった)

ガソリンスタンド

○ガソリンの販売状況。神戸方面からの客が七割増、品不足で限定販売した。商品の入荷は二月上旬位までに通常に戻った。困

ったことは道路の破損がひどく車の出入りに迷惑をかけた。

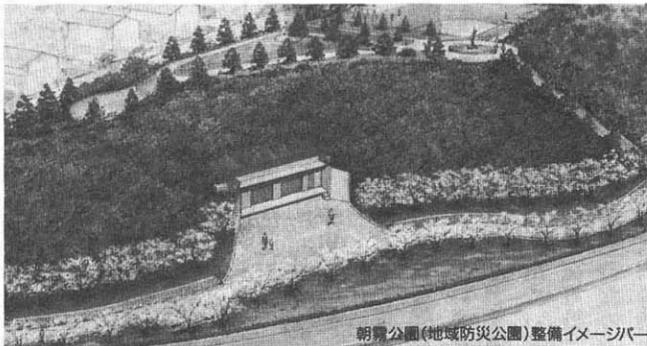
○当日は平常通り営業を始めたが、(出光石油)

出勤できない従業員が多く午前中で一時閉店、午後再開。給油車が到着しない中、緊急車両の求めに応じられるように警察から指示があり、備蓄も少なくなりやむなく量を二十リットルに制限した。翌日、岡山から給油車が

到着、垂水、須磨のG・Sが閉鎖のため車の列ができた。困ったことは、洗車、窓ふき等の要望に応えられない。断水の水洗トイレ用に朝霧川から水を汲んだこと等。(関西ヒカワ石油、ハートピア朝霧)

朝霧地区の防災は

防災公園



朝霧公園(地域防災公園)整備イメージパース



④朝霧公園(地域防災公園)整備イメージパース

⑤防災公園の工事中

朝霧公園備蓄倉庫(二二八㎡)と耐震性貯水槽が設置工事中。倉庫の中には、緊急災害時にすぐに必要と思われるもの(食糧、シート、毛布、スコップなど)を順次入れていく予定。耐震性貯水槽は地下に埋設し、普段は水道管とつながっており、緊急時には弁が閉じて貯水槽内の水を汲み出す。防火用水のほか、常に新しい水が流れているので飲料水としても使え、容量は百ℓ。市民一万人が三日間使用できる水量。平成八年五月頃に完成予定。また朝霧町三丁目のポプラ公園には地下貯水槽を設置の予定。

震度計



やっと地震後に備えられた震度計
 明石市提供

防災無線

平成八年四月から運用開始
 ・屋外拡声子局……朝霧中学校
 ・戸別受信機……朝霧コミセン、朝霧小学校コミセン、朝霧北コミセン、朝霧小、松が丘南小、朝霧中、松が丘小
 防災行政無線は、緊急時に、交
 通や通信網が寸断された時に有効
 な広報手段となる。

★まとめておきたい連絡先（電話番号）の一例

- ・両親、親類、友人宅
- ・勤務先、子供の学校、クラス・PTAの連絡網
- ・自治会の役員、管理組合の理事、管理会社など
- ・最寄りの水道局、ガス取扱店、電気の営業所
- ・主治医や近所の医療施設を何軒か
- ・銀行、郵便局、保険会社などの金融機関
- ・最寄りの交通機関、道路情報の問い合わせ先
- ・車の故障（JAF、販売店など）

わが家の防災マニュアル

もし再び大震災が起こったら：被災された皆さんの
 体験談を参考に「防災」についてまとめてみた。

- 大災害があつたら三日間は自力で！
- 家族全員が共通の防災意識を持つ。
- 普段から家族で決めておきたい「集合場所」。
 あの大震災が昼間だったら：お父さんは会社、子供
 達は学校と、家族はバラバラの状態が考えられる。
- 「連絡方法」
 連絡先のリスト電話番号を控えておく。

○防災袋

防災袋は定期的に点検を、家族みんなで中身も確認
 する。

大切なのは地域住民の防災意識と連帯感、そして個
 人個人の普段の心がけにつきると思われる。一備えあ
 ればうれいなし！

★1次持ち出し品

非常食品	食品は缶詰め、カンパンなど火を通さずに食べられるもの。水はペットボトルや缶に入った保存のきくもの
衣類	上着・下着、タオルなど。ケガ防止になるので、夏でも上着は長そでを入れておく。赤ちゃんのいる人はオムツも
応急医薬品	ケガをしたときのための外部薬（消毒液、ガーゼ、ばんそうこうなど）を。常備薬なども入れておく
トランジスタラジオ	デマなどに迷わされず、正確な情報を得るため必携。予備の電池も
懐中電灯	足元を照らすためなどに、1人1個は必要。予備の電池は多めにストック
貴重品	現金（10円玉も）、印鑑、預貯金通帳、健康保険証、免許証、権利証書、証券など

★2次持ち出し品

食品	米（缶詰めやレトルトのごはん、水でもどせるアルファ米も便利）。インスタントラーメンやおかしなど、しこう的なものを中心に
水	1人1日3ℓを目安に。ポリタンクなどにストックしておく。飲料水は飲む前に必ず沸騰を
燃料	カセットコンロ。予備の燃料を忘れずに
お年寄りや乳幼児用食品	粉ミルクや離乳食、流動食やおかゆなど必要な家族は忘れずに

朝霧校区女性の会の活動

(震災関連のみ)

三小学校からなる朝霧中学校区に、当初四カ所の避難所があり、一、四〇〇人余りの避難者があった。その中学校区の中に一つしかない女性の会は、日本赤十字社明石支部朝霧分団としての使命もあり、さっそく活動を始めた。

しかし、役員・理事全員が被災しており、そのうえ神戸方面からの被災者を受け入れている者が多かったため、電話の混乱の中でようやく連絡がついても、思うように活動できる状態ではなく、炊き出しや配食、その他のボランティア活動は、少数の者に集中する結果となった。二、三日するうちに避難者の中に自立の気運が見られるようになり、配食の面では大きく助けられた。炊き出しは、当校区ではライフラインが断

たれて調理ができず、明石市災害対策本部、連合女性の会の被害の軽かった校区のお世話になることが多かった。

多数の人がボランティア活動希望しながら実行にまで結びつかなかったようである。

その理由として①明石の被害についての報道が少なく、避難者があり避難所ができていことさえ知らなかった②女性の会に入っていないので、動員の声がかからなかった③何が必要とされ、誰に、

どこに申し出たらよいのかわからなかった―等の声があった。多くの人の善意をいかしきれなかったことは大変悔まれる。なお、個人的に入浴サービスや送迎、高齢者のお世話、水汲みの手伝いなどをしていた人もあった。



女性の会の炊き出し

連合女性の会炊き出し活動報告

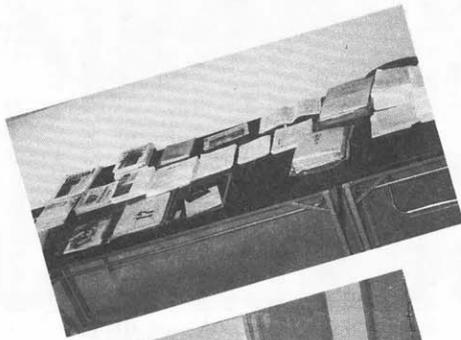
期	間	H7.1.21~4.7
日	数	21日
場	所	市内全避難所 (20箇所)
延べ	箇所数	126箇所
延べ	食数	6,200食
		(朝食150、昼食760、夕食5,290)
献	立	実だくさん汁、すき焼風煮、シチュー、マカロニサラダ、てんぷら、スープ、きんぴら、大根煮付 など

的、物的な応援があり、校区に住む者として大変うれしく、心強く感謝の念で一杯である。

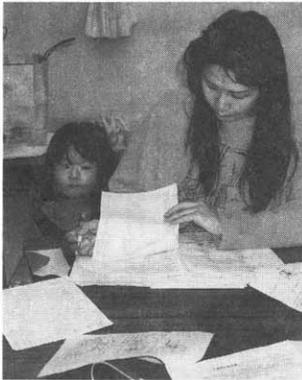
また平成七年度の日赤社資募集に関しても、校区内の多くの人が義援金として受け取ることになつたことへの感謝の証しか、被災して初めて身近に感じ、その意義が理解できたこともあつて、前年の約五割増しの募金があつたこと、今後の復旧、復興に向けてのご苦労を思い、心痛ませながら頂戴したことも、合わせて記しておきたい。

震災関連の活動記録から

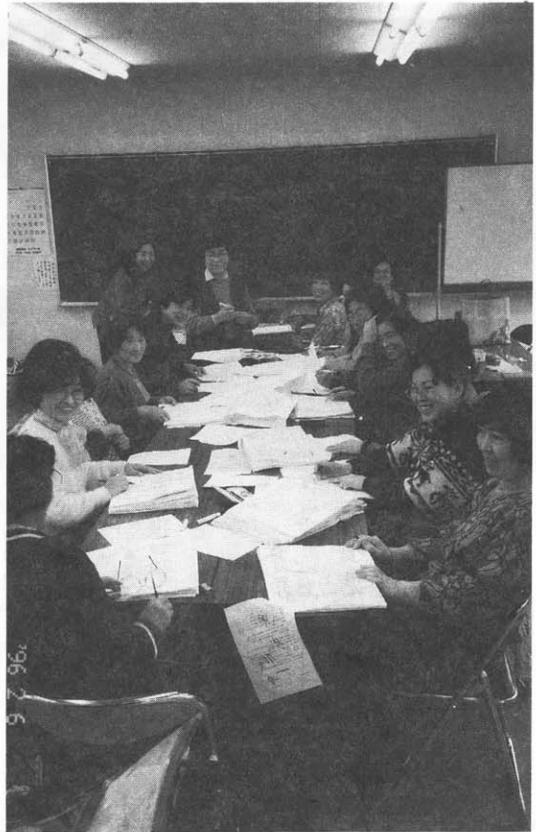
- 1・17(火) 兵庫県南部地震発生。
- 役員宅の被災状況を点検。
- 1・19(木) 四避難所をめぐり実状把握。朝中、朝小で約千人、松小約三百人、松南小約百人。明石市社会福祉協議会へ校区女性の会としてボランティア活動を申し出る。
- 1・20(金) 救援物資として衣料品(赤松様寄贈分)食料品(塩屋在住の外国人女性より寄贈分)を朝小(避)へ届ける。
- 1・21(土) 山手町支部活動中止
- 1・22(日) 明石市連合女性の会の炊き出しが始まる。



集まった資料、アンケートなど



子どもさんも連れて



アンケート集計中の女性の会の記録誌作成実行委員たち
＝朝霧小コミセンで

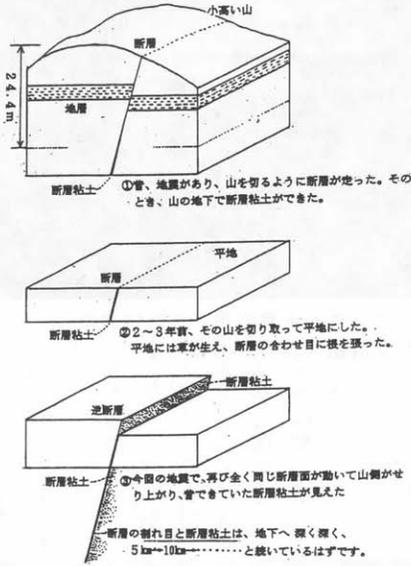


女性の会と朝霧校区連合自治・町内会との懇談会。この席で震災記録誌への協力を依頼した。＝朝霧連合会館で

野島断層を見学



長島の逆断層と断層粘土



冊子作成に当り十一月十七日我々有志十四名が野島断層を見学に行った。断層部はすでにシートで保護されていて、生々しい所はあまり見られなかったが、一部道路で断層面が現れていた。

- 1・24(火) 市連炊き出し打ち切り後の、校区での炊き出しを考え、その食材確保をはかるため市災害対策本部に連絡し、救援物資の中の食材提供の確約を得る。
- 1・26(木) 市連、日赤奉仕団として神戸へ。朝霧から二人参加。
- 1・27(金) 市連理事会(炊き出しについて)
- 1・28(土) 要援護家庭訪問。保健婦二人と女性の会からの四人が三人ずつ二班に分かれて要援護家庭(高齢者、独居家庭など)を訪問し、後片付けを手伝う。
- 2・1(木) 朝小避難所へ(トラブルについてTELあり)
- 2・2(木) 校区住民の避難先・避難者数を調べる。朝小・朝霧北コミセン・朝霧コミセン・松が丘小・大蔵中(武友館)・大蔵会館・人丸小コミセン。
- 市広報広聴課へ避難者数の推移を調べる(広報紙発行のため)
- 2・3(金) 市・各避難所・人丸小
- 大蔵中へ(校区の避難者状況の調査のため)
- 2・6(月) 市連理事会
- 2・8(木) 朝小へ広報紙(号外)印刷を依頼、五百部(表裏)二月七日付。朝霧町三丁目支部活動(施設廻り)中止。義援金を市連へ
- 2・9(木) 広報紙「あさぎり」号外五百部発行。校区理事会
- 2・26(日) 望海コミセンへ食材を取りに行く。
- 3・4(土) 明石市犠牲者慰霊祭
- 3・16(木) 校区理事会
- 3・17(金) 炊き出し終了を避難所に連絡、保温器、鍋を引き上げる。
- 3・24(金) 避難所閉鎖。延長コードリールを引き上げる。
- 8・20(日) 校区夏まつり復興祭(バザー担当)
- 10・3(火) 県連よりの復興資金活用について理事会、震災体験手記記録誌作成と決定。
- 10・24(火) 連合自治・町内会長会と理事会との懇談会で協力依頼。
- 10・26(木) 校区全域に資料提供依頼の回覧。
- 10・30(月) 記録誌作成実行委員会発足
- 10・31(火) 仮設(明石公園・上ヶ池公園・JR西明石・母子寮跡地・高丘七丁目・高丘三丁目・刑務所跡地・八木財産区)に原稿依頼の案内掲示。
- 11・5(日) バザー
- 11・8(木) アンケート検討委員会。仮設(朝霧公園・中崎グラウンド・中崎公園・川崎公園等)原稿依頼掲示。
- 11・17(金) 野島断層見学(北淡町役場の職員の方に資料提供を受ける)
- 12・12(火) 実行委員会、役割分担



女性の会のバザー＝朝小コミセンで

(記録の部の担当、体験手記の依頼等)

H 8

1・17(木) 「寄せられた善意に感謝し復興を誓う市民の集い」の席上、感謝楯を頂く。

1・20(土) アンケート三、六六八世帯に各自治・町内会の協力を得て配布。

1・27(土) 第一回研修会(編集について) 講師 神戸新聞社明石絵局長 谷口秀雄氏

1・31(水) アンケート回収、総数二、三二三枚。転居先不明多し。集計作業に入る。

3・28(木) 第二回研修会、講師

同氏 発行予定 平成八年吉日

震災直後より市内、市外(他府県)のさまざまな団体から救援、炊き出しがあり、二月は給食調理員による給、配食のサービス、三月の昼夜食は弁当になった。

炊き出し(各支部、個人)

2・18 朝霧台 カレーシチュー
2・19 朝霧町三丁目

中華風スープ

2・25 清水 わかめ漬汁

2・26 山手町 焼肉

3・5 東朝霧丘 みそ汁

3・8 中朝霧丘 豚汁

3・9 高橋 みそ汁、お浸し

3・11 岡田 粕汁

3・15 関谷 豚汁

3・17 井上 豚汁

炊き出し延べ人数八八名(記録のみ)

炊き出しボランティア活動参加者

「朝霧町三丁目」阿部悦子、椋皮

梅子、中塚千代子、今市順子 「朝霧台」岡田一文、今市千里、水野

聰子 「朝霧山手町」柏木怜子(母娘)

林田幸子、大西いく子、小池

和恵、菅小夜子(母娘) 「中朝霧

丘」門田博子、岡崎美子 「東朝霧丘」山下麗子、辻本博子(母娘) 松村照子(母娘) 中村富子、三井田志保 「朝霧北町」井上雅子、関谷(母娘) 「大蔵谷奥」堂本艶子 「大蔵谷清水」柏木真弓、西川信子、佐藤寿子、高橋花子、二星美知子、長谷川久美子(母娘) 藤本美枝子、牛尾かよ子 「松が丘二丁目」樋口美佐子、その他市

連より松本会長以下五、六名、女性団体連絡会より三名の応援があった。以上の人達は、全壊から一部損壊の被害をうけた中、それぞれが都合をつけて一生懸命に活動された。なお、お手伝いいただきながらお名前の記録漏れがあるかもわかりませんが、繁忙に取りまされ不行届な点お許しく下さいますようお願い致します。

あそぞり 平成7年 2月7日

個人で被災の苦しみをおしよげますと共に一日も早く復旧されますよう
心から祈り申し上げます。

ご存じでしょうか?

- ◆ 明石市にも大きな被害
 - 死者 11名(市内で5名)
 - 負傷者 72名
 - 家屋倒壊 全壊 130(朝霧地区内 12家等6棟)
半壊 405(朝霧地区内 35家等24棟)
- ◆ 避難者数 避難者ごらんください。
避難所では不足しているもの
 - 衣類 毛織、防寒靴
 - 日用品 ティッシュ、ペーパー、トイレト、ペーパー
 - 食料品 調味料、塩、油(調味料)、缶詰(調味料)
- ◆ 日本赤十字会の一次配分(調査の上配分)
 - 成人 2人、小児 1人につき10万円
 - 全半壊、全半壊した住宅1世帯につき10万円
 - ※ 日本赤十字社兵庫震災復興明石分地区では、今後、調査の上、支給

お問い合わせ 朝霧台・支店(079-14-0933)

11月27日	朝霧小	朝霧丘小	朝霧南小	朝霧中
係入	9	6	2	5
係出	24	41	13	6

朝霧台に
係入
係出

兵庫県南部地震について

アンケート

朝霧校区女性の会

アンケート集計表		(配布枚数)		3668		回収率 (%)		63.1					
20代		30代		40代		50代		60代		70代		不明	合計
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
18	72	49	277	70	528	85	500	103	330	80	172	29	2313

調査の対象 朝霧小学校校区全域

調査期間 平成8年1月17日～3月3日

調査結果の数値について

1) 比率は、百分比で示し、小数点以下第2位を四捨五入して算出した。したがって、百分比の合計が100%にならない場合がある。

2) 設問で選択肢を1つ選ぶ場合の% = $\frac{\text{選択肢の回答数}}{\text{総回答数}} \times 100$

3) 設問で複数回答の場合の% = $\frac{\text{選択肢の回答数}}{\text{その設問の回答者総数}} \times 100$

4) ことばによる回答は上位5つとする。

兵庫県南部地震についてのアンケート 平成8年1月17日
朝霧校区女性の会

未曾有の大震災からちょうど一年、校区の皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。このたびは朝霧校区女性の会では震災の記念誌を発行することになりました。皆様方のその時の様子やアンケートにお答えいただくことで、震災の記録の一冊をとどめるとともに、今後地域振興を進めようとしても何らかの資料とさせて頂きたいと思っております。ご回答・ご意見をお聞かせくださいますようお願いのほどよろしくお願い申し上げます。

ご回答についてお願い

主場または主催者の方をお客ください
質問ごとに当てはまる番号を所定の位置にご記入ください
ご記入頂きましたら、封筒の封筒に入れ密封してください
氏名・住所名を書いていただく必要はありません
ご回答いただいた内容についての秘密は守ります
2月10日土曜日に朝霧校区役員さんにお渡しください

1. 平成7年1月17日午前5時46分、地震発生直後、あなたは何をしていましたか。

1. 寝ていた	4. 出勤途中
2. 朝食の支度をしていた	5. その他()
3. 朝食中	

2. 地震発生直後、とっさにあなたは何をしましたか。

1. テーブルなどの下にもぐった	4. 家族を守った
2. 外に飛び出した	5. じっとしていた
3. 火の結末をした	6. その他()

3. 地震の揺れが収まった後、何をしましたか。3つ選んでください。

1. 家族の安否を確認した	5. 家族や家の状態を親戚等に連絡した
2. 家の状態を調べた	6. 即、避難した
3. 近所の状態を調べた	7. 明るくなるまで待っていた
4. テレビ・ラジオで情報を聞いた	8. その他()

4. 地震当時お住いの家屋・宅地についてお聞かせください。

- ・お住い 1. 持家 2. 賃貸住宅
- ・建築形式 1. 木造 2. 鉄骨コンクリート 3. プレハブ 4. その他
- ・築年数 1. 1年未満 3. 5～10年未満 5. 20～30年未満
- 2. 1～5年未満 4. 10～20年未満 6. 30年以上
- ・家屋の被害 1. 全壊 2. 半壊 3. 一部倒壊 4. 被害はなかった
- ・宅地の被害 1. 石積斜面の崩落亀裂 2. 地盤沈下 3. 地割れ 4. 被害はなかった

5. 被災証明書を行っていることをどの方法で知りましたか。

1. テレビ	4. 近所の人や知人など
2. ラジオ	5. その他()
3. 新聞	

6. 被害があったけれど、被災証明書を取らなかった方にお聞かせください。それはなぜですか。

1. 被害が少なかった	4. 役に立たないと思った
2. 被害に行くのが面倒だった	5. 発行していることを知らなかった
3. 必要がなかった	6. その他()

7. 地震による被害で、家屋の修理を要した方のみにお聞かせください。現在の家屋の修理状況で該当するものはどれですか。

1. 修理完了	3. 手付かず	5. 新築及びその予定
2. 修理途中	4. 修理予定	6. その他()

8. 家屋修理や新築等に要した費用(予定の方は見積り額)はどのくらいですか。

万円

9. 避難所についてお聞かせください。近くの避難所をご存知でしたか。

1. 知っていた	2. 知らなかった
----------	-----------

10. 避難所に避難された方にお聞かせください。どの避難所に行かれましたか。

1. 朝霧小学校	3. 松が丘小学校	5. 大塚中学校
2. 松が丘小学校	4. 朝霧中学校	6. その他()

11. 避難期間はどのくらいでしたか。

1. 当日のみ	4. 約2週間	7. 約2ヶ月
2. 2～3日	5. 約3週間	8. 3ヶ月以上
3. 約1週間	6. 約1ヶ月	

12. なぜ避難することになりましたか。

1. 避難勧告が出たから	6. ガス漏れで危険だと思ったから
2. 家が使用不能になったから	7. ガスが使えなかったから
3. 家屋が安全かどうか分からなかったから	8. 断水していたから
4. 余震が恐かったから	9. その他()
5. 隣壁が崩れそうだったから	

13. 避難所で困ったことや、うれしかったことがあれば具体的にお願いします。

14. 避難所を退所後、家はどのようにされていますか。

1. 自宅に帰った	3. 家を購入した
2. 家を新築した	4. その他()

15. 地震のときにあなたのご家族でケガをされた方がいますか。

1. いる	2. いない
-------	--------

1. 平成7年1月17日午前5時46分、地震発生の時、あなたは何をしていましたか。

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 寝ていた | 4. 出勤途中 |
| 2. 朝食の支度をしていた | 5. その他 () |
| 3. 朝食中 | |

問 1					年齢別回答者数													
総回答者数 (2262)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	338	1534	1872	82.8	14	61	45	251	59	431	62	359	84	277	74	136	19	
-2	22	169	191	8.4	0	3	2	54	4	54	8	58	6	26	2	18	2	
-3	7	22	29	1.3	1	2	0	0	2	4	4	9	0	5	0	2	0	
-4	3	8	11	0.5	1	2	0	1	0	1	1	2	1	1	0	1	0	
-5	33	126	159	7.0	2	3	2	16	7	36	9	39	10	20	3	12	0	

2. 地震発生の直後、とっさにあなたは何をしましたか。

- | | |
|------------------|------------|
| 1. テーブルなどの下にもぐった | 4. 家族を守った |
| 2. 外に飛び出した | 5. じっとしていた |
| 3. 火の始末をした | 6. その他 () |

問 2					年齢別回答者数													
総回答者数 (2275)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	11	103	114	5.0	0	4	1	7	2	31	1	27	2	15	5	18	1	
-2	34	132	166	7.3	0	9	4	30	1	30	7	37	11	29	11	19	0	
-3	22	133	155	6.8	2	2	0	8	3	32	8	47	4	28	5	14	2	
-4	71	327	398	17.5	5	21	14	124	24	88	15	50	6	31	7	9	4	
-5	219	1030	1249	54.9	9	30	25	113	32	297	42	295	68	198	43	86	11	
-6	35	158	193	8.5	2	5	4	15	0	42	8	36	13	38	8	21	1	

3. 地震の揺れが収まった後、何をしましたか。3つ選んで下さい。

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1. 家族の安否を確かめた | 5. 家族や家の状態を親戚等に連絡した |
| 2. 家の状態を調べた | 6. 即、避難した |
| 3. 近所の状態を調べた | 7. 明るくなるまで待っていた |
| 4. テレビ・ラジオで情報を聞いた | 8. その他 () |

問 3					年齢別回答者数													
総回答者数 (6465)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	283	1307	1590	24.6	11	52	33	194	52	433	70	357	71	178	46	81	12	
-2	243	1018	1261	19.5	6	30	20	273	34	273	52	289	74	185	57	92	14	
-3	146	545	691	10.7	8	26	24	82	22	149	27	143	40	92	25	49	4	
-4	217	1088	1305	20.2	11	33	25	150	43	312	45	287	52	203	41	94	9	
-5	60	398	458	7.1	10	23	12	68	11	117	13	105	7	57	7	26	2	
-6	44	170	214	3.3	1	10	9	39	9	45	9	38	11	26	5	11	1	
-7	135	677	812	12.6	2	21	13	108	24	179	28	152	29	130	39	77	10	
-8	23	111	134	2.1	2	4	2	26	4	21	4	19	6	25	5	14	2	

4. 地震当時お住いの家屋・宅地についてお伺いします。

- ・お住い
 - 1. 持家
 - 2. 賃貸住宅
- ・建築様式
 - 1. 木造
 - 2. 鉄筋コンクリート
 - 3. プレハブ
 - 4. その他
- ・築年数
 - 1. 1年未満
 - 2. 1～5年未満
 - 3. 5～10年未満
 - 4. 10～20年未満
 - 5. 20～30年未満
 - 6. 30年以上
- ・家屋の被害
 - 1. 全壊
 - 2. 半壊
 - 3. 一部損傷
 - 4. 被害はなかった
- ・宅地の被害
 - 1. 石積斜面の崩落亀裂
 - 2. 地盤沈下
 - 3. 地割れ
 - 4. 被害はなかった

アンケート番号 4												
設問		回答数	%	設問		回答数	%	設問		回答数	%	
お住い	1	1901	83.7	築年数	1	63	2.8	家屋の被害	1	262	11.4	
	2	370	16.3		2	109	4.8		2	689	30.0	
回答総数					回答総数	3	350	15.5	回答総数	3	1108	48.3
	2271					4	819	36.2		4	237	10.3
建築様式	1	1493	67.3			5	718	31.7	宅地の被害	1	341	16.0
	2	482	21.7			6	203	9.0		2	488	22.9
回答総数	3	179	8.1					回答総数	3	599	28.1	
	2218								4	707	33.1	
	4	64	2.9									

5. 被災証明書を発行していることをどの方法で知りましたか。

- 1. テレビ
- 2. ラジオ
- 3. 新聞
- 4. 近所の人や知人など
- 5. その他 ()

問 5				年齢別回答者数												
総回答者数 (2186)				20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明
	男	女	計 %	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
-1	105	534	639 29.2	7	27	20	99	20	160	23	111	22	88	13	41	8
-2	19	84	103 4.7	0	2	1	20	6	20	5	30	3	17	4	10	2
-3	95	421	516 23.6	2	5	6	64	12	113	28	135	23	69	24	31	4
-4	125	680	805 36.8	7	29	16	87	22	189	21	176	37	131	22	64	4
-5	28	95	123 5.6	2	4	4	7	4	23	5	21	10	25	3	15	0
-6	0	0	0 0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

6. 被害があったけれど、被災証明書を取らなかった方にお伺いします。それはなぜですか。

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1. 被害が少なかった | 4. 役に立たないと思った |
| 2. 届けに行くのが面倒だった | 5. 発行していることを知らなかった |
| 3. 必要がなかった | 6. その他 () |

問 6					年齢別回答者数												
総回答者数 (336)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
-1	44	168	212	63.1	0	11	6	32	8	29	9	36	8	27	10	19	14
-2	0	14	14	4.2	0	0	0	2	0	2	0	4	0	1	0	3	0
-3	6	33	39	11.6	1	1	1	7	1	6	0	9	0	5	2	3	2
-4	7	37	44	13.1	0	1	3	3	2	8	0	4	1	8	0	9	4
-5	4	7	11	3.3	0	1	1	0	0	0	2	0	1	3	0	2	1
-6	6	10	16	4.8	0	0	1	1	1	4	1	1	2	1	0	3	0

7. 地震による被害で、家屋の修理を要した方のみにお伺いします。現在の家屋の修理状況で該当するものはどれですか。

- | | |
|---------|-------------|
| 1. 修理完了 | 4. 修理予定 |
| 2. 修理途中 | 5. 新築及びその予定 |
| 3. 手付かず | 6. その他 () |

問 7	回答者総数 1765					
	1	2	3	4	5	6
回答者数	639	610	116	245	76	79
%	36.2	34.6	6.6	13.9	4.3	4.5

8. 家屋修理や新築等に要した費用（予定の方は見積り額で）はどのくらいですか。

_____万円

問 8	回答者総数 1325									
費用 万円	100以下	100-200	200-300	300-400	400-500	500-600	600-700	700-1000	1000-2000	2000以上
回答者数	386	266	209	99	107	37	43	81	40	57
%	29.1	20.1	15.8	7.5	8.1	2.8	3.2	6.1	3.0	4.3

9. 避難所についてお伺いします。近くの避難所をご存知でしたか。

1. 知っていた
2. 知らなかった

問 9					年齢別回答者数													
総回答者数 (2063)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
設問	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	212	1130	1342	65.1	11	37	19	183	38	378	51	283	57	176	36	70	3	
-2	163	558	721	34.9	5	26	28	116	22	116	28	141	43	132	37	79	11	

10. 避難所に避難された方にお伺いします。どこの避難所に行かれましたか。

1. 朝霧小学校
2. 松が丘小学校
3. 松が丘南小学校
4. 朝霧中学校
5. 大蔵中学校
6. その他 (

問 10					年齢別回答者数													
総回答者数 (293)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	29	81	110	37.5	1	6	4	5	8	31	7	19	4	10	5	9	1	
-2	1	3	4	1.4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
-3	0	1	1	0.3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
-4	3	9	12	4.1	0	0	0	3	1	0	2	3	0	3	0	0	0	
-5	1	18	19	6.5	0	0	0	7	1	6	0	1	0	2	0	1	1	
-6	27	120	147	50.2	1	6	4	20	2	22	7	28	8	27	5	16	1	

11. 避難期間はどのくらいでしたか。

1. 当日のみ
2. 2～3日
3. 約1週間
4. 約2週間
5. 約3週間
6. 約1ヶ月
7. 約2ヶ月
8. 3ヶ月以上

問 11					年齢別回答者数													
総回答者数 (305)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	15	51	66	21.6	2	3	0	8	5	16	3	15	3	3	2	4	2	
-2	10	44	54	17.7	0	2	4	18	1	18	1	7	2	7	2	4	0	
-3	14	34	48	15.7	0	1	1	8	4	12	3	8	5	4	1	1	0	
-4	7	33	40	13.1	0	0	1	4	1	6	2	6	1	11	2	6	0	
-5	6	15	21	6.9	1	0	2	3	0	4	2	2	1	5	0	1	0	
-6	4	29	33	10.8	1	1	1	6	0	5	0	8	0	4	2	5	0	
-7	1	18	19	6.2	0	3	0	2	0	1	1	9	0	3	0	0	0	
-8	4	20	24	7.9	0	1	0	1	1	0	1	6	2	4	0	8	0	

12. なぜ避難することになりましたか。

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1. 避難勧告が出たから | 6. ガス漏れで危険だと思ったから |
| 2. 家が使用不能になったから | 7. ガスが使えなかったから |
| 3. 家屋が安全かどうかわからなかったから | 8. 断水していたから |
| 4. 余震が恐かったから | 9. その他 () |
| 5. 擁壁が崩れそうだったから | |

問 12					年齢別回答者数													
総回答者数 (360)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	2	31	33	9.2	1	2	0	4	0	8	0	5	0	7	1	5	0	
-2	14	31	45	12.5	0	2	4	4	1	4	5	9	2	8	2	4	0	
-3	17	74	91	25.3	2	5	3	17	4	21	4	11	3	11	1	9	0	
-4	18	61	79	21.9	0	1	2	6	5	22	4	16	4	5	3	10	1	
-5	3	14	17	4.7	0	0	1	1	0	4	1	5	1	2	0	2	0	
-6	6	21	27	7.5	1	1	0	1	1	5	1	10	2	3	1	1	0	
-7	6	26	32	8.9	1	0	1	7	0	0	1	1	3	9	0	7	2	
-8	9	27	36	10.0	1	0	2	4	1	1	2	2	1	8	2	10	2	
-9	2	10	12	3.3	0	0	0	2	0	3	0	0	2	1	0	4	0	

13. 避難所で困ったことや、うれしかったことがあれば具体的にお聞かせください。

<p>困ったこと</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. トイレの水がない 2. 寒かった 3. 避難所での共同生活 <p>うれしかったこと</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大勢の人が一緒に安心だった 2. 炊出しの暖かい食べ物やおにぎりが配布された 3. 近所の人に親切にもらった

14. 避難所を退所後、現在はどのようにされていますか。

- | | |
|-----------|------------|
| 1. 自宅に帰った | 3. 家を購入した |
| 2. 家を新築した | 4. その他 () |

問 14					年齢別回答者数													
総回答者数 (296)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	46	183	229	77.4	4	5	7	34	12	49	8	41	9	27	6	25	2	
-2	1	11	12	4.1	0	0	0	3	0	3	1	5	0	1	0	2	0	
-3	3	11	14	4.7	0	3	1	2	0	3	2	1	0	0	0	2	0	
-4	10	31	41	13.9	0	2	1	3	1	8	3	8	2	3	3	6	1	

15. 地震のときにあなたのご家族でケガをされた方がいますか。

1. いる
2. いない

問 15					年齢別回答者数													
総回答者数 (2108)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	47	181	228	10.8	2	5	1	26	11	60	12	52	12	25	9	13	0	
-2	329	1551	1880	89.2	16	64	45	438	56	438	70	405	81	253	61	125	21	

16. 家族でケガをされた方にのみお伺いします。医者には行かれましたか。

1. 行った
2. 行くほどでもなかった
3. 行けなかった (理由もお聞かせください)

()

問 16					年齢別回答者数													
総回答者数 (203)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	13	70	83	40.9	0	0	0	11	4	21	4	16	3	14	2	6	2	
-2	20	88	108	53.2	0	3	1	33	4	33	6	26	8	7	1	6	1	
-3	0	12	12	5.9	0	0	0	0	0	6	0	4	0	0	0	2	0	

17. 地震発生後一番知りたかった情報は何でしたか。2つ選んでください。

1. 余震などの今後の見通し
2. 友人・知人の安否
3. 交通機関の復旧見通しや道路状況
4. 水道・ガスの復旧見通し
5. 避難場所の情報
6. その他 ()

問 17					年齢別回答者数													
総回答者数 (4268)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	224	1097	1321	31.0	9	34	24	160	37	331	42	307	60	151	52	108	6	
-2	147	648	795	18.6	11	32	14	197	27	197	33	152	39	103	23	52	7	
-3	108	440	548	12.8	4	15	19	50	23	142	29	142	23	65	10	20	6	
-4	288	1234	1522	35.7	11	50	32	169	48	364	52	346	80	178	65	121	6	
-5	7	31	38	0.9	0	2	2	3	0	8	4	10	0	3	1	5	0	
-6	17	27	44	1.0	8	3	3	6	1	7	2	6	2	5	1	0	0	

18. 一般的な情報はテレビ・ラジオなどから得ましたが、地域の身近な情報はどんな方法で得ましたか。2つ選んでください。

- | | |
|--------|------------|
| 1. テレビ | 5. 回覧板 |
| 2. ラジオ | 6. 市政だより |
| 3. 新聞 | 7. その他 () |
| 4. 広報車 | |

問 18					年齢別回答数													
総回答数 (3985)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	189	693	882	22.1	16	31	24	80	33	149	32	210	48	147	36	73	3	
-2	75	265	340	8.5	7	15	9	50	8	50	14	79	17	57	20	38	1	
-3	195	728	923	23.2	9	27	21	102	34	200	45	202	56	117	30	74	6	
-4	59	371	430	10.8	0	17	9	64	15	148	12	82	12	41	11	18	1	
-5	50	295	345	8.7	1	8	5	55	7	103	9	65	14	41	14	22	1	
-6	89	566	655	16.4	2	15	7	89	12	220	20	142	31	61	17	34	5	
-7	82	328	410	10.3	1	10	15	55	14	104	19	89	21	50	12	18	2	

19. 今後地域の身近な情報を得るために、どの方法が効果があると思いますか。2つ選んでください。

- | | |
|--------|------------|
| 1. テレビ | 6. ミニコミ紙 |
| 2. ラジオ | 7. ケーブルテレビ |
| 3. 新聞 | 8. 町内放送 |
| 4. 広報車 | 9. その他 () |
| 5. 回覧板 | |

問 19					年齢別回答数													
総回答数 (4303)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	155	617	772	17.9	6	20	17	63	24	139	25	168	47	144	36	77	6	
-2	89	276	365	8.5	5	8	13	63	12	63	20	76	18	57	21	35	4	
-3	103	381	484	11.2	6	18	10	48	16	97	28	104	28	69	15	43	2	
-4	153	747	900	20.9	6	17	17	103	22	249	36	207	44	120	28	45	6	
-5	101	575	676	15.7	0	25	6	100	21	164	22	171	25	72	27	42	1	
-6	42	248	290	6.7	3	16	7	58	8	87	4	55	14	23	6	9	0	
-7	43	132	175	4.1	3	9	9	23	12	39	11	37	8	13	0	8	3	
-8	89	552	641	14.9	7	25	16	89	13	171	17	114	17	106	19	46	1	
-9	6	27	33	0.8	0	0	1	1	1	7	2	8	1	5	1	5	1	

20. 非常時の備えである非常袋についてお伺いします。

- | | |
|------------------|--------------|
| 1. 震災前から常に用意している | 3. 今も用意していない |
| 2. 震災後用意した | |

問 20					年齢別回答者数													
総回答者数 (2193)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	26	83	109	5.0	0	0	1	3	2	10	1	25	9	20	13	24	1	
-2	155	812	967	44.1	5	18	21	204	26	204	28	223	47	168	28	84	6	
-3	208	909	1117	50.9	13	50	26	164	40	298	51	228	46	113	32	51	5	

21. 思いがけず便利で役立ったものがありましたら教えてください。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. 電気製品 | 4. ポリバケツ |
| 2. カセットコンロ、プロパン | 5. サランラップ、アルミホイル |
| 3. 風呂の湯 | |

22. 震災後、災害に備えて何か工夫されたことがあれば教えてください。

- | |
|-------------------------|
| 1. 家具の固定 |
| 2. 水のため置き（風呂の水） |
| 3. 懐中電灯、電池、ラジオを置いておく |
| 4. 家具の部屋には寝ない（家具を移動させた） |
| 5. 非常袋（貴重品、非常食） |

23. 今回の震災ではボランティアの方々の活動が復旧に大きく貢献しましたが、あなたはボランティア活動に参加されましたか。

- 参加した
- 参加しなかった

問 23					年齢別回答者数													
総回答者数 (1720)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	49	171	220	12.8	2	4	12	24	13	56	15	54	5	24	2	7	2	
-2	276	1224	1500	87.2	12	50	30	373	48	373	62	326	75	191	49	73	11	

24. ボランティア活動に参加した方のみにお伺いします。どのようなボランティア活動をしましたか。主なものを3つ選んでください。

- 高齢者の世話
- 家屋の撤去や修理
- 水汲み
- 炊出し
- 避難所の世話
- 自宅を避難者に提供
- その他 ()

問 24					年齢別回答者数													
総回答数 (621)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明	
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
-1	9	53	62	10.0	0	1	2	3	2	11	3	19	1	13	1	6	0	
-2	17	34	51	8.2	0	2	3	12	5	12	3	11	5	4	1	2	0	
-3	25	100	125	20.1	1	1	6	12	8	27	5	34	4	19	1	6	1	
-4	18	114	132	21.3	0	5	5	10	5	45	6	38	2	13	0	2	1	
-5	17	76	93	15.0	0	3	6	4	4	30	4	20	2	13	1	5	1	
-6	9	43	52	8.4	0	1	3	5	1	12	2	15	3	7	0	3	0	
-7	17	89	106	17.1	3	0	2	16	3	28	5	28	2	11	2	5	1	

25. ボランティア活動に参加されなかった方のみにお伺いします。ボランティア活動に参加されなかった理由は何ですか。主なものを1つ選んでください。

- | | |
|----------------|----------------------------|
| 1. 自宅の被害が大きかった | 6. ボランティアを必要としていることを知らなかった |
| 2. 体調を崩していた | 7. 家族に幼児・高齢者・病人などがいた |
| 3. 移手段がなかった | 8. ご自身が高齢である |
| 4. 仕事があった | 9. その他 () |
| 5. 必要ではないと思った | |

問 25					年齢別回答者数												
総回答者数 (1631)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
-1	69	344	413	25.3	2	5	5	32	7	105	19	103	21	79	15	19	1
-2	14	103	117	7.2	0	3	1	16	1	16	1	36	7	32	4	8	1
-3	12	58	70	4.3	0	2	0	4	1	23	1	14	10	14	0	1	0
-4	112	324	436	26.7	11	18	24	33	28	139	30	109	14	25	5	0	0
-5	2	10	12	0.7	0	2	0	0	0	1	2	2	0	3	0	2	0
-6	8	43	51	3.1	0	0	0	1	0	20	0	12	5	9	3	1	0
-7	22	298	320	19.6	1	18	3	110	2	70	2	55	6	33	8	10	2
-8	55	157	212	13.0	0	8	0	1	2	1	1	6	20	46	32	94	1
-9	18	121	139	8.5	0	5	3	15	5	39	3	35	5	19	2	7	1

26. ボランティア活動に参加されなかった方にお伺いします。今後機会があればボランティア活動に参加したいと思いますか。

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. 参加したいと思う | 3. 参加したいと思わない |
| 2. 誘われたら参加する | |

問 26					年齢別回答者数												
総回答者数 (1606)					20才代		30才代		40才代		50才代		60才代		70才代		不明
	男	女	計	%	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
-1	113	566	679	42.3	2	22	16	98	24	161	27	184	24	76	20	22	3
-2	111	556	667	41.5	12	25	12	177	13	177	24	130	33	109	17	21	4
-3	68	192	260	16.2	1	13	6	24	11	32	9	45	22	39	19	39	0

27. 「となり」や「地域」について何か感じたことがありましたらお書きください。

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1. 近所で声をかけ合い協力した | 4. 情報をいろんな人より教わった |
| 2. 地域ぐるみで仲良くなれてよかった | 5. 地域は何もしてくれなかった |
| 3. 隣人に助けてもらった (友人、知人) | |

28. 地震の時、高齢者の活動で何か感動したことがありましたらお書きください。

- | | |
|-----------------------------|-----------------|
| 1. 力強さと思いやりを感じた | 4. 情報伝達で元気づけられた |
| 2. 知恵、知識の活用を感じた | 5. おちついて行動をしていた |
| 3. 自分のことは自分で、なるべく他の人をあてにしない | |

29. 最後に、ご記入された方についてお伺いします。

- | | | | | |
|------|---------|----------|------------|--------|
| • 性別 | 1. 女性 | • 家族構成 | 家族の人数 | _____名 |
| | 2. 男性 | | その内65才以上 | _____名 |
| • 年齢 | 1. 20歳代 | 4. 50歳代 | 20才以上65才未満 | _____名 |
| | 2. 30歳代 | 5. 60歳代 | 13才以上19才未満 | _____名 |
| | 3. 40歳代 | 6. 70歳以上 | 12才以下 | _____名 |

20代		30代		40代		50代		60代		70代		不明	合計
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
18	72	49	277	70	528	85	500	103	330	80	172	29	2313

家族数	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	合計
世帯数	189	583	466	622	247	78	28	5	2218
65歳以上	111	430	196	126	114	90	36	7	1110
20～64歳	76	681	1026	1660	722	226	81	17	4489
13～19歳	0	12	61	301	204	67	31	7	683
12歳以下	0	0	79	365	207	81	39	9	780
合計	187	1123	1362	2452	1247	464	187	40	7062

その他ご意見がありましたら、ご自由にお書きください。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 県や市の適切な情報、伝達が欲しい 2. 行政の対応、処置が悪い（義援金の配分、損壊の判定） 3. 明石市の被害状況があまり報道されなかった 4. 近所づきあい、地域活動の大切さ 5. 女性の会の活動に敬意 |
|---|



近くの体育館で夜を明かす被災者たち
 || 朝霧北コミセンで

実行委員・協力員

(五十音順)

実行委員長 岡田 一文^{ひよみ}

副委員長 山下 麗子

山本 正好^{まさこ}

▽朝霧町三丁目

網谷 泰子、構井 和子、国光たつ子、齋藤恵美子、橘 秀子

立石 妃富

▽朝霧台

今市 千里、後藤弥恵子、杉田つや子、須田 郷子、水野 聰子
森 佳興子、森本江美子、吉田ちえみ、石原智恵子、奥村 良子
神田 怜子、佐々木祥子

▽朝霧山手町

大迫 盈、柏木 怜子、加藤千賀子、菅 小夜子、杉本 京子
田端 節子、林 芳子、林田 幸子、藤原スミ子

▽中朝霧丘

赤松美津子、門田 博子、辻 悦子、藤本ふじ子、室井志保子

▽東朝霧丘

大榮麻紗子、荻谷 洋子、高木マリ子、辻本 博子、水島 昌子

▽大蔵谷清水

柏木 真弓、佐藤 寿子、菅原 理代、高橋 花子、西川 信子
平屋 信子、二星美知子

▽朝霧北町

桑原 京子

▽大蔵谷奥東山

堂本 艶子

一口感想

○多くの方々のご協力が、実や花となって、返り咲きますように。

○皆様のご苦勞を思うと、実行委員でありながら、お手伝いに行くことができず、心苦しくなりません。

○建て替え、修理と日々落着かないなかを、原稿を戴き、感謝しております。

○高齢のため、わずかのお手伝いしかできませんでしたが、よい経験でした。

○あまりお手伝いはできませんでしたが、朝霧校区の歴史として残ればと思います。

○自分を見直す機会を与えられ、また、被災者の意見を知ることができよかったです。

○アンケートを、女性の会員と自治会の世話人との協力で大変でした。

○微力でしたがお手伝いの種をまき花が楽しみ。ご協力下さいました方々に感謝の一言です。

○震災から一年、私たちは、自然の力の大きさと人間の優しさやたくましさを知りました。

○皆さんが力を合わせてこそ、出来るものだと思います。

○皆のおもいを束ねた記録誌を手にする喜び、みんなで共有したい。

○多くの人と知り合え、勉強もでき、よい機会となつて心の財産が増えました。

あ と が き

大震災から一年余り経って、いづらか当時を振り返るゆとりもできた今、女性の視点から校区の記録を残したい。震度計がなく報道されることの少なかった明石の、朝霧校区に住む者の思いや、記録を寄せ集めてみました。

私たち実行委員は、手記や資料提供の依頼、特に三千六百世帯へのアンケートは設問の検討・配布・回収そして手作業の集計とそれぞれが分担し、責任をもってたずさわってきました。大変有意義な意見や心打たれる文章もありましたが、制約のある紙面で如何にわかりやすく掲載できるかに心をくぐりました。

できあがってみれば拙い一冊ですが、内には、汗と涙と、協力的だった家族への感謝が秘められています。お汲みとりいただければ幸いです。

この震災で人は決して一人ではないこと、小さな力も寄せれば大きくなる事を学んだ私たちです。この震災の体験をもとに、さらにぬくもりのある地域へ向って、住民の一人ひとりが手をつなぎあっていくことを忘れないためにも、この一冊を書棚の片隅にでも置いていただければ、こんな嬉しいことはありません。

編集に際しましては、校区の皆様のご協力はもとより、神戸新聞社明石総局長谷口秀雄さま、神戸新聞総合印刷前田知茂さま、また行政他、各方面のご指導、ご助言を賜りました。ここに心より感謝し、厚くお礼申し上げます。

「大変やったなあ 朝霧も」

発行日 平成8年3月31日

発行者 朝霧校区女性の会
震災記録誌作成実行委員長
岡田 一文

明石市朝霧台3776-122
TEL(078)911-9181

印刷所 (株)神戸新聞総合印刷
神戸市中央区東川崎町1-5-7

